

**平成30年度大学教育再生戦略推進費
「大学の世界展開力強化事業」計画調書
～ 米国等との大学間交流形成支援 ～**

[基本情報:タイプA]

1. 大学名 <small>(○が代表申請大学)</small>	鹿児島大学				
2. 機関番号	<small>代表申請大学</small>	17701			
3. 主たる交流先の相手国	米国				
4. 事業者 <small>(大学の設置者)</small>	ふりがな まえだ よしざね (氏名) 前田 芳實 (所属・職名) 学長				
5. 申請者 <small>(大学の学長)</small>	ふりがな まえだ よしざね (氏名) 前田 芳實				
6. 事業責任者	ふりがな ばば まさのり (氏名) 馬場 昌範 (所属・職名) グローバルセンター長				
7. 事業名	【和文】 米国から鹿児島、そしてアジアへー多極化時代の三極連携プログラム				
	【英文】 US-Kagoshima-Asia Triad Program in Multi-Polar World				
8. 取組学部・研究科等名 <small>(必要に応じ[]書きで課程区分を記入。複数の部局で合わせて取組を形成する場合は、全ての部局名を記入。大学全体の場合は全学と記入の上[]書きで全ての部局名を記入。)</small>	<small>学問分野</small>	<input type="radio"/> 人社系 <input type="radio"/> 理工系 <input type="radio"/> 農学系 <input type="radio"/> 医歯薬系 <input type="radio"/> 看護・医療系 <input checked="" type="radio"/> 全学 <input type="radio"/> その他			
	<small>実施対象(学部・大学院)</small>	<input type="radio"/> 学部 <input type="radio"/> 大学院 <input checked="" type="radio"/> 学部及び大学院			
[法文学部、医学部、共同獣医学部、農学部、理学部、工学部、大学院理工学研究科]					

9. 海外の相手大学			
	国名	大学名	部局名
1	米国	ジョージア大学	獣医学部
2	米国	ノースダコタ州立大学	農・食品システム・自然資源学部、工学部
3	米国	サンノゼ州立大学	人文学部
4	米国	オクラホマ州立大学	農学・自然資源学部
5	米国	タスキギー大学	建築学部
6	米国	テキサスA&M大学	農学・生命工学部
7	米国	ベレアカレッジ	看護学部
8	インドネシア	ディポネゴロ大学	工学部
9	韓国	中央大学校	看護大学
10	中国	湖南農業大学	全学
11	台湾	国立成功大学	工学部
12	台湾	国立中興大学	獣医学部
13	タイ	メーファールアン大学	農産学学部
14	タイ	チェンマイ大学	農学部
15	タイ	ブーラパー大学	人文社会学部

10. 連携して事業を行う機関(国内連携大学等)			
	大学等名	取組学部・研究科等名	
1	なし		2

(大学名:鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

11. 「学校教育法施行規則」第172条の2第1項において「公表するものとする」とされた教育研究活動等の状況について、公表しているHPのURL

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/activity.html>

12. 本事業経費 (単位: 千円) ※千円未満は切り捨て

年度(平成)	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	合計	
事業規模 (総事業費)	31,950	50,730	51,620	53,480	53,740	241,520	
内訳	補助金申請額	25,000	22,500	20,250	18,225	16,402	102,377
	大学負担額	6,950	28,230	31,370	35,255	37,338	139,143

13. 本事業事務総括者部課の連絡先

部課名			所在地		
責任者	ふりがな (氏名)			(所属・職名)	
担当者	ふりがな (氏名)			(所属・職名)	
	電話番号			緊急連絡先	
	e-mail(主)			e-mail(副)	

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

質の保証を伴った交流プログラムの目的と内容 【1ページ以内】

① 交流プログラムの目的・概要等

【目的】魅力的な受入プログラム開発により、米国からの留学生受入を増加

鹿児島大学はグローバル教育の柱として、2014年度より P-SEG (Educational Program for Spirit of Enterprise in Global Context) 「進取の精神グローバル人材育成プログラム」を実施し、海外への学生派遣数を増加させてきた(2017年度実績 296名)。本事業では、既存の派遣プログラムを基盤に新たに受入プログラムを開発し、これまでの一方向交流(P-SEG)から双方向交流(P-SEG Interactive)へと、本学のグローバル教育を大きく発展させる。本州南端に位置し、アジアの諸地域に開かれた鹿児島の自然環境や地域社会をフィールドに、物理的な最端性や文化的な境界性を特徴とする受入プログラムを開発し、米国の学生に鹿児島の魅力を伝え、米国からの留学生の受入数を増加させることを目的とする。さらに本事業終了後の上位目標として、受入プログラムの運営を通して外国人留学生の受入体制を整え、教育の国際通用性を高める。

【概要】米国から鹿児島、そしてアジアへ—多極化時代の三極連携プログラム

「パックス・アメリカーナ」とよばれた時代が終わり、急速に世界が多極化へ向かう中、新たな価値の創造と多国間で共有される民主的な秩序の形成が必須となっている。それらは欧米とアジアと日本の学生がお互いを理解し、共通課題に対し協働し、議論を繰り返しながら生み出していく以外にない。本プログラムは、鹿児島大学を中心に、米国の大学(ジョージア大学、ノースダコタ州立大学、サンノゼ州立大学、オクラホマ州立大学、テキサス A&M 大学、タスキーギ大学、ベリアカレッジ)と、アジア諸国(韓国、台湾、中国、タイ、インドネシア)の大学をつなぐ**三極連携**によって、オンライン協働学習(COIL)や学生の派遣・受入を行う。鹿児島大学の全学部が参与し、総合大学の強みを生かして多分野にわたるコースを開発する。全コース共通のテーマとして「多極化する世界をつなぐ」を掲げ、本学は米国の大学に対してアジアへの玄関口としての役割を担う。各コースでは、米国と鹿児島とアジアの学生が意見を交わし、世界が抱える課題に対して協働で調査研究を行う、課題解決型のリサーチ・プログラムを実施する。

本事業で開発する**三極連携リサーチ・プログラム**は、世界の課題に挑む**3分野 8コース**からなる。法文・医・獣医を中心とする「文明と生態」分野に①日本文化論、②島嶼へき地医療、③臨床獣医学の3コースを置く。農水系の「産業と経済」分野に④食料生産、⑤食の安全、⑥食と健康の3コースを設置する。最後に理工系の「環境と技術」分野に⑦ナノバイオ、⑧環境建築デザインの2コースを置く。鹿児島の地理的位置、自然環境、アジアとの古くからの交流、文化の混交など、いずれも最端性や境界性に焦点をあてた内容となっており、地域社会の持続可能な発展を目指す。本プログラムに参加する学生は、三極連携という学習環境において比較の視点や多面的分析力を得ることができ、グローバルな状況で議論し、行動する力を身につけることができる。特に米国の学生は、鹿児島をフィールドとするコースに参加することで、日本の政治文化の中心である東京や京都では決して得られない体験をし、地域社会の多様性や文化の独自性について学ぶとともに、視野をアジアへと広げることが可能になる。

【養成する人材像】

日本人学生：グローバルな視点とネットワークを武器に、世界が抱える課題に取り組む人材。価値観の大きく異なる欧米とアジアをつなぎ、民主的かつ協調主義的な国際秩序の形成に寄与する人材。

米国人学生：アジアに目を向け、世界の多様性を尊重する人材。欧米中心の価値観を乗り越えて、多極化時代にふさわしい国際秩序の形成と維持に大国としての役割を果たすことができる人材。

【本事業で計画している交流学生数】各年度の派遣及び受入合計人数(交流期間、単位取得の有無は問わない)

(単位：人)

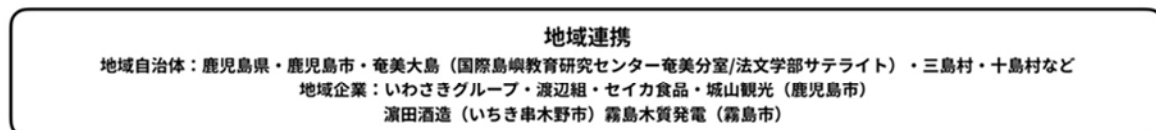
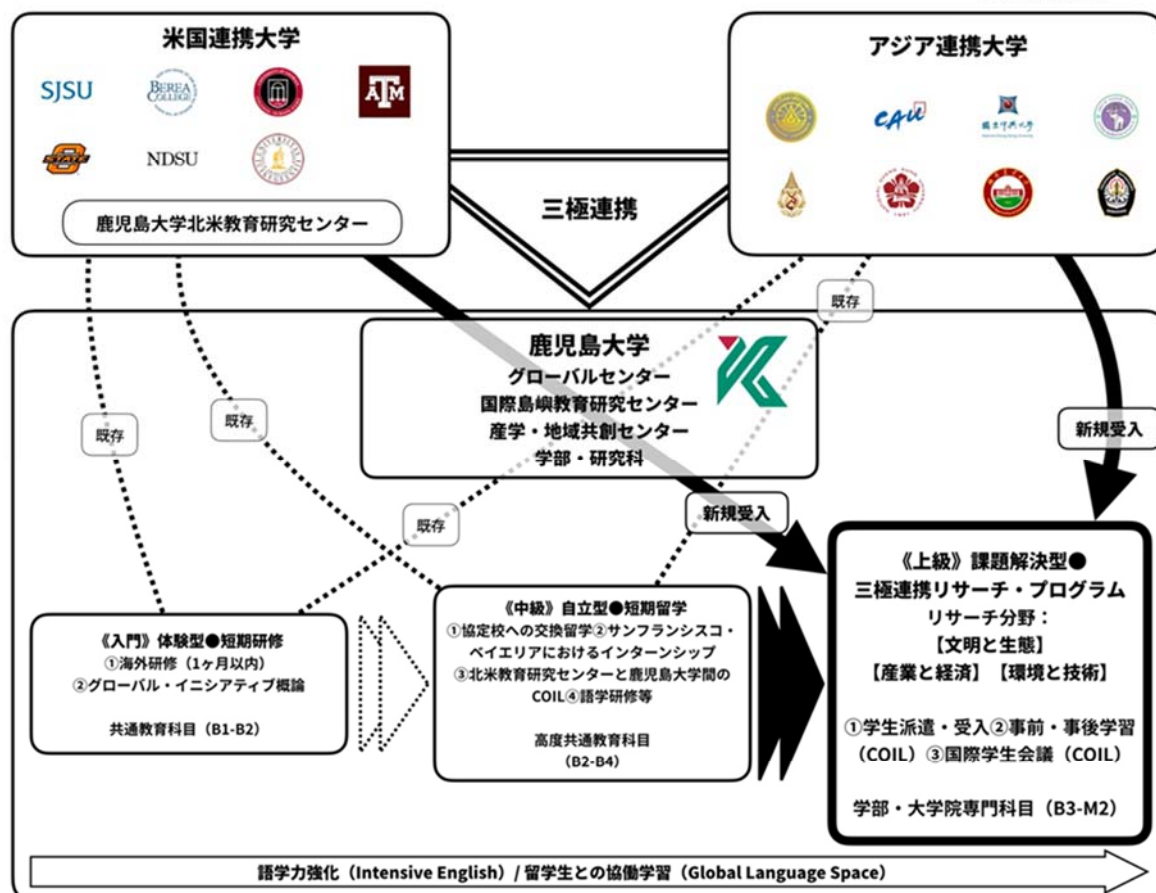
平成 30 年度		平成 31 年度		平成 32 年度		平成 33 年度		平成 34 年度	
派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
8	44	118	72	113	80	122	80	106	84

② 事業の概念図 【1ページ以内】

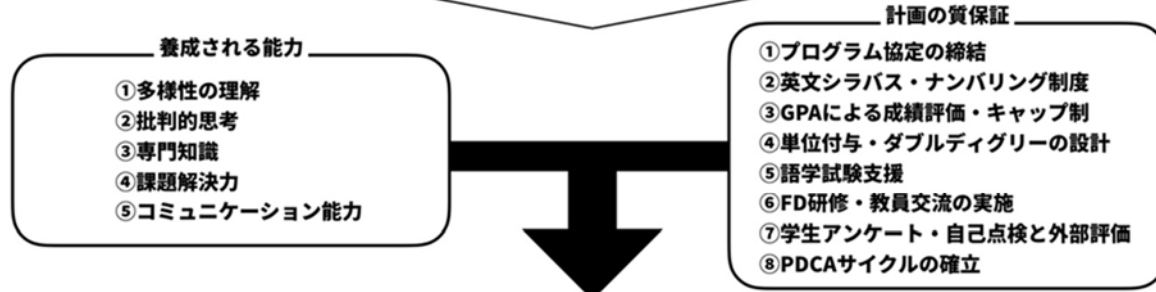
鹿児島大学のグローバル人材育成プログラム

P-SEGからP-SEG Interactiveへ

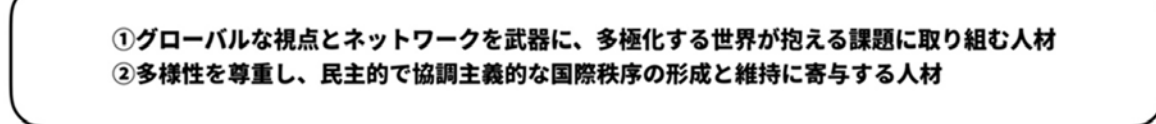
*点線が既存のプログラム
太い矢印が、本事業によって
特に強化される部分



プログラム・アウトカム



人材育成



③ 国内大学等の連携図 【1ページ以内】

【国内の他大学等と連携を行わない理由】

1. 鹿児島大学は9学部10研究科を有する総合大学であり、約1万人の学生が学んでいる。このうち年間約300人の学生を、海外研修や留学・インターンシップ等の単位化された科目として海外に派遣している。本事業で提案する「米国から鹿児島、そしてアジアへ—多極化時代の三極連携プログラム」（以下、「三極連携リサーチ・プログラム」）は、既存の派遣プログラムを基盤としており、米国の大学から学生を受け入れるために受入プログラムを新規開発するものである。これまで派遣プログラムの運営を全学連携によって行ってきたことから、本事業における他大学との連携は、受入プログラムに偏りを生じさせる恐れがあり、単独での実施がふさわしいと判断した。
2. 受入プログラムの内容を鹿児島県の物理的最端性と文化的境界性を活かしたものとする、独自の自然、文化、社会をもつ鹿児島県の離島を主な研究教育のフィールドとして想定していることから、他大学との連携よりも地域の自治体や企業との連携によって、質の高い受入プログラムの開発、実施を行うことがふさわしいと判断した。
3. 本事業を利用して、本学が展開しようとする新しいグローバル教育 P-SEG Interactive（双方向型の交流）は、学部1年次から始め、医学部・歯学部・獣医学部については6年次まで、他学部については修士2年次までを視野に入れている。学年に応じて、海外での活動を入門（体験型）から中級（自立型）、上級（課題解決型）へと段階的にステップアップしていく構成になっている。入門と中級は、既存プログラムがあり、本事業では、上級（課題解決型）のリサーチ・プログラムを新規開発する。よって、対象が学部3年次以降となり、県内短期大学や高等専門学校等との連携はふさわしくない。

④ 交流プログラムの内容 【2ページ以内】

【実績・準備状況】

● 北米に海外拠点の設置

本学は、2004年に産学連携の拠点としてVBLシリコンバレーオフィスを米国に設置し、2008年には全学の海外拠点として北米教育研究センター（以下、北米センター）を設立した。これまで14年間に渡り、サンフランシスコ・ベイエリア地区を中心に教育・研究・社会貢献活動の推進を行ってきた。米国内に拠点をおく日本の大学間ネットワークであるJUNBA（Japanese University Network in the Bay Area）には、設立時より参与している。主な活動として学生の海外研修や職員研修を行い、多くの学生や教職員に米国での活動機会を提供してきた実績がある。

● COIL実績と準備状況

本学法文学部人文学科には、2012年から6年間継続して米国のサンノゼ州立大学（SJSU）との間でCOILによる合同授業を実施してきた実績がある。また、2010年から2013年まで、北米センターと本学の共通教育科目とをオンラインで結び、北米で活躍する専門家（外交官、会計士、大学教授、教育者、エンジニア、コンサルタント、通訳者、ジャーナリスト等）による講義を配信した実績がある。最後に、2017年12月に関西大学主催の「KU-COIL ワークショップ・国際シンポジウム」に本学教員が参加し、COIL科目を開発するFDの準備をしている。

● 学生交流（派遣）の実績

本学は、2010年度より「鹿児島大学学生海外研修支援事業」として学長裁量経費によって海外研修科目（集中講義）を支援してきた。2011年度からは「鹿児島大学学生海外留学支援事業」も開始し、大学間交流協定に基づく留学の支援も行っている。2014年度にはグローバル教育の柱としてP-SEG「進取の精神グローバル人材育成プログラム」を立ち上げ、1-2年次向けの体験型海外研修、2年次以降には自立型の海外インターンシップや交換留学、3年次以降から大学院レベルには、専門科目に特化した海外研修も実施してきた。又、英語力強化コースの開講や留学生とのコミュニケーション機会の提供、留学相談などのサポートも提供し、昨年度は296名の学生を海外協定校等へ派遣した。

● 北米における職員研修の実績

本学は、2005年より北米センターにおいて職員を対象とした研修を行い、現在までに合計30人を米国に派遣した。職員研修は、職員個人の語学能力や海外対応能力を高めるだけでなく、本学学生（留学生含む）が質の高いグローバル教育を受けるために、また、本学教員が研究・社会貢献を国際的に行うために必要な事務的支援を行う実践的能力の育成を目的としている。2010年度から2015年度までは語学研修と北米センター運営業務を併せもつ駐在型の「事務系職員海外実務研修」（3ヶ月-1年）を実施し、合計12名を派遣した。2018年度からは、本学の知的財産（特許をもつ研究）を米国の企業や大学に紹介し、共同研究等へと発展させるための実務を学ぶ研修を始める準備がある。

● 北米及びアジアにおける帰国留学生のネットワーク

本学は、2010年より帰国留学生等に「鹿児島大学友好大使」を委嘱し、海外で本学の教育や研修を推進する人的リソースのネットワークを行ってきた（現在146名委嘱）。今回、主な対象となる北米地域には20名の友好大使が委嘱されており、本学がサンフランシスコ・ベイエリアで実施しているインターンシップ・プログラムは、彼らの協力によって受入機関の確保が可能となっている。友好大使は、現地情報の提供、インターン受入先の紹介、直接の教育指導までを担っている。本学が強みとするアジア地域には、さらに多くの本学卒業生が活躍しており、米国の大学をアジアへとつなぐ際に強力な支援が期待できる。

● 「三極連携リサーチ・プログラム」の基盤となる派遣プログラム(H29年度実績)

授業科目名	学部・大学院別	実施部局	参加学生数	日数	派遣国	派遣先大学	単位	協定	JASSO奨学金
海外研修基礎コースinカリフォルニア	共通教育科目	北米教育研究センター	8	15	米国	SJSU	2	有	有
北米におけるグローバル人材育成	共通教育科目	グローバルセンター	10	23	米国	NDSU	2	有	有
海外研修基礎コースinハワイ	共通教育科目	教育センター	15	12	米国	UHManoa	2	無	有
台湾の歴史と多様性を学ぶ	共通教育科目	グローバルセンター	5	12	台湾	NCKU	2	有	無
社会システム・政策研究	共通教育科目	グローバルセンター	10	10	タイ	BUJ	2	無	有
海外短期留学1	学部（専門教育科目）	法文学部	13	25	米国	SJSU	4	有	有
獣医学特別研修	学部（専門教育科目）	獣医学部	1	15	米国	UGA	2	有	有
獣医学特別研修	学部（専門教育科目）	獣医学部	3	16	台湾	NCHU	2	有	有
小児看護学概論	学部（専門教育科目）	医学部保健学科看護学専攻	6	6	大韓民国、米国	CAU、USF	2	有	無
太平洋島嶼学特論	大学院共通教育科目	国際島嶼教育研究センター	5	8	米国（グアム）	UOG	2	有	無

【計画内容】

● 全体構想

事業概念図 (P4) に記した通り、鹿児島大学は本事業により、本学のグローバル教育を派遣中心の一方
向交流 (P-SEG) から双方向交流 (P-SEG Interactive) へと展開することを企図している。P-SEG Interactive
は、入門から中級、上級へと海外での活動を学年に応じてステップアップしていく形をとる。入門 (体験
型) は、1-2 年次向けの全学共通教育科目として実施している既存の海外研修プログラム (集中講義) を活
用し、事後学習の「グローバル・イニシアティブ概論」に COIL を採用して双方向交流を行う。中級 (自立
型) についても、既存の交換留学プログラムと本学北米センターで実施しているインターンシップを促進
する。高度共通教育科目として単位化し、全学の学生が受講できるようにするほか、北米センターの現地
オフィスで本学の授業をオンライン受講できるよう設備を整え、留学中も単位を取得できるようにする。
上級 (課題解決型) については、下記の通り、本事業で「三極連携リサーチ・プログラム」を開発し、派
遣と受入、そして COIL 型科目による双方向交流を実現する。最後に、プログラム参加学生の語学学習を
サポートするために、今年度で 5 年目になる Intensive English Course の運営を拡充する。現在の初級と上級
に加えて中級を増やし、受講生の能力レベルに合わせてより細かく対応できるようにし、語学力の向上を
図る。外国人留学生と日本人学生とのコミュニケーションや協働学習の場を提供する Global Language Space
についても運営を継続し、短期で受け入れる学生も活動に参加できるようにする。

● 持続可能な発展に挑む「三極連携リサーチ・プログラム」3分野8コース

分野	コース	リサーチ課題	米国	アジア
文明と生態	日本文化論	南からの日本、島嶼学、地域インターンシップ	サンノゼ州立大学	プーラパー大学
	島嶼へき地医療	島嶼部やへき地における医療、国際看護教育	ベレアカレッジ	中央大学校
	臨床獣医学	ボーダレス感染症、人畜共通感染症	ジョージア大学	国立中興大学
産業と経済	食料生産	グローバル牛肉生産、酪農のAI化	テキサスA&M大学	チェンマイ大学
	食の安全	品質管理 (HACCP/GMP)、鮮度保持技術	オクラホマ州立大学	メーファールアン大学
	食と健康	機能性食品、伝統食、食の多様性	ノースダコタ州立大学	湖南農業大学
環境と技術	ナノバイオ	バイオテクノロジー、ナノ材料、高分子	ノースダコタ州立大学	国立成功大学
	環境建築デザイン	熱帯/亜熱帯における風土建築の相互理解と応用	タスキーギ大学	ディポネゴロ大学

本事業で開発する「三極連携リサーチ・プログラム」では、世界共通の課題である持続可能な発展に挑
む**全3分野8コース**を開発する。各コースは、鹿児島大学を中心に米国の大学とアジアの大学との三極連
携により実施し、国際的かつ学際的な教育研究を行う。①日本文化論では、南からの伝播に焦点をあて従
来の単一文化論とは異なる、南から見たもう一つの日本文化論を提示する。南西諸島でのフィールドワ
ークや地域インターンシップの機会も提供する。②島嶼へき地医療では、看護学のアプローチからへき地医
療の問題を扱う。三島・十島でフィールド調査を予定している。③臨床獣医学は、ボーダレス感染症につ
いて病院実習と国際間の症例比較を行う。④食料生産、⑤食の安全、⑥食と健康は、いずれも食をめぐる
グローバル課題を取り上げる。食料基地鹿児島をフィールドに牛肉のブランド化戦略、AI 導入による酪農
農家の生き残り戦略、食品の品質管理や鮮度保持技術、島嶼の食文化と長寿の関係などを学ぶ。⑦ナノバ
イオと⑧環境建築デザインは、地域の環境に適した新しい技術や素材の研究開発と教育を行う。コース
には学生の派遣と受入だけでなく、連携三大学が持ち回りで国際シンポジウムを開催し、学科全体で交流す
る計画もある。各コースの運営拠点は各学部研究科に置き、グローバルセンターがプログラムを統括する。
北米におけるプログラム実施拠点として北米教育研究センター、鹿児島県離島でのプログラム実施拠点と
して国際島嶼教育研究センター・奄美分室、地域連携の拠点として産学・地域共創センター (旧産学官連
携推進センターおよび旧かごしま COC センター) が参与する。

● 「三極連携リサーチ・プログラム」のフィールドと地域連携先

フィールド調査における自治体との連携：鹿児島市、奄美大島 (国際島嶼教育研究センター奄美分室、法
文学部サテライト)、三島村、十島村、徳之島、屋久島、種子島、甌島など

インターンシップにおける地域企業との連携：いわさきグループ、渡辺組、セイカ食品、城山観光 (鹿児
島市)、濱田酒造 (いちき串木野市)、霧島木質発電 (霧島市) 他

● 参加大学全学生によるオンライン国際学生会議 (International Student Congress on Line)

全 8 コースに参加する学生がオンラインを用いて一堂に会し、世界の課題について議論する国際学生会議
を年に一度、学生主体で開催する。

⑤ 質の保証を伴った魅力的な大学間交流の枠組み形成 【2ページ以内】

【実績・準備状況】

● 大学間協定の締結

連携大学はすべて IAU の WHED 掲載大学である。全 15 大学（米国 7、アジア 8）のうち、9 大学（米国 3、アジア 6）との間に学術交流協定がある。残りの 6 大学についても締結を積極的に進める。

● 教育制度の国際標準化

鹿児島大学では、各学部で教務委員会の主導のもとシラバスを作成しており、授業内容、学修目標、授業計画、必要なテキストや参考図書等に加えて成績評価方法やオフィスアワー等も記載し、活用しやすいように工夫している。GPA は全学部で導入しており、全学部でキャップ制を採用している。20 単位から 30 単位を各学期の上限として、学習時間と単位取得のバランスを適正化している。2016 年度より全学でナンバリング制度を導入し、授業科目の階梯性と国際通用性の確保に努めている。

● 単位付与・相互認定

海外研修科目（派遣）は本学のカリキュラムの中で単位化されており、交換留学は派遣先大学で取得した単位の互換が可能である。受入プログラムには、修了証を発行している。また、全学学部生を対象とする学部横断型教育で地域活性化に貢献する人材の育成を目指す「地域人材育成プラットフォーム（2017 年度開始。文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」）に、2018 年度「かごしまグローバル教育プログラム」を開設した。このプログラムの修了要件単位として、本事業の中級レベルにあたるインターンシップや派遣留学プログラムの一部を高度共通教育科目として単位化する準備がある。

● 海外相手大学との教員交流、FD による教育力向上

2009 年から学長裁量経費により若手教員海外研修支援事業を実施し、海外大学の教員との研究交流や国際共同研究を推進してきた。2017 年度までに 53 名の教員を海外の大学等研究機関に派遣した。昨年度より若手教員向けに英語での教授法を学ぶ研修も開始し、1 年間に 5 名を派遣した。本事業開始にあたり、2018 年 10 月にニューヨーク州立大学で実施される COIL の研修を授業担当の教員が受講する。また、渡米の際に連携大学を訪問し、カリキュラムの詳細について協議するなど、準備を整える。

● 国際公募による外国人教員の招聘

適宜、国際公募により外国人教員を採用している。全専任教員数に占める外国人教員の割合は 2017 年度で 3%である。また、外国の大学で学位を取得した教員及び外国で教育研究歴のある教員の割合は、2013 年度で 18.7%であった。

【計画内容】

● 「三極連携リサーチ・プログラム」の質保証

鹿児島大学は、地域課題に挑戦する人材の育成、及び、地域の特色を活かした国際水準の研究を推進し、運営費交付金による戦略的な機能強化を行なっている。①「南九州・南西諸島を舞台とした地域中核人材育成を目指す新人文社会系教育プログラムの構築」（法文学部）、②「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点整備」（国際島嶼教育研究センター）、③「奄美大島を拠点とした離島へき地医療人材育成の推進」（医・歯学部）、④「世界水準の獣医学教育研究拠点を基軸とした畜産地・食料基地としての南九州の地域活性化に資する人材育成」（獣医学部）、「大学院熱帯水産学国際連携プログラム推進のための機能強化」（水産学研究科）、⑤「VERA を初めとする九州最大の天体観測施設を活かした国際的に卓越した天の川銀河研究の推進」（理工学研究科）など、これら本学が戦略的に取り組んでいる事業を活用して、米国とアジアの大学をつなぐ「三極連携リサーチ・プログラム」を構築する。各学部研究科は、国際認証の取得や自治体との連携、授業の英語化などを進めており、質の高いプログラムを参加学生に提供することができる。

● 魅力的な大学間交流

本プログラムの魅力は、第 1 に米国と日本の二者間の関係に留めるのではなく、米国と鹿児島とアジアの三極をつないで交流する点にある。第 2 に鹿児島の物理的最端性や文化的境界性を活かした、鹿児島でしか学べない内容とする点にある。「文明と生態」「産業と経済」「環境と技術」の 3 分野で鹿児島地域をフィールドに地域社会と連携して、地域の持続可能な発展を目指す。これらは地域独自の課題であると同時に、世界が直面しているグローバル課題でもあり、他地域との比較や多面的視点によって解決策を導き出していく必要がある。三極連携により、鹿児島大学は米国の学生と日本の学生とアジア諸国の学生が、新しい価値の創造と秩序の形成に共同で取り組む場を提供することができ、「多極化する世界をつなぐ」役割を国際社会において果たすことができる。

● **プログラムの発展性（ダブルディグリーの設定）**

本プログラムで実施する学生交流（派遣・受入）の事前事後学習として行う COIL 型科目を、大学院科目に関しては、大学院横断的教育プログラムの特別コースに位置付ける。現在、「島嶼学教育コース」「環境学教育コース」「食と健康教育コース」「水教育コース」「エネルギー教育コース」の 5 コースがあり（<https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/30rishuu.pdf>）、これらは本学が重点領域として指定する 5 分野の研究を背景として開設されている。大学院横断的教育プログラムは、各研究科で修了要件とみなす単位数が定められており、例えば、農学研究科と水産学研究科と理工学研究科等は 10 単位まで、人文社会科学研究科は 8 単位まで取得することができる。大学院横断のコースとすることで、本学の大学院生が研究科に関わらず、関心のあるコースに参加できるようになるメリットがある。また、オンライン教育を行うことにより、海外連携大学の学生が現地にいながら、鹿児島大学の修士課程の単位を取得できるようになる。大学院横断的教育プログラムをオンライン受講して単位を取得した後に、鹿児島大学の希望の研究科に 1 年間留学し、専門科目を受講することで修士の学位が取れるダブルディグリーへ将来的に発展させることができる。

● **カリキュラムとシラバスの明示化、透明性・客観性の高い成績管理**

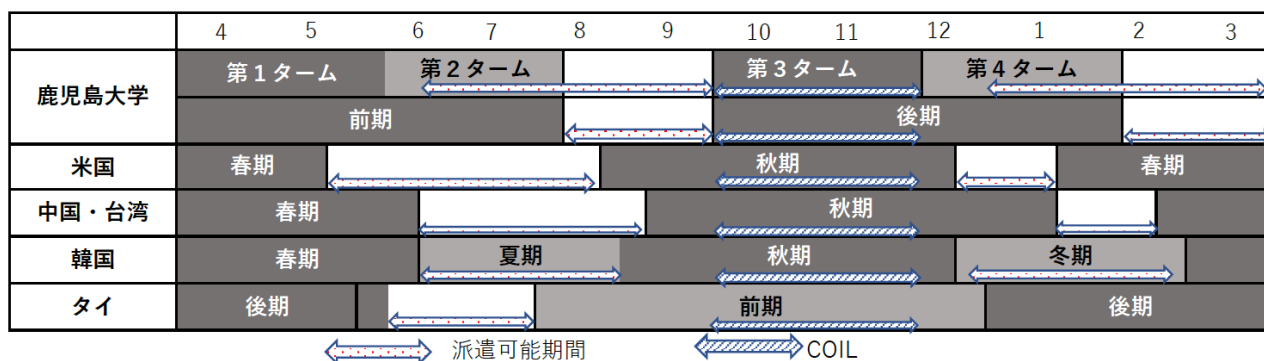
本事業で実施する海外連携校からの受入プログラムと事前事後学習科目（COIL 型科目）のシラバスを英語化する。シラバス項目では、“Course Requirements”“Learning Outcome”を詳細に記載すると共に、“Topics, Readings, Assignments, Deadlines”を明示する。課題解決型の研修について、特に実験系やフィールドワークを含む科目について、パフォーマンス評価の基準を策定し、習得する技能別の評価基準を定めて“Grading Policy”として記載する。

● **「三極連携リサーチ・プログラム」協定を締結**

2019 年 2-3 月に米国及びアジアの連携大学から連携教員を招聘し、多極化時代における「三極連携リサーチ・プログラム」のキックオフ・シンポジウムを開催し、本プログラムにおける研修内容や単位化、単位互換等について定めたプログラム協定（合意書）を締結する。

● **アカデミックカレンダーの配慮**

米国の連携校からの受入は 6-7 月に行い、本学からの派遣を 8-9 月、または 2-3 月に実施する。アジアの連携校についても連携校のカレンダーに合わせて受入・派遣を行い、COIL 型授業を 10 月から開始することで、米国・アジア・日本の三極連携が可能になる。



● **COIL 型教育の活用**

派遣や受入の事前事後学習を相手大学とオンラインでつなぎ共同で行う。連携校との共通課題を設定し、共同部分（全 15 コマのうち 5~7 コマ）について英語での講義や学生によるプレゼンテーション、ディスカッションを行う。時差のために同時開催ができない授業については、英語のオンライン教材を配信し、事前事後学習に使う。両大学の学生による協働作業やディスカッションは、派遣又は受入プログラムの中でも実施する。成績評価については両大学の担当教員が協議して行い、各大学で単位認定する。COIL に用いる英語オンライン教材の作成（コンテンツの英文校閲、撮影及び編集）も本事業の中で取り組む。

海外研修や留学の事前事後学習を正規科目の中でシラバスに基づいて実施することに加え、本事業では年に一回学生主体で **International Student Congress on Line**（オンライン利用の国際学生会議）を開催し、全コースの学生が参加し、ポスター・セッションやプレゼンテーションを通じて、それぞれの研修成果やインターンシップの成果、留学体験などを発表し、お互いに交流し、議論する機会をもつ。

達成目標 【①～④合わせて3ページ以内】
① 将来の関係を見据えた、両国の連携強化に資する目標について
(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)
<p>鹿児島大学は、第3期中期計画に【B34】H33年度までに外国人留学生数をH26年度実績(277人)の1.2倍(332名)にする目標を掲げている。しかしH30年5月1日現在で300人となっており、32人が不足する厳しい状況にある。本事業で研究科・研究室をベースに双方向交流をおこなう「課題解決型リサーチ・プログラム」を開発し、事前・事後学習としてCOIL型の英語授業を導入することで、研修に参加する海外連携大学の学生に、鹿児島大学の研究室へ半年以上の留学をする動機と機会を与える。本学は2010年度に学生海外研修支援事業を開始し、短期派遣を拡充することによって、2016年度までに半年以上の長期留学に行く学生数を3倍以上に増やした実績がある。短期で受け入れる学生数は中期目標の達成には直接つながりがないように見えるが、留学生数増大の強い推進力となることが派遣プログラムで証明されている。本事業計画全体の達成目標として、<u>外国人留学生数332名をH33年までに達成し、H34年までにCOIL型科目において共通のフレームワークによる成績評価(基準の明確化)や単位化を実現し、成果として本学の教育の国際通用性を高める。</u>鹿児島地域の問題をテーマとする課題解決型リサーチ・プログラムへの受入から始め、連携校の学生を留学へと導き、将来的には親日派の育成、日・米・アジアの連携に基づいて、世界が抱える課題の解決に寄与する人材の育成を目標とする。</p>
(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)
<p>今回の事業で連携先とする米国8大学との学生交流の実績は、2010年から2017年までの総計で派遣335名に対し、受入はわずか5名である。一方、アジアの連携大学との交流は、同じ期間の派遣68名、受入69名でバランスが取れている。本事業でH31年度までに、連携大学と双方向の交流(派遣・受入)をおこなう8コースを開設する。さらにH31年度までに、グローバセンターで本事業“US-Kagoshima-Asia Triad Program in Multi-Polar World”を紹介する英語冊子を発行し、連携大学の学生に情報提供する。これらの取り組みによって派遣数と受入数のバランスを改善し、H31年度までに米国から50名の受入を行う。</p>
② 養成しようとするグローバル人材像について
(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)
<p>本事業において養成しようとするグローバル人材像は、グローバルな視点とネットワークを武器に、世界が抱える課題に取り組む人材、価値観の大きく異なる欧米とアジアをつなぎ、民主的かつ協調主義的な国際秩序の形成に寄与する人材である。具体的な能力としては、①自己の立脚する歴史と文化の価値を深く認識すると共に、<u>他国の文化やその独自性・多様性を尊重し、自国を相対的に捉えたうえで有効なコミュニケーションを行うことができる能力、</u>②グローバル化する世界の現状を認識し、「社会の持続可能な発展をいかに導くか」という21世紀の世界が抱える困難な課題に立ち向かい、<u>高度な専門的知識と技能、人的ネットワークを駆使して、既存の価値観を超えた柔軟な判断により解決策を提案・実践する力</u>である。本事業により輩出する人材として、「生態と文明」分野からは、1) 外務省や大使館職員、国際公務員、自治体の専門職員など日本と米国とアジア諸国の互惠の繁栄に向けて架け橋となる人材、2) 開発や環境保護に関わるコンサルタント事業家やJICA職員、UNESCO職員、地域開発NPO職員など、コミュニティの持続的発展に貢献できる人材である。「産業と経済」の分野では、3) 農水産業従事者、食品衛生管理(HACCP)コンサルタント、農漁協・酪農畜産組合等の団体職員、大学・研究所職員など世界の農業や水産業を発展させることのできる人材である。「環境と技術」の分野からは、4) 海外展開企業の社員、ベンチャー企業家など、世界の産業や市場を発展させ、イノベーションを起こせる人材を育成する。</p>
(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)
<p>人材育成の第一段階として、H31年度までに、初級・中級レベルのプログラムを利用して1-2年次の学生を80名以上連携校に派遣する。また、「グローバル・イニシアティブ概論」で事後学習を行い、Intensive English Courseによる語学力強化の機会を提供することにより、①文化の多様性を尊重し、自国を相対的に捉えた上で有効なコミュニケーションを行うことができる能力を身につけさせる。H31年度までにこうした基礎的能力をもつ学生を育成し、その後、3年次以上で上級レベルの「三極連携リサーチ・プログラム」で海外学生と協働でリサーチを行い、②高度な専門的知識や技能、人的ネットワークを駆使して世界の課題に挑戦する能力を身につけさせる。</p>

③-1 学生に修得させる具体的能力のうち、一定の外国語力基準をクリアする日本人学生数の推移について

(i) 本事業計画において定める外国語力基準及び同基準をクリアする学生数に関する達成目標

	外国語力基準	達成目標	
		中間評価まで (事業開始～平成31年度まで)	事業計画全体 (事業開始～平成34年度まで)
	【参考】本事業計画において海外に留学する日本人学生数	126人(延べ数)	467人(延べ数)
1	【初級】TOEIC 550、IELTS 5.0、TOEFL (iBT) 41	50人(延べ数)	200人(延べ数)
2	【中級】TOEIC 700、IELTS 6.0、TOEFL (iBT) 61	30人(延べ数)	90人(延べ数)
3	【上級】TOEIC 800、IELTS 6.5、TOEFL (iBT) 80	5人(延べ数)	20人(延べ数)

(ii) 外国語力基準を定めた考え方

本学の共通教育課程で1年次に全学生に対して実施している外国語能力試験の平均点は、TOEIC換算で400点相当である。本事業は学生の海外活動を段階的にレベルアップさせていく形をとるため、外国語力のスコアも段階的に設定した。入門レベルの体験型の海外研修プログラムへの参加学生(学部1-2年次)の目標値をTOEFL(iBT)41とし、中級レベルの自立型インターンシップや交換留学プログラムに参加する学生(2年次以上)の目標値をTOEFL(iBT)61に定めた。根拠は、米国の連携大学の多くが、交換留学等で正規課程の授業を受けるためにTOEFL(iBT)61以上を必要とするためである。次に、上級レベルの課題解決型研修(3年次以上)への参加学生の中から、米国の大学院へ留学する者が出ると想定し、それらの学生のTOEFL(iBT)スコアを80以上、大学院に入学できるレベルを達成目標とした。

(iii) 事業計画全体の目標達成に向けたプロセス(事業開始～平成34年度まで)

本学は、TOEIC受験料の支援を実施している(年間240名)。加えて、本事業でTOEFL模擬試験の受験料を支援する制度を整える(年間50名を予定)。又、本学では、英語によるコミュニケーション能力を強化するための Intensive English Course を2014年度から開設している。Debate & Discussion と TOEFL のクラスがあり、それぞれに初級と上級のクラスを設置している。Debate & Discussion はネイティブ講師を採用し、TOEFL 初級は日本人講師、TOEFL 上級はネイティブ講師を配置している。Intensive English Course は海外研修の事前事後学習として、留学準備として(スコアをあげるために)、個々の学生が目的とレベルにあわせた英語学習をできるような機会を整えており、H29年度実績で168名が受講した。本事業では、新たに中級クラスを開設し、受講生のレベルに応じたきめ細かい対応ができるようにする。Intensive English Course 修了時に、Debate & Discussion クラスでは、講師によるImprovement評価と学習アドバイスを受講生一人一人に対して実施し、TOEFL クラスについては、TOEFL 模擬試験の受験を義務づけて受講生のスコア管理、達成度(スコア伸び率)の評価を行う体制を整える。TOEFL についての教材紹介や学習の相談先となる教員や留学相談の窓口を学生に周知する。また、毎年4月と10月に開催しているP-SEGグローバル人材育成プログラムの説明会(H29年度実績で400人以上が参加)において担当者を紹介するなど、学生が支援を受けやすい体制を整える。

(iv) 中間評価までの目標達成に向けたプロセス(事業開始～平成31年度まで)

H31年度までに、Intensive English Course を拡充する。Intensive English Course の開講クラス数を増やし、増える受講者数に対応できるようにする。現在、クラスのレベルを初級と上級に分けているが、本事業で新たに中級レベルを開設し、受講生のレベルに応じたきめ細かい対応ができるようにする。さらに、Debate & Discussion については、クラスあたりの受講者数を低減調整し、一人一人の学生がクラスで話す機会を増やすなど、内容をより充実させる。本学が「学生海外研修支援事業」(学長裁量経費)によって支援を行っている海外研修コースや短期留学コースのうち、英語圏に学生を派遣するプログラムを拡大し、英語学習のモチベーションを高める機会をより多くの学生に提供できるようにする。

③ - 2 学生に修得させる具体的能力のうち、「③-1」以外について

(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)

本事業において学生に修得させる具体的能力として、①文化の多様性を理解し探求する力 (多様性の理解)、②柔軟な批判的思考力 (Critical Thinking) ③高度な専門的知識と技能 (専門知識)、④グローバルな現場で人的ネットワークを生かして困難に立ち向かい、文化的背景の異なる人々との協働によって問題解決をはかる力 (課題解決力) の4つを設定し、入門から中級、上級へと海外活動の段階に応じて確実に身

	①多様性理解	②批判的思考	③専門知識	④課題解決力
【上級】 課題解決型研修	●	●	●	●
【中級】 自立型インターンシップ等	●	●	●	●
【入門】 体験型海外研修	●	●	●	●

につけられるようにする。各レベルに必要な能力を明確化するとともに、参加者の learning outcome を客観的に評価する。方法として、担当教員がおこなう4つの能力に関する評価にくわえて、JASSO が派遣前と派遣後に実施している学生アンケートを活用して、学生の主体性がどれだけ増したかなどを数値化する。総体として、本事業が実際に教育効果を上げているのかどうかを判定し、プログラムごとのPDCAサイクルにつなげる。また、入門から中級、上級へとプログラムを段階的に利用することで、どの程度能力があがっていくのかを複数プログラムに参加実績のある学生を対象に検証する。

上記能力を養うために、段階別の海外派遣プログラムを提供することに加えて、本学の学生に外国人留学生との協働学習機会を提供する Global Language Space, 通称「グロスぺ」 (<http://www.gic.kagoshima-u.ac.jp/isd/global/index.html>) を引き続き運営し、本事業で受け入れる学生についても本学の学生と交流し、協働する機会を提供できるようにする。本事業で開発する課題解決型の「三極連携リサーチ・プログラム」は、4つの能力全てを必要とし、海外連携大学と本学の学生の協働作業 (リサーチやディスカッション) が何よりも重要であることから、派遣・受入プログラムや事前事後学習を授業として実施する以外に、学生が主体となり企画運営をおこなう International Students Congress on Line (オンラインによる国際学生会議) を開催し、実践力を養う。

(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)

プログラム担当教員が、学生の修得すべき4つの能力を評価する基準を明確化し、教育効果を測定できるようにする。グロスぺの活動の参加状況を検証し、利用者の人数を拡大すべく運営を改善する。

④ 質の保証を伴った大学間交流の枠組みの形成及び拡大に向けた具体的な取組について

(i) 事業計画全体の達成目標 (事業開始～平成34年度まで)

カリキュラムの国際認証取得の動きとして、工学部は技術者教育の国際認定 JABEE を取得している。共同獣医学部は米国の国際実験動物ケア評議会の認証を取得、医学部医学科は医学教育分野評価の国際認証を得ている。さらに平成32年度までに、獣医学部は欧州獣医学教育機関協会の認証取得を目指している。他学部においても、知識面 (理論・応用)、技能面 (概念化・認識力) その他の能力面 (責任感、向上心、コミュニケーション等) を分けてより厳密な評価する体制を整えていく必要があり、本事業で開発する COIL 型科目においては、連携大学のシラバスや評価制度とのすり合わせを行い、共通のフレームワークによる成績評価をできるようにする。また、それを基盤として本学の教育制度全体をより国際通用性の高いものへと変革していく。

(ii) 中間評価までの達成目標 (事業開始～平成31年度まで)

H31 年度までに、本事業で実施する受入プログラム全コース、及び事前事後学習として実施する COIL 型科目のシラバスを英語化する。“Course Requirements” “Learning Outcome” を詳細に記載すると共に、“Topics, Readings, Assignments, Deadlines” を明示する。課題解決型の研修、特に実験系やフィールドワークを含む科目について、パフォーマンス評価の基準を策定し、習得する技能別の評価基準を定めて“Grading Policy” として記載し、何を学ぶことができるのかを明確にする。本学では、学生の派遣プログラムはすべて単位化して実施する。相手大学の学生に対しては、原則として相手大学における単位化を求める。単位化が難しいものに関しては、「三極連携リサーチ・プログラム」の協定書を作成し、参加学生には修了書を発行する。

⑤ 本事業計画におけるCOIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数の推移 【1ページ以内】

(i) COIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数の達成目標

	中間評価までの達成目標 (平成31年度まで)	事後評価までの達成目標 (平成34年度まで)
本事業における COIL型教育手法を活用した授業科目数	10科目	18科目
大学全体の COIL型教育手法を活用した授業科目数	10科目	18科目
本事業における COIL型教育の受講者数(日本人学生)	76人(延べ数)	287人(延べ数)
本事業における COIL型教育の受講者数(外国人学生)	77人(延べ数)	290人(延べ数)

(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス(事業計画全体、中間評価までの双方について)

【目標設定の考え方】

初年度はCOIL科目を開講するための準備を行う。平成31年度までに本事業にかかわる全コース(学科単位)で最低1科目はCOIL型科目を開講し、海外派遣や受入の事前事後学習として用いる。時差の関係で同時接続が難しい科目については、平成32年度までにオンライン教材(ビデオ)を作成する。また、徐々に「学科・専攻横断型」や「学部・研究科横断型」のCOIL型科目を増やし、海外連携校の学生がオンライン受講できる科目数を増やす。

COIL型教育の受講者数については、日本人学生については、今後COIL型教育を取り入れる予定の既存科目の受講者数をもとに見積もった。外国人学生の受講者数については、「三極連携プログラム」による本学への受入の条件として、全員に受講してもらうこととして見積もった。実際はCOIL科目の受講者数の方が受入よりも多いと思われるが、現段階では予想ができないため数字には加えなかった。

【達成までのプロセス】

H30年度にニューヨーク州立大学で開催されるCOIL研修を本プログラムに関わる教員が受講する。渡米に際して、米国の連携大学教員とCOIL科目についての詳細なうちあわせをおこなう。H31年度から開講するためにシラバスを英語で作成する。

H31年度は、時差のために同時開催ができない授業について英語のオンライン教材を作成する。コンテンツの英文校閲、撮影及び編集についても本事業の中で取り組む。

H32年度以降は、派遣と受入の事前事後学習をCOIL型の正規科目としてシラバスに基づいて実施する。また、大学院科目に関しては、COIL型科目を、大学院横断的教育プログラムの特別コースに位置付ける。現在、「島嶼学教育コース」「環境学教育コース」「食と健康教育コース」「水教育コース」「エネルギー教育コース」の5コースがあり(<https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/30rishuu.pdf>)、これらは本学が重点領域として指定する5分野の研究を背景として開設されている。本事業で開発するCOIL型科目を皮切りに、大学院横断的教育プログラムの中に英語で実施する科目を増やし、オンライン受講を行うことにより、海外連携大学の学生が現地にいながら、鹿児島大学の修士課程の単位を最大8単位まで取得できるようになる。大学院横断的教育プログラムをオンライン受講し、単位を取得した後に、鹿児島大学の希望する研究科に1年間留学し、専門科目を受講することで修士の学位が取れるダブルディグリーへ将来的に発展させる道筋を事業の最終年度までにつくる。

⑥ 本事業計画において海外に留学する日本人学生数の推移 【1ページ以内】

現状（平成29年5月1日現在）※1	36 人
-------------------	------

(i) 日本人学生数の達成目標

事業計画全体の達成目標（事業開始～平成34年度まで）	467人（延べ数）
中間評価までの達成目標（事業開始～平成31年度まで）	126人（延べ数）

[上記の内訳]

	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
合計人数	8人	118人	113人	122人	106人	467人

(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

【目標設定の考え方】

本事業で連携する大学への既存の派遣プログラムによる派遣人数を平成30年度とし、本事業で新規開発する「三極連携プログラム」の8コース、それぞれについて派遣人数（見込み）を算出した上で、平成30年度実績に上乘せした。見積もりからわかるように、本事業の成果となる連携大学への日本人学生の派遣数の推移は、一年目にわずか50人程度の増加があるのみに留まる。しかしながら、本事業の目的は、派遣数と受入数のアンバランスな現状を改善することであり、事業経費の多くを受け入れに使用するのがふさわしいと考えている。また、本学は学長裁量経費等の自己資金により、派遣プログラムを運営してきた実績があり、本事業以外の派遣プログラムを含めると、全部で短期海外研修が36コース、くわえてトビタテ！留学 JAPAN や鹿児島県の清華大学への留学制度、学術交流協定校への派遣留学などの機会も整えているため、派遣人数については現状を大きく変える必要はない。本事業では、入門の体験型海外研修から中級の自立型留学・インターンシップ、そして上級の課題解決型リサーチへと海外での活動内容を段階的に発展させる形を整えること、一つ一つのプログラムの学習課題や学習内容を明確に示し、学生が自己の目的にあったプログラムを選択できるようにするなど、派遣プログラムの質的向上を目指す。

【達成までのプロセス】

まず、派遣プログラムの質をあげるために、本学が学長裁量経費等を利用して実施している支援事業、「鹿児島大学学生海外研修支援事業」と「鹿児島大学学生海外留学支援事業」の見直しを平成31年度までにおこなう。中長期の留学へとつながる学術交流協定校への派遣や双方向交流のある大学への派遣を優先することや、COIL 型科目を採用して事前又は事後学習を行うプログラムを優先的に採択するように選考基準をあらためる。また、選考基準を公示し、鹿児島大学としての学生派遣の方針を明確にする。

次に、現在、共通教育科目として実施している体験型海外研修でのみとりいれている海外研修報告会を、中級、上級のレベルでも全学でおこなうようにする。それにより、他の派遣プログラムと情報交換し、他のプログラムから学ぶ機会を持つことができるようになり、互いの切磋琢磨によるプログラム内容の質的向上を図る。

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成29年5月1日現在の人数。

⑦ 本事業計画において受け入れる外国人学生数の推移 【1ページ以内】

現状（平成29年5月1日現在）※1	300 人
-------------------	-------

(i) 外国人学生数の達成目標

事業計画全体の達成目標（事業開始～平成34年度まで）	360 人（延べ数）
中間評価までの達成目標（事業開始～平成31年度まで）	116 人（延べ数）

[上記の内訳]

	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
合計人数	44 人	72 人	80 人	80 人	84 人	360 人

(ii) 目標を設定した考え方及び達成までのプロセス（事業計画全体、中間評価までの双方について）

【目標設定の考え方】

本事業では、全学部・研究科が一体となり、魅力のある受け入れプログラムを開発し、理系から文系まで多様な分野の学生を米国から受け入れることを最優先に企画している。平成30年度は、準備の期間として海外連携校から担当教員を招聘してキックオフ・シンポジウムを開催する。また、同時に学生も招聘し、交流を予定しているコースもある。初年度には、プログラム詳細を固め、両大学における単位化についても検討した上で、プログラム協定を交わす。平成31年度から本格的に交流を開始し、少しずつ受入数を増やして行く。平成31年度の72名は、各コースの運営母体（学科）が一度に短期研修で受入できる人数を積算したものである。以降は各コースが毎年の短期研修で受け入れる72名に加えて、学生交流やCOIL科目を通して連携大学との間に築かれる関係性をベースに、3ヶ月以上の中長期の学生受入を増やしていく計画である。

【達成までのプロセス】

H31年度までに、本事業で実施する「三極連携リサーチ・プログラム」の受入について、全コースのシラバスを英語で作成する。各コースは研修だけでなく、COILによる事前事後学習も含めて単位化し、“Course Requirements” “Learning Outcome” を詳細に記載すると共に、“Topics, Readings, Assignments, Deadlines” を明示する。課題解決型のリサーチが主となるため、実験系やフィールドワークを含む科目については、パフォーマンス評価の基準を策定し、習得する技能別の評価基準を定めて“Grading Policy”として記載し、何を学ぶことができるのかを明確にする。本学では、学生の派遣プログラムはすべて単位化して実施しており、連携大学からの学生受け入れについても、原則として相手大学における単位化を求める。単位化が難しいものに関しては、「三極連携リサーチ・プログラム」の修了書を発行し、単位認定を依頼する。

また、本プログラムへの参加学生を増やすために、全コースについて紹介する英語冊子を作成する。PDF版を鹿児島大学のHPに掲載し、連携大学のHPにも掲載を依頼する。現在、本学が実施している派遣プログラムP-SEG「グローバル人材育成プログラム」では、Facebook (<https://www.facebook.com/pg/KUPSEG>) と Instagram (<https://www.instagram.com/kupseg>) を利用して、主に鹿児島大学の学生向けに、海外研修プログラムについての情報発信をおこなっている。海外研修への参加学生や担当教員が、事前事後学習の様子や現地での活動の様子を写真や動画に短い文章をつけてリアルタイムで投稿し、活動状況が生き生きと伝わるようにしている。本事業においても、受入プログラムに関して、本学学生と連携校の学生が共同で、鹿児島での研修内容をリアルタイムに英語発信するページをFacebook等に開設する。

※1 現状は、事業の取組単位（全学、学部等）における平成29年5月1日現在の人数を記入。

⑧COIL型教育手法を活用した授業科目について

【国内連携大学等数に応じたページ数】

【本事業で計画しているCOIL型教育手法を活用した授業科目数及び受講者数】

1. 代表申請大学【大学名:鹿児島大学】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
1					
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数	6	9	14	16	18
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)	6	9	14	16	18
全授業科目数(B)	5882	5882	5882	5882	5882
割合(A/B)	0.1%	0.2%	0.2%	0.3%	0.3%
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)	98	108	133	138	154
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)	138	152	179	189	197

2. 国内連携大学【大学等名:】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数					
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)					
全授業科目数(B)					
割合(A/B)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)					

3. 国内連携大学【大学等名:】

[平成29年度通年] COIL型教育手法を 活用した授業科目数	【各年度通年の数値を記入】				
	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
本事業における COIL型教育手法を 活用した授業科目数					
大学全体の COIL型教育手法を 活用した授業科目数(A)					
全授業科目数(B)					
割合(A/B)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (日本人学生)					
本事業における COIL型教育の受講者数 (外国人学生)					

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

⑨交流する学生数について(平成30年度は事業開始以降の人数)

(単位:人)

(i) 本事業で計画している交流学生数

	平成30年度		平成31年度		平成32年度		平成33年度		平成34年度		合計		
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	
各年度の派遣及び受入合計人数(交流期間、単位取得の有無等の内訳は、(iii)表参照)	8	44	118	72	113	80	122	80	106	84	467	360	
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	1	76	63	71	71	78	69	62	73	287	277
	無	8	43	42	9	42	9	44	11	44	11	180	83

(ii) 国内大学及び交流プログラムごとの交流学生数

交流形態	① 単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流
	② 単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流
	③ 上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流
	④ 上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流

1. 【代表申請大学】

大学名		鹿児島大学										
	交流プログラム名 (相手大学名)	交流方向	交流形態	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計			
1	日本文化論コース (米国サンノゼ州立大学・泰国 ブーラパー大学)	派遣	①	0	33	33	33	34	133			
		受入	①	1	10	10	13	14	48			
2	島嶼へき地医療コース (米国ベレアカレッジ・韓国中 央大学校)	派遣	①	0	12	12	12	12	48			
		受入	①	4	12	12	12	12	52			
3	臨床獣医学コース (米国ジョージア大学・台湾国 立中興大学)	派遣	①	0	4	4	4	4	16			
		受入	①	2	2	3	3	3	13			
4	食料生産コース (米国テキサスA&M大学・泰 国チェンマイ大学)	派遣	①	0	6	6	6	6	24			
		受入	①	0	6	6	6	6	24			
5	食の安全コース (米国オクラホマ州立大学・ 泰国メーフアールアン大学)	派遣	①	0	12	12	12	12	48			
		受入	①	2	10	10	10	10	42			
6	食と健康コース (米国ノースダコタ州立大 学・中国湖南農業大学)	派遣	①	0	16	16	16	16	64			
		受入	②	0	3	3	3	6	15			
7	ナノバイオコース (米国ノースダコタ州立大 学・台湾国立成功大学)	派遣	①	0	5	7	7	7	26			
		受入	①	0	0	2	2	2	6			
8	環境建築デザインコース (米国タスギーギ大学・尼国 ディボネゴロ大学)	派遣	①	0	7	0	7	0	14			
		受入	①	5	0	5	0	10	20			
9	三極連携シンポ交流	派遣	③	8	16	16	16	6	62			
		受入	③	21	20	20	20	10	91			
10	三極連携交換留学	派遣	②	0	7	7	9	9	32			
		受入	②	9	9	9	11	11	49			

2. 【国内連携大学等】 なし

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

(iii) 本事業で計画している交流学生数(派遣・受入別 各内訳の集計)

【日本人学生の派遣】	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
年度別合計人数	8	118	113	122	106	467

【交流形態別 内訳】

単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流	0	89	84	91	85	349
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	54	49	56	209
	無	0	35	35	35	140
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	0	13	13	15	15	56
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	6	6	6	24
	無	0	7	7	9	32
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流	8	16	16	16	6	62
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	16	16	16	54
	無	8	0	0	0	8
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流	0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	0	0	0	0
	無	0	0	0	0	0

【外国人学生の受入】

【外国人学生の受入】	平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度	合計
年度別合計人数	44	72	80	80	84	360

【交流形態別 内訳】

単位取得を伴う交流期間3ヶ月未満の交流	14	40	48	46	57	205
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	14	40	48	46	205
	無	0	0	0	0	0
単位取得を伴う交流期間3ヶ月以上の交流	9	12	12	14	17	64
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	3	3	6	15
	無	9	9	9	11	49
上記以外の交流期間3ヶ月未満の交流	21	20	20	20	10	91
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	20	20	10	70
	無	21	0	0	0	21
上記以外の交流期間3ヶ月以上の交流	0	0	0	0	0	0
(内訳) COIL型教育の活用の有無	有	0	0	0	0	0
	無	0	0	0	0	0

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

⑩海外相手大学との単位互換について

(i) 単位互換を実施する海外相手大学数【計画】

(単位:校)

	平成30年度		平成31年度		平成32年度		平成33年度		平成34年度	
	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入	派遣	受入
単位互換を実施する海外相手大学数	3	9	5	10	6	10	7	11	9	12

(ii) 相手大学ごとの単位互換内訳【計画】

【派遣する日本人学生が取得した単位の互換】

1. 代表申請大学 【大学名: 鹿児島大学】

相手大学名		平成30年度	平成31年度	平成32年度	平成33年度	平成34年度
		認定者数	1	0	2	2
ジョージア大学	認定単位数	8	0	16	16	16
ノースダコタ州立大学	認定者数	0	1	2	1	2
	認定単位数	0	8	16	8	16
サンノゼ州立大学	認定者数	2	2	2	2	2
	認定単位数	16	16	16	16	16
オクラホマ州立大学	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
タスキーギ大学	認定者数	0	0	0	1	1
	認定単位数	0	0	0	8	8
テキサスA&M大学	認定者数	0	0	0	0	1
	認定単位数	0	0	0	0	8
ベレアカレッジ	認定者数	0	1	2	2	2
	認定単位数	0	8	16	16	16
ディポネゴロ大学	認定者数	0	0	0	0	1
	認定単位数	0	0	0	0	8
中央大学校	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
湖南農業大学	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
国立成功大学	認定者数	0	1	1	1	1
	認定単位数	0	8	8	8	8
国立中興大学	認定者数	1	1	1	1	1
	認定単位数	0	8	8	8	8
メーファールアン大学	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
チェンマイ大学	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
ブーラパー大学	認定者数	0	0	0	0	0
	認定単位数	0	0	0	0	0
年度別認定者数合計		4	6	10	10	13
年度別認定単位数合計		24	48	80	80	104

2. 国内連携大学 なし

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備 【①～③合わせて2ページ以内】

① 外国人学生の受入のための環境整備

【実績・準備状況】

○外国人学生の在籍管理体制

短期研修から交換留学、学位取得のための正規留学まで、全ての外国人学生の在籍を学生部国際事業課留学生係が一元的に把握・管理している。

○外国人学生へのサポート体制

各種サポートは、グローバルセンターに設置した「留学生サポートデスク」を司令塔として全学の適切な部署と連携して実施している。このうち履修指導は、交換留学生および学部正規生の入学時に同センター教職員と学生チューターが組織的に個別指導を実施しているほか、学内外諸手続きや生活支援は、説明会やマニュアルによるチューター指導を行ってサポートの質を高めた上で、留学生に個人チューターをつけて対応している。健康診断受診説明書、サイバーセキュリティ啓発等資料の多言語翻訳、ならびに就職支援のエントリーシート個人指導等も実施している。カウンセリング体制は、同センター教職員と留学生相談主事（スペイン、エジプト、パキスタン出身教員）が随時行っている他、専門的心理カウンセリングが必要な場合は、保健管理センターと連携し専門的診断に迅速につなげている。宿舎については、民間宿舎入居留学生を対象とする大学独自の宿舎費助成事業を設けて支援している。また、平成 32 年度竣工予定の鹿児島県と鹿児島市による日本人・留学生混住寮（国際交流センター（仮））建築計画に本学も協力しており、竣工時には本学留学生の入寮可能人数が増加する。

○科目履修のための十分な情報提供

科目履修に関する情報提供を充実するため、全学で HP の英文化およびシラバスの充実化に取り組んでいる。また、留学生対象の学内 Web 情報は、情報の内容に応じて必要な場合全て英語で送信している。国際事業課留学生係、グローバルセンター職員全員が科目履修等に関する問合せに英語で応じられる体制である。

○国内外での企業体験、就職支援等による産業界との連携

鹿児島商工会議所が主催する県内企業と留学生を結ぶ就職セミナー・交流会の開催に協力して毎年留学生を参加させており、同会議所が通年で実施している県内企業インターンシップ（平成 30 年 2 月現在受入企業 10 社）にも留学生を派遣している。この他、就職支援室では、就職希望留学生に留学生対象の国内就職説明会情報を提供している。

【計画内容】

○外国人学生の在籍管理体制

本プログラムで受入増加を計画している 1 学期未満の短期滞在留学生に対し、本学における適切な在籍資格を設け、質の保証を伴った単位付与を可能とする。

○外国人学生へのサポート体制

新たに特任職員を配置し、本プログラムで受入増加を計画している 1 学期未満の短期滞在留学生が必要とする、宿舎の提供、各種必要書類の英訳、英語による生活相談指導等のサポート体制を充実させる。

○科目履修のための十分な情報提供

平成 31 年度から共通教育科目を 4 学期制に移行する計画でありアカデミックカレンダーの相違による支障は軽減が予想されるが、科目履修について引続き Web 情報の充実に努めるほか、参加校を通じて事前に留学生に必要な十分な情報提供を行う。時差のため同時開催できない COIL 授業では、英語オンライン教材を配信して事前事後学習を、両大学学生による協働作業や討論を派遣又は受入プログラムで実施する。

○国内外での企業体験、就職支援等による産業界との連携

本プログラムによる受入留学生は、鹿児島商工会議所が通年で実施している県内企業インターンシップ（平成 30 年 2 月現在受入企業 10 社）への参加を視野に入れる。地元産業界に本プログラム受入留学生の高い資質を積極的に周知して連携を一層強化し、留学生には積極的にインターンシップ体験を促し鹿児島でのキャリアパスの可能性も啓発する。本プログラムにとっては、大学内にとどまらない鹿児島地域との交流をデザインすることで地域独自性が魅力となり、ひいては本学が地域活性化に貢献する端緒となる。

② 日本人学生の派遣のための環境整備

【実績・準備状況】

○派遣前・中・後の情報提供、相談実施、就職支援等サポート体制、科目履修のための十分な情報提供

全学対象派遣留学説明会を年2回、派遣種別説明会を複数回、個別留学相談を週1回開催して情報提供を行っている。海外研修授業参加学生には、各研修説明会および事前学習授業、事後学習として海外研修報告会、「グローバルイニシアティブ概論」（共通教育授業）を義務づけ、学習面でのサポートとさらなる海外活動への指導を行い、学術交流協定校派遣留学生には、派遣前に「派遣留学 I」「留学生のための異文化理解」、派遣後に「派遣留学 II」（いずれも共通教育授業）履修を義務づけ、留学計画、履修科目等学習面、異文化適応に関する生活面、危機管理、留学とキャリア形成等について指導している。また、トビタテ！留学 JAPAN を含む大学を通して応募する海外活動参加者全てに対し、留学中の定期的報告を通じて教職員が共同で問題解決を図る相談体制とし、科目履修を含む必要な情報提供、危機管理情報講話を実施し、報告会等の開催や体験談 HP 掲載によって派遣前・後学生の循環的な協働教育を行っている。

○国内外での企業体験等による産業界との連携

海外インターンシップは、北米教育研究センター、理工学研究科、医学部等が海外研修授業として実施している。また、鹿児島商工会議所主催の帰国留学生を対象とした県内企業就職交流会に参加を促している。全学の学生を対象として、グローバル人材育成をテーマとして産業界から麻生セメント会長、富士ゼロックス鹿児島代表取締役等の講演を行った実績がある。

【計画内容】

○派遣前・中・後の情報提供、相談実施、就職支援等サポート体制、科目履修のための十分な情報提供

学内既存のサポート体制を基盤とし、さらに本プログラム担当教職員の配置によって履修体系や順序、単位相互認定手続き等、科目履修のための本プログラム特有の情報提供や相談対応を充実させる。また、本プログラムの海外研修の専門分野ごとに産業界との連携を強め、派遣学生の学習成果を積極的に周知して人材ニーズを発掘し、学生の就職支援サポート体制を強化する。

○国内外での企業体験等による産業界との連携

本学COC+事業で開拓した県内・国内企業におけるインターンシップに加え、新たに本プログラム各海外研修の連携大学や専門に合致した国内外のインターンシップ先の開発を進める。グローバルな視野で自らの専門分野を捉え、英語能力を備えた本プログラム参加学生の高い資質を積極的に周知して産業界との連携を一層強化し、特に地元企業に還元できるよう努める。

③ 関係大学間の連絡体制の整備

【実績・準備状況】

本プログラム参加校の多くは学術交流協定校であり、その上で海外研修授業を実施している実績がある。協定校との連絡・情報共有は、国際事業課による公式ルートでの体制が整備されており、さらに各海外研修実施担当教員によってより深い情報共有ができる体制となっている。卒業・修了後の継続的サポート体制については、本学では帰国留学生等に「友好大使」を任命して母国での同窓会活動や本学との橋渡し活動を依頼する制度が整っている（18カ国146名、2018年4/1現在）。留学に係る危機管理については、国大協保険国際交流活動対応費用補償特約に加入している他、大学が関与する海外派遣学生全員に「学研災付帯海学」加入を義務付け、海外研修参加者は日本アイラック（株）の危機管理サービスに登録している。危機管理教育に関しては、大学を通して応募する海外活動参加者全てに対し、適切な情報資料を提供して危機管理情報講話を実施し、渡航中の安否確認が取れる体制を整えている。

【計画内容】

○関係大学間の連絡・情報共有体制の整備

本プログラム実施にあたり、特に単位相互認定手続きや単位互換に関する大学間の連絡・情報共有を進め、学生の履修体系における取得単位の位置付けを明確にする。

○大学間交流の発展に向けた卒業・修了後の継続的サポート体制の整備

本プログラム参加校・教員・学生の情報を共有する HP、SNS アカウントを開設し、本学を要とした共時的・通時的な人脈構築および情報交換を目指す。ネット上仮想空間での交流を現実に対面交流する場としてシンポジウムを開催し、本学を要として米国とアジアを結ぶ本プログラムのメリットを最大化する。

○留学中の学生の安全管理体制、緊急時の学生サポートのためのリスク管理への配慮

留学中の危機管理（事件、事故、自然災害、心身の健康管理）に必要な情報提供講話、派遣中の安否確認等は、日本人派遣学生、外国人受入留学生ともに学内既存のサポート体制を基盤とし、さらに本プログラム担当教職員の配置によってきめ細かいサポート体制を構築する。日本人派遣学生には学研災付帯海学加入と日本アイラック（株）の危機管理サービス登録を、外国人留学生には「学研災留学生向け付帯学総」加入を義務付ける。現在改訂中の「危機管理マニュアル」を整え、リスク管理体制を一層明確にする。

事業の実施に伴う大学の国際化と情報の公開、成果の普及 【①～②合わせて2ページ以内】

① 事業の実施に伴う大学の国際化

【実績・準備状況】

○大学の国際化戦略目標における事業の意義、方向性の位置付け

鹿児島大学は、第3期中期目標・中期計画で「グローバルな視点を有する地域人材育成の強化」を基本目標の1つとしている。また、平成30年3月には国際化の取組みを進める統一方針として「鹿児島大学国際化の基本方針」を策定し、基本方針の1つとして「グローバルな視点を有する人材を育てるための教育システムや教育環境の整備と充実」を掲げた。アジアの玄関口である鹿児島の地域特性を存分に活用しながら、共通テーマ「多極化する世界をつなぐ」を掲げて全学で取り組む本事業は、9学部10研究科を擁する総合大学である本学のメリットを最大限に活かして、専門性と学際的な学びの可能性を拓けるものであり、また、本事業を通してCOILという新たな教育手法を全学に拓けることにより、大学全体の国際化教育の規模と質を拡大発展させる取組みである。さらに、本事業の推進により、相手大学との教育連携で単位互換等の「教育システムや教育環境の整備と充実」が大きく進む。これら全ての点で、本事業は本学の国際化戦略目標の方向性に合致し、本学国際化に重要な意義を果たす位置付けとなっている。

○質保証を伴う大学間交流の充実・発展のため、国内外他大学学生の参加等の柔軟性、発展性

本学では、「鹿児島大学学生海外研修支援事業」による奨学金を給付し、平成29年度には29の海外研修で223名を各国に派遣した。このうち、本学の海外拠点である北米教育研究センターで実施する「海外研修基礎コース in カリフォルニア」と「国際プロフェッショナル養成プログラム」では、本学の受講生に加え、徳島大学、島根大学、岩手大学、青山学院大学、京都大学等の学生も受入れた実績がある。また、共同獣医学部では、北海道大学、帯広畜産大学、山口大学と連携して教育カリキュラム改編と教育コンテンツ充実を図っており、平成32年度の欧州獣医学教育認証取得計画に向けて実績を上げている。さらに、水産学研究科では、ASEAN諸国の5大学院（インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ベトナム）と連携し、単一教育システムの下で教育制度を共有する「大学院熱帯水産学国際連携プログラム」を平成27年度に創設し、受入留学生、派遣学生が単位を取得している。

○事務体制の国際化、事務職員の能力向上、事業をサポートする全学的体制の充実

国際部署である国際事業課全職員は十分な英語能力を保持している。全学若手職員を対象に、北米教育研究センター実施の海外研修に学生とともに参加する職員派遣研修を平成17年度から実施し、平成29年度までに30人が参加した。英語（e-learning）自己啓発研修、TOEIC等受講料補助、「進取の精神グローバル人材育成プログラム（P-SEG）」TOEFLクラス受講を認める等、積極的な能力開発を支援している。

【計画内容】

○他大学学生が参加できる柔軟で発展的な取組み、組織的・継続的な教育連携体制の構築

米国を軸に、本学教育実績を基にアジアと三極連携するCOIL教育により、参加大学の学生は多地域との柔軟な教育交流が可能となる。組織的・継続的な教育連携体制の構築については、第一に、学士課程では、本事業によるCOIL型科目の一部を、全学部生を対象とする学部横断型教育で地域活性化に貢献する人材の育成を目指す「地域人材育成プラットフォーム」（2017年度開始。文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」を後継し拡大したもの <https://www.kagoshima-u.ac.jp/platform/>）の「かごしまグローバル教育プログラム（2018年度開設）」の修了要件単位（高度共通教育科目）とする。第二に、修士課程では、本事業で実施する学生交流（派遣・受入）の事前事後学習として行うCOIL型科目を、「鹿児島大学大学院全学横断的教育プログラム」に位置付ける。現在、「島嶼学教育コース」「環境学教育コース」「食と健康教育コース」「水教育コース」「エネルギー教育コース」の5コースがあり（<https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/30rishuu.pdf>）、これらは本学が重点領域として指定する5分野の研究を背景として開設されている。同プログラムは、各研究科で修了要件となる単位数が定められており、本学大学院生に専門を超えた学びの機会を提供している。加えて、COILの活用で、海外連携大学の学生が現地で本学修士課程の単位取得が可能になる。将来的に、同プログラムをオンライン受講して単位を取得し、本学の希望の研究科に1年間留学し、専門科目を受講して修士号を与えるダブルディグリー制度に発展させる。

○事務体制の国際化、事務職員の能力向上、事業をサポートする全学的体制の充実

本事業の業務にあたる特任職員を雇用し、学部研究科を超えて全学から教員と学生が参加する本事業をサポートする体制を整える。また、2018年度から北米教育研究センター職員研修にて、本学の知的財産（特許を有する研究等）を米国企業や大学に紹介し、共同研究等に発展させるための実務研修を始める。

② 国内外への情報提供の方法・体制、成果の普及

【実績・準備状況】

○大学のグローバル化に向けた戦略的な国内外への教育情報の発信

鹿児島大学は、第1期中期目標で外国人留学生の受入支援体制の整備を掲げており、その一環として英文 HP の充実¹⁾に努めている。英文 HP は、大学の基本情報にとどまらず、リンク先の各学部研究科がその教育研究内容を詳細に英語化する取組を全学で進めている他、入試情報、キャンパスライフ、国際共同プロジェクト、毎年度発行する英文概要を掲載している (<https://www.kagoshima-u.ac.jp/en/>)。大学 HP は、今後順次多言語化する計画である。(外国人留学生の玄関口であるグローバルセンター外国人留学生部門 HP は、英、韓、中国語 HP を展開している (http://www.gic.kagoshima-u.ac.jp/isd/index_english.html) この他、大学全体の教育情報の発信を進めるため、大学ポータルウェブサイト(国際発信版)に参画する計画を進めている。

印刷物では、“*Kagoshima University Outline*”(英文概要 年刊)、“*KU Today*”(学部研究科の教育研究を特集する英文広報誌 年2回刊行)、「鹿児島大学留学生ハンドブック」英語版(留学生に必要な修学・生活情報)を刊行し、韓国語版とともに <https://www.kagoshima-u.ac.jp/kokusai/handbook2018.pdf> に掲載している。さらに、国際連携力の強い「熱帯水産学国際連携コース」、「農水連携国際食料資源学特別コース」等では英文パンフレットを、「Study Japan Program 外国人留学生対象日本語コース」では「鹿児島大学郡元キャンパス日本語授業履修案内」(英、韓、中国語 年2回発行)等で情報発信している。

この他、毎年 JASSO 主催の国外における留学フェアをはじめとした国内外の大学説明会に教職員が参加して大学情報を提供している。また、国内外で学外者も対象とした教員、学生の教育研究成果報告会も数多く開催されており、報告書刊行や所属部局 HP 等に掲載して成果の普及を図っている。

【計画内容】

○取組や成果の公表、他大学、産業界への積極的な普及

本事業の取組や成果は、本事業の HP を作成して掲載する。事業の概要、参加校情報、COIL 授業の全容とシラバス、実施状況、参加学生の感想、報告、各授業の授業評価、成果発表、シンポジウムおよび参加学生による International Student Congress On Line の情報と成果などである。また、参加教員と学生には SNS の利用も視野に入れる。加えて各授業では、本学の学習管理システム「manaba」に受講者登録することにより、授業という限られた場を設定して、セキュリティを考慮した双方向の意見交換も可能にする。さらに、本事業のシンポジウムや報告会は、本事業参加者以外の COIL に関心のある本学、他大学、地元の初等・中等教職員および中等教育課程以上の生徒・学生、地元企業、地域住民に開かれたものとし、本県が課題とする離島教育でも応用できる新たな教育ツールである COIL の普及、地域コミュニティの多文化共生のための啓発に役立てる。さらに、積極的に地元マスメディア(テレビ局、新聞社)に働きかけ、報道を通じて本事業の意義と成果、地元社会に与える無限の将来的可能性について地域住民の方々の理解を深める。この他、本事業の教育実践は、COIL 関連・各専門分野の適切な学会発表、論文で成果を公表し、蓄積した成果を報告書としてまとめ、後には書籍として刊行する。

○取組実施状況や交流プログラム等についての外国語も含めた積極的な情報発信

上述した取組は、適切な範囲で英語でも並行して情報発信する(地域に開かれたシンポジウム等では目的に合わせて英語使用の適切性を判断する)。本事業の目指す情報発信の第一の基本的意義と目的は、取組を通して国内外に縦横に繋がる共時的かつ通時的な、多様性を日常と捉える幅広いグローバルな人脈を形成することである。この意義と目的は、企画者である本学教職員だけでなく、本学から参加する学生、参加校教職員と学生にも認知・共有を図り、協力を得る。情報発信の第二の目的は、新たな教育ツール COIL の実践例紹介による普及である。これら2つの目的を達成するため、国内外問わず、英語による情報発信を適切に行い、初等・中等教育、高等教育、産業界、自治体、日本、世界各国に取組の紹介、実施状況等を積極的に情報発信していく。

○大学のグローバル化に向けた戦略的な国内外への教育情報の発信

中央教育審議会「国際的な大学評価活動の展開状況や我が国の大学に関する情報の海外発信の観点から公表が望まれる項目の例」の国内外への教育情報の発信については、全学的な情報(例:教員当たり学生数など)については、参画計画中の「大学ポータルウェブサイト(国際発信版)」で扱うこととし、本事業に関する項目については、本事業 HP に遺漏のないよう掲載する。

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	日本文化論コース連携校： サンノゼ州立大学 (米国)
① 交流実績 (交流の背景)	
学生交流の実績	
<p>サンノゼ州立大学 (SJSU) と本学は、2012 年に学術交流協定を締結し、2016 年に学生交流の覚書を交わした。2010-2017 年の間で短期・中長期をあわせて 243 名の派遣実績がある。現在、共通教育科目「海外研修基礎コース in California」、学部専門科目「海外短期留学」、「交換留学プログラム」の 3 種により SJSU への派遣を行っている。「海外短期留学」においては、SJSU との学生交流にくわえて、本学の学内共同教育研究施設である「北米教育研究センター」(以下北米センター) と連携し、SJSU を含む現地の民間企業や政府系団体、NPO 等と密接な関係を築き、様々なインターンシップ・プログラムを展開している。この「海外短期留学」(9 月実施) と「表象文化論演習」「アメリカ文学演習 1」(10 月以降実施) とを連動させることで、SJSU の学生とのより深い交流を実現してきた (2017 年度の実績で「アメリカ文学演習 1」受講者 8 人、「海外短期留学」参加者 5 人)。</p>	
COIL 型授業の実績	
<p>鹿児島大学法文学部は、2011 年 5 月に SJSU とのオンライン連携授業の実施について合意した。それに基づき、2012 年 10 月よりインターネットの映像回線を通じた同時的合意授業を始めた。これは米国の COIL 協会に認定された合同プロジェクトであり、その成果は 2013 年にニューヨーク州立大学 COIL センターで開催された第 5 回 COIL Conference において発表済みである。法文学部ではオンライン連携授業をよりよい環境で実施するため、2014 年度に「高機能通信型 CALL システム」を導入した。これは映像通信に最適化したシステムであり、WebEx 等の授業支援ソフトをストレスなく利用できるほか、他の教室を含めた 3 点同時中継にも対応している。このシステムを使って SJSU との連携授業を実施してきた。連携授業では、日米双方の授業クラスの協働性、通信とグループ活動の連動性を重視し、シラバスや授業フォーマットは米国流のものに倣い、本学科目として「表象文化論演習」と「アメリカ文学演習 1」において実施した。米国学生と協働で映像製作やグループディスカッションを行い、日米双方の学生の問題解決能力やディスカッション能力を高めることができた。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>本事業では、<u>米国への学生派遣の実績や SJSU との COIL 実績をもとに、タイ・ブーラパー大学を加えた三極連携で双方向交流を企画する。</u>本プログラムの主目的である米国からの受入強化のために、オンライン連携授業として 2020 年より「英語圏比較文化論」を開設し、SJSU (とブーラパー大学) の学生に日本の大衆文化や地域文化の講義を開始する。また、8 月に SJSU の学生を受け入れるプログラムを実施し、日本の近代化や地域文化の多様性についてのフィールドワークを行う。それにより、SJSU の学生側からみると、COIL による日本文化概論 (本学の「アメリカ文学演習」) → COIL による事前学習 (本学の「英語圏比較文化論」) → 課題解決型の研修という繋がり、継続的に日本と鹿児島島の文化を学んでもらう。</p> <p>本学からの派遣についても、本事業で強化を行う。これまでの「海外短期留学」に加えて、本事業で新規に SJSU での授業履修を含む中期研修 (1.5 ヶ月) を企画している。SJSU の部局 International Gateway では、海外からの受講生向けにプログラムを組んでおり、これを「海外短期留学 2」として実施する。「アメリカ文学演習 1」の受講生を中心に「海外短期留学 2」に派遣することで、サンノゼに結びつきの深いジョン・スタインベックやカリフォルニアの日系人作家の研究を深めることができ、従来から展開してきた<u>インターンシップと組み合わせ、現地社会に立脚した実践力を身につける</u>ことができる。</p> <p>本学では、共通教育科目において、2010 年度より 1-2 年次向けに「海外研修基礎コース in カリフォルニア」を実施しており、従って、本プログラムを実施することで、全体としては、「海外研修基礎コース in カリフォルニア」(入門・体験型研修) → 「アメリカ文学演習 1」(COIL 事後学習) → 「海外短期留学」および「学術交流協定による派遣」(中級・自立型研修) → 「海外短期留学 2」(上級・課題解決型研修) と、SJSU との結びつきを中心に段階的なグローバル人材育成プログラムが完成する。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	日本文化論コース連携校： ブーラパー大学 (タイ王国)
① 交流実績 (交流の背景)	
交流の実績・背景	
<p>鹿児島大学では平成 30 年度より、共通教育科目「社会システム・政策研究」を開始した。この科目では、タイを訪問し、鹿児島大学の学生とブーラパー大学人文社会学部東洋言語学科日本語専攻との学生交流を実施する。学生交流では、あらかじめ双方の学生にディスカッションのテーマ (日タイ比較文化) を与え、現地ではプレゼンテーションとディスカッションを行う。</p> <p>本学のグローバルセンター教員 () と現地日本語学科教員 ()、 () () のあいだには、以前より密接な交流があり、今年度にはブーラパー大学側が () を招聘し、招待講演を開催する計画がある。今後の両学の学術交流協定締結に関する意見交換も行われている。</p>	
ブーラパー大学の特殊性	
<p>ブーラパー大学を米国サンノゼ州立大学との三極連携プログラムの相手校に選んだ背景には、歴史的かつ地理的な特殊性がある。ブーラパー大学は、タイ国東部チョンブリー県に位置し、タイ国東部には、ベトナム戦争時に米軍が利用していた基地が存在する。そのため、チョンブリー県パッタヤー特別市 (ブーラパー大学から車で1時間ほど) は、当時、米軍保養地として利用されていた。その影響から、現在のパッタヤーは東南アジア最大とも言われる歓楽街に成長している。派遣プログラムの中で、現地を視察することで、戦後の米国が与えてきた東アジア・東南アジアにおける影響力を現代的な観点から比較・考察することができる。また、米国の学生も加えて議論をおこなうことで、多面的な視点を獲得ことができ、サンノゼ州立大学との三極連携を主眼におくプログラムにアジアの連携先として適している。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
COIL 実績とシステムの整備	
<p>ブーラパー大学とサンノゼ州立大学をつないで実施する COIL 型科目「日本文化論コース」では、南からみた日本文化論として、日本と東南アジアの歴史的關係について、又戦後の東アジア・東南アジアにおける米国の影響力について取り上げ、学生によるプレゼンテーションやディスカッションをおこなう。法文学部には「高機能通信型 CALL システム」が導入されており、映像通信に最適な環境が整っている。WebEX などの授業支援ソフトをストレスなく利用できるほか、他の教室を含めた 3 点同時中継にも対応している。これまでサンノゼ州立大学 (SJSU) との 2 大学間で実施してきた COIL 科目のノウハウや技術を、ブーラパー大学との連携授業に応用する。</p>	
具体的なプログラム準備	
<p>ブーラパー大学の学生の本学への受入は 6-7 月に、本学からブーラパー大学への派遣は 9 月に実施し、10 月から COIL 型科目において双方向の事後学習を行う。本学には、日タイの比較文化・文学に関する研究を専門とする教員がおり、本コース運営に中心的役割を果たす。受入プログラムでは、ブーラパー大学の学生に対する基礎講座として、日タイ比較文化論・ヤポネシア文化論の特別講義を開講する。加えて地域文化の多様性を発見する南西諸島でのフィールドワーク、地域の企業でのインターンシップなども実施する。事後学習の COIL については、サンノゼ州立大学を加えた三極連携で実施し、ブーラパー大学からは、人文社会学部東洋言語学科日本語専攻で開講されている “Comparative Culture” “Cross Cultural Experience” “Independent Study” の科目をあてることを提案してもらっている。本学では、共通教育科目の “Intercultural Understanding and Acceptance” と「タイ文化研究入門」に COIL を導入する。</p> <p>本プログラムの実施に関して、ブーラパー大学人文社会学部東洋言語学科日本語専攻の () () より承諾を得ている。既存の教員・研究者間の交流を基礎として、本計画の中で COIL 型授業・海外研修プログラムの実施を経て、学生間の交流を促進していく。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

 相手大学名
(国名)

島嶼へき地医療コース連携校：ベレアカレッジ (米国)

① 交流実績 (交流の背景)

ベレア大学 (BC) の学科長である [] と 2 年前からルーラルナーシングについて情報交換を行っている。ベレア大学は、ケンタッキー州の都市圏から離れた地方に位置する学生数 1650 人の小規模校である。米国南部で初めて黒人と白人を同等の条件のもとに受け入れた私立大学であり、米国南部に位置していることから黒人やヒスパニック系の学生も多く、異文化理解およびルーラルナーシングを学ぶ上での交流大学として適していると考えられる。

[] とは、カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) 名誉教授かつ長野県看護大学名誉教授である [] を通じてコンタクトを取っている。[] は、2011 年に JSPS の外国人研究者招へい事業において、鹿児島大学に 1 ヶ月間の受け入れを行った。滞在中には、学部と大学院の講義に加え、[] を講師として教員を対象とした第 4 回国際セミナー¹⁾を 4 回シリーズで開催した他、第 2 回かごしま国際看護フォーラム²⁾において講師の一人として講演していただいた。また 2013 年には、鹿児島市で開催された日本看護倫理学会第 6 回年次大会 (大会長：[])³⁾のスペシャルトークの演者として招聘した。2014 年には、平成 25 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) で採択された「無医島に駐在する看護師の看護継続教育支援システムの開発」の研究課題において、UCSF Medical Center と Kaiser Foundation Hospitals での調査研究のため、[] のゲストハウスに 8 日間滞在し、密に研究打合せを行った。

- 1) The 4th International Seminar: Nursing Perspectives as a Profession, Oct. 12, 19, 26, Nov. 16, 2011.
- 2) The 2nd Kagoshima International Nursing Forum: Nursing Ethics- toward the Best Nursing Care for Patients, Oct. 22, 2011.
- 3) The 6th Conference of the Japan Nursing Ethics Association: Patient Choice and Health Professional Collaboration, June 8-9, 2013.

② 交流に向けた準備状況

看護学科長の [] とコンタクトを取っている。BC は小規模校であり、すべての授業が対面式で行われており、オンラインを用いた授業は行われていない。BC における COIL 型教育には、「公衆衛生看護学」のへき地医療についての時間を用いることとし、教育内容および教育方法については今後、双方で詳細を詰めていく予定である。今年 9 月には [] を招聘し、今後の双方向の交流についての方向性をディスカッションするとともに、教員を対象とした第 6 回国際セミナー¹⁾を開催する予定にしている。

米国では、へき地での看護活動を「人口密度の低い地域に対する専門的な看護師によるヘルスケアの供給である」と定義し、1980 年頃からルーラルナーシングの実践研究が行われてきた。また、米国のへき地では、診断・治療・ヘルスケアの提供について修士レベルの専門的な教育を受けた登録看護師がナース・プラクティショナー (NP) として、自律して高度な実践を行っている。広大な国土を有し、移民が多い米国におけるルーラルナーシングの発達は当然とも言えるが、米国は主として移民を受け入れる側であり、マイノリティと呼ばれる異国民の実際の生活や保健医療システムについて学生がイメージするのは困難と考える。本州最南端に位置し、物理的な最端性や文化的な境界性を特徴とする鹿児島県の島嶼を含めた保健医療施設において研修し、本学および韓国の学生とディスカッションすることは、米国の学生にとってもローカルとグローバルの展望について同時に学ぶことができる貴重な機会となる。また、日本の優れた保健医療システムや看護実践を学び、オバマケアで混乱を呈した米国の保健医療システムのあり方を考察する機会ともなる。

- 1) The 6th International Seminar: Rural Nursing in the US and Japan, Sep. , 2018. (予定)

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

 相手大学名
(国名)

島嶼へき地医療コース連携校：中央大学校赤十字看護大学（韓国）

① 交流実績（交流の背景）

中央大学校赤十字看護大学（CAU）と本学は 2012 年に学術交流協定を締結し、以降双方向の交流を毎年実現している。締結前の 2011 年と 2012 年にも本学の学生海外研修支援事業において 4 名ずつの学生を派遣しており、これまでの本学からの派遣学生は計 40 名、派遣教員は計 11 名、CAU からの本学への受入学生は計 30 名、受入教員は計 8 名である。交流プログラムにおけるこれまでの研修成果は、鹿児島大学医学部保健学科紀要第 22 巻、25 巻、26 巻、27 巻（2 編）、28 巻に掲載されている。交流プログラムの内容は、両国の保健医療施設の実地見学および研修の他、看護学部生が受講している講義と看護技術演習への参加およびディスカッションを行っている。双方向の交流を通して学生は、韓国の看護教育および保健医療制度を知ることにより、より深く日本の教育と保健医療のあり方を考えることができ、将来、国際的視野をもち活躍できる看護師の育成において高い効果を得ている。本学の交流プログラムに参加した CAU の学生に対しては、臨床実習として 30 時間分の単位が認定されているが、CAU の交流プログラムに参加した本学学生に対する単位互換については、本事業で検討する。教員の交流としては、2013 年に本学で開催した学術交流協定締結記念講演¹⁾に当時の学部長である [] および看護科学研究所長である [] を招聘した。また、第 4 回かごしま国際看護フォーラム²⁾に [] を講師の一人として招聘した。本学からは、CAU が主催した 2012 年の International Conference³⁾ に []、および 2013 年の Annual International Forum⁴⁾に当時の看護学専攻代表である [] が招聘され、講演を行った。2015 年には鹿児島大学病院が中央大学病院と交流協定を締結し、看護職の双方向の交流が実現している。

- 1) The Commemorative Lecture for the Conclusion of the Academic Exchange Agreement between Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University and Faculty of Medicine, Kagoshima University, Jan. 21, 2013.
- 2) The 4th Kagoshima International Nursing Forum: Rural and Disaster Nursing in Islands and Remote Areas, Feb. 6, 2016.
- 3) The International Conference: Globalization and Nursing Education, Nov. 16, 2012.
- 4) The Annual International Nursing Forum: Bridging the Gap between Research, Education and Practice in Nursing, Dec. 13, 2013.

② 交流に向けた準備状況

現在、CAU の教務委員長である [] をカウンターパートとしてコンタクトを取っている。CAU における COIL 型教育には、「地域看護学」のへき地医療についての時間をを用いることとし、教育内容および教育方法については今後、双方で詳細を詰めていく。また、単位互換制度の構築や中央大学病院での総合テーマ実習の可能性についても今後検討していく。今年 9 月には看護学部長の [] を招聘し、今後の単位互換を含めた交流についての方向性をディスカッションするとともに、教員を対象とした第 6 回国際セミナー¹⁾を開催する予定にしている。

韓国では、看護師免許取得後 1 年間の教育プログラムを修了し、農村地域に独立して診療所を開業している公務員看護師である保健診療員がへき地において高度な実践を行っている。保健診療員の制度は、過疎地域医療を担うために、1984 年に農漁村保健医療特別措置法により法制化された。CAU の交流プログラムに参加した本学学生は、保健診療所での研修を毎年行い、診療やケアの実地見学、家庭訪問への同行、および保健診療員や住民へのインタビューを通して、へき地医療における看護専門職の役割について学びを深めている。韓国では、看護職が開業権を有しており、保健分野での活躍が顕著であるが、福祉分野での看護職の活躍およびシステムについては日本が優れていると言われている。今後、日本と同様に超高齢化社会を迎えようとしている韓国の学生が、日本の優れた福祉システムや、臨床における実践がより優れていると言われている日本の看護を学び、本学および米国の学生とディスカッションすることは、韓国の学生にとっても貴重な機会となる。

- 1) The 6th International Seminar: Rural Nursing in the US and Japan, Sep. , 2018. (予定)

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	臨床獣医学コース連携校： ジョージア大学 (米国)
① 交流実績 (交流の背景)	
学生交流の実績	
<p>本学とジョージア大学は、1979年に大学間学術交流協定を締結し、農学部と獣医学部を中心に学生交流を行ってきた(2010年から2017年の実績で派遣31名、受入5名)。現在、全学部・研究科の中で最も活発にジョージア大学と交流しているのが獣医学部であり、派遣の多くを獣医学部の学生が占めている(2009年から2017年の実績で派遣28名、受入1名)。こうした15年以上継続してきた交流関係を基盤に、獣医学部が本事業においてジョージア大学と(国立中興大学と)の三極連携プログラムを提案する。</p>	
国際水準を満たす臨床獣医学教育のための派遣プログラムの内容と実績	
<p>両大学の学生交流はジョージア大学の夏季研修として、15年以上前に開始された。2013年より、「国際水準を満たす臨床獣医学教育」としてJASSOの海外留学支援制度に採択され、学生派遣プログラムを開始した。本プログラムは獣医師ライセンスの国際認証を視野に入れ、次世代の獣医学部の学生を対象とし、海外(特に臨床教育の卓越した欧米)の獣医学部における臨床教育プログラムへの参加を行うものである。参加学生には、国際水準の獣医学教育を体験することで自発的な学習意欲の向上を促す。国際感覚を持つ獣医師を目指すことで、動物医療、公衆衛生と研究の将来的な国際競争力を養う。参加学生を大学院への進学候補者として養成するプログラムである。実際に派遣された学生は、受入大学で臨床実習に参加し、各診療科において実際の症例について学ぶ。派遣学生のモチベーションの向上は著しく、帰国後に学会などでも積極的に発表している。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>本事業で開発する交流プログラムは、大学間の交流協定に基づき実施してきた従来の臨床研修プログラムをより発展させるものである。これまでの派遣のみではなく、特にジョージア大学からの学生の受け入れに注力し、積極的に学生交流、教員交流を行う。具体的には、米国のジョージア大学と中興大学の学生との協働学習を通して、日本の獣医学部の学生にグローバルな獣医学の問題を確認、学習させる。</p> <p>現在のグローバルな獣医学の問題として、第1にボーダレスな感染症が挙げられる。食料となる家畜の伝染病は従来からの対象であったが、さらにペット自体もグローバルな動きをする近代社会では、人畜共通感染症も含めて、グローバルかつグローバルな繋がりにおける対応が迫られており、それらにかかわる獣医師の養成は世界的な重要課題である。本事業では、ボーダレス感染症の問題を複数の国で世界共通課題として考えるプログラムを作成する。特に米国の伴侶動物医療の水準は世界のトップであることから、ジョージア大学の教員の講義をCOILで聴講し、それを元にディスカッションすることを予定している。また、COILを活用して、ジョージア大学と中興大学と鹿児島大学の獣医学部の学生に、共通の臨床問題を提起し、グループで診断シミュレーションを組み立てる参加型の臨床研修科目を開始する。これらは米国と台湾の大学のみならず、ヨーロッパやアジアの大学(既に、ポルトガル、トルコ、インドネシア、バングラディシュ、にはカウンターパートナーが存在する)の学生にもオープンな科目とすることを検討している。</p> <p>本プログラムに関するジョージア大学との準備状況としては、既に夏季の短期臨床研修生の派遣は15年以上継続しており、受け入れに関しては、2018年には1名の受け入れが決定している。本学からの派遣もJASSOと学内の奨学金を元に、学生の選抜を行うことで、モチベーションの高い学生の派遣を行っている。さらに、本学の動物病院は2017年に大幅に改築し、国内でも最も進んだシステムを採用し、臨床研修に十分対応できる。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	臨床獣医学コース連携校： 国立中興大学（台湾）
① 交流実績（交流の背景）	
学生交流の実績	
<p>本学と中興大学は、2009年に当時の農学部が学術交流協定を締結した。2013年には大学間の協定へと発展し、その後継続的に交流を行っている。2010年度から2017年度までの短期海外研修、及び、交換留学による交流実績は、受入15名に対し、派遣10名である。また、2018年度5月時点で中興大学の卒業生が本学博士課程に2名入学している（中興大学からの派遣留学ではないため、実績数には数えていない）。</p>	
ボーダレス獣医学教育を目指したアジア獣医学教育体験研修プログラムの内容と実績	
<p>2010年から開始した学生交流では、当初は両校の国際交流教員が中心になり、短期の臨床研修プログラムの形で受入のみを実施していた。2014年より、「ボーダレス獣医学教育を目指したアジア獣医学教育体験研修」としてJASSOの海外留学支援制度に採択され、派遣と受入の双方向交流を開始した。ボーダレスに活躍できる獣医師としての育成を目指し、海外の同僚と協力して活動する重要性に対する認識を明確に持つことを研修の目的として実施してきた。研修の質を高める工夫として、本学からの参加学生には、留学前から外国人留学生のチューターとして活動させるなど、プログラム参加に対する自覚を持たせている。また、派遣先では、現地の学生とともに大学附属動物病院における臨床ローテーション実習に参加し、海外大学の臨床教育を体験する機会を与えており、参加学生は受け入れ大学で臨床実習に参加し、各診療科において実際の症例について学ぶことができる。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>今回、本事業（三極連携リサーチ・プログラム）において開発する「臨床獣医学コース」を運営する担当教員は、本学と中興大学共に当時から交流を重ねてきた教員である（中興：■■■■■、鹿児島：■■■■■）。交流協定に基づいて、これまで実施してきた上記の研修実績を基盤に、新たにCOIL科目を開講し、米国のジョージア大学を含めた三極連携を形成する中で、研修内容をより充実したものへと発展させる。具体的には、中興大学とジョージア大学の学生との協働学習を通して、日本の獣医学部の学生にグローバルな獣医学の問題を確認、学習させる。現在のグローバルな獣医学の問題として、第1にボーダレス感染症が挙げられる。食料となる家畜の伝染病は従来からの対象であったが、さらにペット自体もグローバルな動きをする近代社会では、人畜共通感染症も含めて、グローバルかつグローバルな繋がりにおける対応が迫られており、それらにかかわる獣医師の養成は世界的な重要課題である。本事業では、<u>ボーダレス感染症の問題を複数の国で世界共通課題として考えるプログラムを作成する</u>。実際には、中興大学とジョージア大学のみならず、ヨーロッパやアジアや他大学（ポルトガル、トルコ、インドネシア、バングラディシュにカウンターパートナーが存在する）の学生にもオープンなプログラムを検討している。</p> <p>本プログラムに関する、中興大学との準備状況としては、既に夏季の短期臨床研修生の受け入れは7年以上継続しており、2018年も2名の受け入れが決定している。本学からの派遣もJASSOと学内の奨学金を元に、学生の選抜を行っている。本学の動物病院は2017年に大幅に改築し、国内でも最も進んだシステムを採用し、臨床研修に十分対応できる。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

 相手大学名
(国名)

食料生産コース連携校： テキサス A&M 大学 (米国)

① 交流実績 (交流の背景)

テキサス A&M 大学は、アメリカのテキサス州カレッジステーションに本部を置く州立大学である。1876年に設置されたテキサス州最古の高等教育機関であり、12 学科、約 6 万人弱の学生が在籍する。学生数ではアメリカ合衆国でも 2 番目の規模の大学である。校名中の“A&M”は“Agricultural and Mechanical”を意味し、現在は、Land Grant、Sea Grant、Space Grant の全ての指定を受ける全米でも数少ない大学で、アメリカ航空宇宙局 (NASA)、アメリカ国立科学財団 (NSF)、アメリカ国立衛生研究所 (NIH) 等から多くの共同研究・資金援助を受けている。研究での実績は高く評価され、高水準の学術研究と教育システムを維持するために設立された北米トップクラスの研究型大学の組織である。

本事業は、テキサス A&M 大学農学・生命工学部 (とタイ・チェンマイ大学) との三極連携により実施する。テキサス A&M 大学の [] (以下、 []) は、牛肉質研究における世界的に著名な研究者であり、特にアメリカン和牛の肉質に関する第一人者である。鹿児島大学農学部の [] が、2014 年 9 月に韓国の国立韓牛研究所で開催されたシンポジウム“韓牛研究所国際シンポジウム：韓牛の産肉性向上への新しい試みに向けて (Hanwoo Experiment Station International Symposium-Novel application to improve Hanwoo meat quality and quantity)”に招待され“Potential of epigenetics (application) for meat production of Japanese Black cattle”について講演をした。このシンポジウムに同じく講演者として招聘されていた [] が、 [] の研究、特に和牛のエピジェネティクスを基盤とした代謝プログラミングによる生産システムについて興味を持ったことから交流が始まった。実際、代謝プログラミングを家畜の飼養に取り入れた [] の研究は、極めて独創的である。2015 年 7 月にアメリカのフロリダ州、オーランドで開催されたアメリカ畜産学会に参加した後に、テキサス州カレッジステーションの [] の研究室を訪問し、国際共同研究に関する議論を深めた。

② 交流に向けた準備状況

本事業の農業生産コースでは、テキサス A&M の [] と本学の [] を中心に、日本の和牛とアメリカの和牛との肉質に関する、課題解決型リサーチ・プログラムを共同で実施する。牛肉研究は、アメリカの主要農産業であり魅力的でメジャーな研究分野である。特に和牛は、アメリカでも Kobe Beef として、今や著しくメジャーな品種になってきた。日本はアメリカにとって US Beef の主要な輸出国であり、日本の嗜好性の調査や日本のインテンシブな小規模生産についての研究は、アメリカ側にとって非常に魅力的なテーマである。本学とテキサス A&M (とチェンマイ大学) の間には「牛肉と健康」分野の研究で連携体制がすでに築かれており、本プログラムの準備は整っている。国際共同研究や国際シンポジウム開催を通して、テキサス A&M 大学の食肉科学研究分野のチームと学生の交流を行う計画がある。また、日本で和牛を研究したい学生等のプレ留学等も視野に入れて、本プログラムを実施する。COIL 型科目については、畜産圏の鹿児島大学として、“Global Beef Production in US and Japan”というタイトルで以下の内容の講義を行う。

1. 日本の牛肉生産、環境と歴史 (Beef production, environment, history in Japan)
2. 日本の牛肉生産システム (Beef production system in Japan)
3. 日本の牛肉生産の問題点 (Problem of beef production in Japan)
- 4.-5. 和牛の肉質 (Meat quality of Wagyu beef I & II)
6. 和牛肉と健康 (Wagyu beef and health)
7. アメリカの牛肉生産、環境と歴史 (Beef production, environment, history in US)
8. アメリカの牛肉生産システムの問題 (Problem of beef production in US)
- 9.-10. アメリカの牛肉の肉質 (Meat quality of US beef I & II)
11. アメリカの牛肉と健康 (US beef and health)
12. 農業環境についての日米比較 (Comparison of agricultural environment between US and Japan)
13. 牛肉に関する日米比較 (Comparative study of beef between US and Japan)
14. 日米連携による牛肉生産の可能性 (Potential collaboration in US and Japan)
15. 日米における牛肉生産の将来戦略 (Future strategy of beef production in US and Japan)

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】

 相手大学名
(国名)

食料生産コース連携校： チェンマイ大学 (タイ国)

① 交流実績 (交流の背景)

チェンマイ大学はタイのチェンマイに位置し、20 の学部よりなる国立の総合大学で、教育、研究および地域開発に重点を置いている。本交流プログラムはチェンマイ大農学部を中心に展開する。農学部は、チェンマイ大学の中でも最大の学部の一つで、タイ北部地域での学術研究拠点として最も期待され、国際農業開発の現地実習プログラムにおいては要となる大学である。

本事業の食糧生産コースを主担当する本学農学部の[]は、和牛の研究を専門とする。昨年5月まで九州大学に在籍しており、九州大学の農学研究院とチェンマイ大学農学部との間で多くの交流を実施してきた実績をもつ。交流実績として、2008-2010 年度に実施された大学教育の国際化加速プログラム「アジア農学教育の国際プラットフォーム形成 (IPAAE)」において、チェンマイ大学から述べ9人の教員を招聘し、現地と日本でリレー講義を行った。また、日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業による「ハイブリッドイネと農業生態系の科学」(2007-2009 年度)、同若手研究者交流支援事業「東アジア首脳会議参加国からの若手研究者招へい」や「インドシナ地域の農学研究教育の変容に対応する多重的フォローアップ研究」(2009 年度)などによる研究者交流の実績もある。

その他、[]自身の個別研究も活発に実施しており、食肉科学分野の []との共同授業や日本で2016年に福岡市で開催されたアジア大洋州畜産学会議でのシンポジウム開催など、これまでチェンマイ大学の食肉科学分野のチームと深い交流を重ねてきた。この交流関係の種を鹿児島大学にてさらに深めていきたいと考えている。

② 交流に向けた準備状況

本事業では、チェンマイ大学の食肉科学研究分野の研究者および学生との交流について計画しており、また日本で学位を取得したい学生等のプレ留学等も視野に入れて、本プログラムを実施したいと考えている。牛肉研究は、世界的に魅力的でメジャーな研究分野であるが、特に和牛は、アメリカやオーストラリアが世界に向けて、精子や受精卵を販売し、いまや著しくメジャーな品種になってきた。タイでも観光客をターゲットとして独自の牛肉生産を目指しており、和牛研究は非常に魅力的なテーマである。鹿児島は、日本有数の畜産圏であり、昨年は、和牛共進会で総合優勝となっており、鹿児島大学として、“Global Beef Production”というテーマに基づいて、タイのチェンマイ大学と以下の内容の共同講義を準備している。このような事前学習を経て、チェンマイ大学の学生とテキサス A&M 大学の学生と本学の学生がシンポジウムで研究交流を行う。日米タイの三極連携で実施することで、「グローバル牛肉生産」をテーマとする本コースの魅力はより高まる。

1. 日本の牛肉生産、環境と歴史 (Beef production, environment, history in Japan)
2. 日本の牛肉生産システム (Beef production system in Japan)
3. 日本の牛肉生産の問題点 (Problem of beef production in Japan)
- 4.-5. 和牛の肉質 (Meat quality of Wagyu beef I & II)
6. 和牛肉と健康 (Wagyu beef and health)
7. タイの牛肉生産、環境と歴史 (Beef production, environment, history in Thailand)
8. タイの牛肉生産システムの問題 (Problem of beef production in Thailand)
- 9.-10. タイの牛肉の肉質 (Meat quality of Thai beef I & II)
11. タイの牛肉と健康 (Thai beef and health)
12. 農業環境について日本とタイの比較 (Comparison of agricultural environment between Thailand and Japan)
13. 牛肉に関する日本とタイの比較 (Comparative study of beef between Thailand and Japan)
14. 日本とタイの連携による牛肉生産の可能性 (Potential collaboration in Thailand and Japan)
15. 日本とタイにおける牛肉生産の将来戦略 (Future strategy of beef production in Thailand and Japan)

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	食の安全コース連携校： オクラホマ州立大学 (米国)
① 交流実績 (交流の背景)	
学術交流の実績	
<p>オクラホマ州立大学教員の [] と鹿児島大学農学部教員の [] は、2010年に博士研究員としてジョージア大学に在籍して以来、同じく食の安全に関わる研究を通じて旧知の仲であり、食性病原菌であるサルモネラ、大腸菌、リステリア菌の制御法に関する共同研究を以来続けている。 [] は、オクラホマ州立大学食品農産物研究センターにおける食品安全スペシャリストとして、食の安全に関する有用なシステムである HACCP (Hazard Analysis and Critical Control Point) および食品製造規範 (GMP; Good Manufacturing Practice) に関して監査員指導を実施している。日米両国の食品の安全性確保に関わる技術的な問題点のみならず、各国の産業的・行政的相違点や類似点を比較検討するための交流を続けてきた。</p>	
学生派遣の実績	
<p>世界の食品産業では食品安全管理・品質管理の高度化が必要不可欠な状況となっており、日本においても食品産業の発展及び国際競争力強化のために、食品安全に関わる専門人材の育成が急務となっている。こうした中、本学農学部・農学研究科では、2016年から英語により <u>HACCP について学ぶ研修を海外で実施</u>してきた。これまでにタイ (40名) とアメリカ (3名) の学生派遣をおこなった実績がある。</p> <p>また、本学は農林水産省、鹿児島県、日本マクドナルド株式会社、食品安全マネジメント協会と連携し、「食品管理技術者養成コース」を立ち上げ、産学官連携による食品安全専門人材の育成にも取り組んでいる。鹿児島の食品産業者が世界最先端のノウハウを持つことにより、食品安全認証の取得率を全国で最上位にあげ、九州地域ひいては日本全国の食品関連業界をリードするようになるため、本学には日本の食品産業への HACCP 導入を推進する人材の育成が期待されている。こうした社会的要請の下、本事業によって、グローバルな観点から食の安全に関する問題に取り組む人材の育成を行うことになった。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>オクラホマ州立大学には、上述したように、食品管理技術者養成コースにおける学生の受入体制が整っている。本学は、これまで HACCP 研修を目的として本学と協定のあるジョージア大学に学生を派遣してきたが、本事業で「食の安全コース」を開始するにあたり、<u>コースの目的や研修の内容からオクラホマ州立大学が交流先としてよりふさわしいと判断した。</u></p> <p>本プログラムでは、具体的に、オクラホマ州をはじめとした中部大手ハンバーガーチェーンおよび飲料会社の米国中東部地域の生産拠点で、中長期インターンシップを実施し、本学の学生を派遣する。また、<u>鹿児島地域における、とくに畜肉およびその加工品製造への米国学生の受け入れを行う</u>と同時に、日米両国における食の安全に関わる問題点共有のため、「適正農業規範と適正製造規範と HACCP を通じたグローバル・ローカルな食品安全と持続可能な食料生産」をテーマとする国際ワークショップ “Workshop for Global and Local Food Safety and Sustainable Food Production through GAP/GMP/HACCP” を、<u>オクラホマ州立大学 (米国) とメーファールアン大学 (タイ) と本学との三極連携</u>で共同開催する。</p> <p>COIL 型科目においては、「食品の安全」のキーワードのもと、熱帯から亜熱帯産作物、さらには鶏肉、牛肉、豚肉といった畜肉に至るすべての食品において、近年の国境を跨いで発生した (あるいは可能性のある) 食品事故について、世界的課題にターゲットを絞って協働で解決を目指す課題解決型の授業を行う。</p> <p>授業概要については、以下の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HACCP/GMP のための内部監査人の育成 (Internal auditor training for HACCP/GMP) ・ 食品微生物学 (Advanced food microbiology) ・ 食品加工工学の専門知識 (Advanced knowledge of food process engineering) ・ 食の安全の質的管理技術 (Quality management skill for food safety) <p>本コースの準備として、オクラホマ州立大学と実施してきた共同研究には以下のものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ HACCP-based Inactivation procedure of food borne pathogenic bacteria in local food industry ・ Investigation of useful antibacterial reagents for beef slaughter house 	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	食の安全コース連携校： メーファールアン大学 (タイ)
① 交流実績 (交流の背景)	
学術交流の実績	
<p>タイ・チェンライ市に位置するメーファールアン大学 (MFU) の農産学を、本コース担当者である鹿児島大学農学部の■■■■が2006年に訪問し、とくに熱帯産農産物の鮮度保持に関する共同研究を開始した。その後、毎年相互訪問し、共同研究成果に関する議論を続けている。2014年には、■■■■が招聘教授として滞在し、MFU 学生の研究について共同指導するとともに、同年 MFU で開催された国際シンポジウムにおいても、食の安全に関わる基調講演を行った。2016年には学部間交流協定締結の準備作業として MFU 教員 5 名が鹿大農学部を表敬訪問した。同年、鹿児島大学農学部長、■■■■他教員 1 名で MFU を訪問し、学長および副学長と将来的な大学間包括協定を視野に入れた取り組みについて議論するとともに、その最初の取り組みとして学部間協定を締結した。さらに、本年 3 月より、日本学術振興会外国人研究者長期招へい事業として、■■■■を 10 ヶ月間受け入れ、“Effect of high pressure and its availability to the shelf-life and safety of tropical fruit”に関する共同研究を実施している。本年 11 月には、MFU 設立 20 周年記念シンポジウムにおいて、本学農学部長は国際委員会のメンバーとして、■■■■は招待講演演者および High pressure technology for food safety and quality と題するワークショップオーガナイザーとしての役割を果たす。</p>	
学生交流の実績	
<p>学生交流としては、協定締結以降、短期研修生として鹿児島大学に 2 ヶ年で 4 名を受け入れ、本年も 2 名を受け入れる予定である。鹿児島大学からは 2016 年に MFU Agro-Industry Summer Camp に 3 名を派遣し、タイ北部におけるロイヤルプロジェクトと現地文化交流を通じた相互理解教育を実施した。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>本事業では、連携大学間でこれまで築いてきた信頼関係に基づいて、<u>鹿児島大学とメーファールアン大学とオクラホマ州立大学の学生の協働により、米国と日本と東南アジアにおける農業生産から食品消費に至るプロセスについて、適正農業規範 (GAP; Good Agricultural Practice)、食品安全管理基準 (HACCP; Hazard Analysis and Critical Control Point)、食品製造規範 (GMP; Good Manufacturing Practice)</u>をベースとした課題解決型のプログラムを構築する。その成果として、<u>食の安全を生産から消費までをトータルに捉え、指導的な立場でグローバルに活躍できる人材育成を展開するものである。</u></p> <p>メーファールアン大学においては、学部間学術交流協定を締結済みであるとともに、本年 10 月には教員が来学し、ダブルディグリープログラムの開始に向けた準備作業を開始する予定であり、学生のみならず、教員の相互交流について、全く問題は見当たらない。前述のように、本年はメーファールアン大学において国際シンポジウムを開催する予定であり、鹿児島大学農学部としても開催に協力している。今後は鹿児島大学を中心として、メーファールアン大学ならびにオクラホマ州立大と「<u>適正農業規範と適正製造規範と HACCP を通じたグローバル・ローカルな食品安全と持続可能な食料生産</u>」をテーマとする国際ワークショップ (“Workshop for Global and Local Food Safety and Sustainable Food Production through GAP/GMP/HACCP”) ならびにシンポジウムを開催予定であり、三大学連携によるワークショップを持ち回りで開催して行く中で、本プログラムでの学生交流や COIL 科目の内容をより充実したものへと発展させていく準備がある。</p> <p><u>三極連携の COIL 型科目においては、「食品の安全」のキーワードのもと、熱帯から亜熱帯産作物、さらには鶏肉、牛肉、豚肉といった畜肉に至るすべての食品において、とくに近年の国境を跨いで発生した (あるいは可能性のある) 食品事故について、世界的課題にターゲットを絞って共同で解決を目指す授業を行う企画がある。</u></p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	食と健康コース、ナノバイオコース連携校： ノースダコタ州立大学 (米国)
① 交流実績 (交流の背景)	
学生交流の実績	
<p>本学とノースダコタ州立大学 (NDSU) は、2014 年度から学術交流協定に基づく交流を行っている。学部科目「北米におけるグローバル人材育成」と大学院科目「GOES 海外研修」によって、短期は 58 名、中長期は 3 名、合計 61 名の学生をこれまでに NDSU へ派遣した。</p>	
シンポジウム実績	
<p>また、理工学分野と農学分野において本学とノースダコタ州立大学の合同シンポジウムを毎年開催し、教員・研究者・学生間の学術交流を実施してきた実績がある。</p>	
【農学分野】	
<p>2016 年度より本学農学部教授 [] と NDSU 植物科学教授 [] とが、国際共同研究『システム的なアプローチによる「食と健康」に関する研究』を継続中である。また、NDSU と本学が中心になり、食と健康の国際学会を立ち上げ、2015 年度と 2016 年度にはそれぞれ開催校として、年次大会 (NDSU Annual Conference on Food for Health / Food for Health International Conference) を開催した。</p>	
【理工学分野】	
<p>2015 年度より、本学と NDSU の間で、バイオテクノロジー・ナノ材料および高分子に関する合同シンポジウムを交互開催の形式で行っており、両校の大学院生の交流、相手校への短期留学の契機になってきた。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> 1st NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers (2015 年 10 月 15～16 日, North Dakota State University, Fargo, North Dakota, USA) Joint Symposium of JTBW2016 & KNJS2016 (7th Japan-Taiwan Bilateral Workshop on Nano-Science (JTBW 2016) と 2nd KU-NDSU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers (KNJS 2016) の合同シンポジウム) (2016 年 10 月 31 日～11 月 3 日, Kagoshima University, Kagoshima, Japan) 3rd NDSU-KU Joint Symposium on Biotechnology, Nanomaterials and Polymers (2017 年 10 月 12～13 日, North Dakota State University, Fargo, North Dakota, USA) 	
② 交流に向けた準備状況	
【農学分野：食と健康コース】	
<p>交流実績に記載した食と健康分野の国際学会は、2018 年 7 月にも NDSU で開催され (4th NDSU Annual Conference on Food for Health, 2018 年 7 月 8 日～11 日, North Dakota State University, Fargo, North Dakota, USA)、本学農学部からも参加を予定している。また本学教員と共同研究を遂行中の NDSU の [] は NDSU の国際連携副学長補佐を務めており、同教授から本事業におけるプログラム実施協力の承諾を得ている。既存の教員・研究者間の交流を基礎として、本計画の中で合同シンポジウムにくわえて、COIL 型授業の実施を行い、学生間の交流を促進していく。</p>	
【理工学分野：ナノバイオコース】	
<p>交流実績に記載の通り、NDSU と鹿児島大学の間でバイオテクノロジー・ナノ材料および高分子に関する合同シンポジウムを毎年交互開催の形式で行っており、2018 年も 10 月 31 日～11 月 3 日の期間に鹿児島大学で開催予定である。このシンポジウムを利用して、新たな交流プログラムを準備する。</p> <p>また現在、本学理工学研究科 化学生命・化学工学専攻 応用化学・生命工学コースの博士前期 (修士) 課程では、留学生にも対応可能な英語による 2 つの授業 (Special Lectures on Biochemical Engineering および Advanced Lectures on Applied Chemistry) を開講している。本計画の実施においては、これらの授業をオンラインで配信して (米国とは時差があるので、リアルタイムではなく、パスワードをつけたオンライン教材を用いて、いつでも受講できるようにする)、NDSU の学生に聴講してもらい、毎年開催している NDSU との合同シンポジウムの際に、鹿児島大学の学生とこれらの講義内容について議論するプログラムを準備する。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	食と健康コース連携校： 湖南農業大学 (中国)
① 交流実績 (交流の背景)	
学生交流の実績	
<p>本学と湖南農業大学は、1989年に学術交流協定を締結した。2010年度から2017年度の間短期海外研修及び交換留学による交流実績は、<u>受入 21名に対し、派遣 4名</u>である。また、湖南農業大学の卒業生が本学修士課程に多数入学している（湖南農業大学からの派遣留学ではないため、実績数には数えていない）。</p>	
鹿児島大学友好大使	
<p>湖南農業大学には、本学で博士号を取得した研究者も多く、<u>3名に「鹿児島大学友好大使」</u>を委嘱しており、本学との強い連携のもと、学生の派遣や受入の推進役となっている。</p>	
合同シンポジウムの実績	
<p>本学と湖南農業大学は、<u>米国ノースダコタ州立大学をくわえた三大学連携により、2015年から毎年「食と健康」国際学会大会を開催してきた</u>（会場校は持ち回り）。三大学から多くの研究者や教員が参加し、成果報告を行うとともに交流を深めている。</p>	
国際共同研究の実績	
<p>2003年から現在まで継続して、本学農学部教授・■■■■と湖南農業大学の教授・■■■■、教授・■■■■、教授・■■■■のあいだで国際共同研究を実施してきた。中国薬草の健康維持機能や免疫調節機能についての研究、ポリフェノールを利用した家畜生産性機能の研究などがあり、本事業ではこれらの研究をベースに、学生の派遣・受入、事前事後学習（COIL）を行う「食と健康」コースを立ち上げる。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>本事業で開発する「三極連携リサーチ・プログラム」の「食と健康コース」は、農学部食料生命科学科を運営母体とし、食品科学機能コースが研究室ベースで学生の派遣受入を行う。学科長の■■■■をはじめ、本学の教員は三極連携の相手大学である湖南農業大学（とノースダコタ州立大学）との間で、国際共同研究や合同シンポジウム等を通して信頼関係を築いてきた。</p> <p>本コース開発の基盤となる、湖南農業大学教員と本学教員との間の共同研究は2006年から2017年までの間で共著論文15本を数え、英語又は中国語で発刊されている。2017年度発表の最新論文には、次の3本がある。</p>	
<ol style="list-style-type: none"> ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■: Polyphenols from <i>Lonicera caerulea</i> L. berry attenuate experimental nonalcoholic steatohepatitis by inhibiting proinflammatory cytokines productions and lipid peroxidation. <i>Mol Nutr Food Res.</i> 61(4), 887-896 (2017) ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■: Polyphenols from <i>Lonicera caerulea</i> L. Berry Inhibit LPS-induced Inflammation through Dual Modulation of Inflammatory and Antioxidant Mediators. <i>J. Agric. Food Chem.</i> 65(25):5133-5141(2017). ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■, ■■■■*: Magnolol additive as a replacer of antibiotic enhances the growth performance of Linwu ducks. <i>Animal Nutrition.</i> 2017. http://dx.doi.org/10.1016/j.aninu.2017.03.004 	
<p>両大学の連携体制は十分に築かれており、各大学の担当教員は、プログラム内容についてメールで打ち合わせを行っており、「食品の安全と機能」「食と健康」「島嶼の食文化」「健康と伝統食の関わり」「食文化の多様性」をテーマとしてプログラムを開発することが合意されている。</p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	ナノバイオコース連携校： 国立成功大学（台湾）
① 交流実績（交流の背景）	
学生交流の実績	
<p>本学と国立成功大学（NCKU）は、2005年に学術交流協定を締結した。学生交流について、2010年から2018年の間に派遣19名、受入12名の実績がある。</p>	
合同ワークショップの実績	
<p>2010年度より、国立成功大学-鹿児島大学-大阪大学の間で（2015年度は米国NDSUも加わって）ナノサイエンスおよび先端材料に関する合同ワークショップを毎年持ち回り開催の形式で行っており、教員・研究者・学生あわせて毎年100名以上の参加者がある。</p> <p>本ワークショップでは、教員や研究者の口頭発表の他に、学生によるショートプレゼンテーションおよびポスターセッションの枠を設け、教員・研究者らと学生との垣根のないフリーディスカッションの場を設定しており、今後の研究分野を創発し、有機的な交流のきっかけが得られる有意義な機会となっている。口頭発表やポスター発表におけるディスカッションをきっかけに共同研究へと発展させ、新技術や新材料を開発することが本ワークショップの重要な目的である。さらに、日台の学生交流によるグローバル人材育成も主な目的としており、大学院生の留学のきっかけにもなっている（2011年度1名派遣）。合同ワークショップは、2010年に本学で第1回を開催し、2017年度までに合計8回開催の実績がある。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>交流実績に記載の通り、NCKUと鹿児島大学の間では、ナノサイエンスおよび先端材料に関する合同ワークショップを毎年開催しており、今年も7月21～24日の期間に大阪大学で開催予定である。これまで9年間、毎年開催してきた合同ワークショップを通じた相互交流を核として、新たな交流プログラムを準備する予定である。</p> <p>現在、理工学研究科 化学生命・化学工学専攻 応用化学・生命工学コースの博士前期（修士）課程では、留学生にも対応可能な英語による2つの授業（<u>Special Lectures on Biochemical Engineering</u> および <u>Advanced Lectures on Applied Chemistry</u>）を開講している。これらの授業をオンラインで配信する（リアルタイムではなく、パスワードをつけたオンライン教材を用いて、いつでも受講できるようにする）。三極連携の相手校となる成功大学（とノースダコタ州立大学）の学生に聴講してもらい、毎年開催している上記合同ワークショップのときに、鹿児島大学の学生とこれらの講義内容について議論するプログラムを準備する。授業概要は以下の通り。</p>	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 糖鎖ナノバイオテクノロジー（Sugar Chain based Nano-Biotechnology） 2. 多糖類の科学と技術（Science and Technology of Polysaccharides） 3. 微生物と生体防御システムの化学（Chemistry in Microbial Components and Biodefense System） 4. 生体材料工学（Biomaterials Engineering） 5. 分子イメージング（Molecular Imaging） 6. 分子バイオテクノロジー（Molecular Biotechnology） 7. ワクチン開発（Vaccine Development） 8. 分光分析の原理と応用（Fundamentals and Applications of Spectroscopic Analysis） 9. 環境分析における質量分析（Mass Spectrometry in Environmental Analysis） 10. マイクロリアクター（Microreactor） 11. 有機・無機ハイブリッド材料（Organic-Inorganic Hybrid Materials） 12. 化学のためのコンピューター科学（Computer Science for Chemistry） 13. 環境における有害微量物質の分析（Analysis of Hazardous Trace Substances in Environments） 	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	環境建築デザインコース連携校：タスキージ大学（米国）
① 交流実績（交流の背景）	
学術研究交流の実績	
<p>タスキージ大学建築学部の教員（ ）と鹿児島大学教員（ ）は25年以上に亘っての知己であり深い交友関係にある。両者が建築学の大学教員として勤務するようになって以来、お互いの大学の他教員や学生を交えて数度にわたる交流実績をもっている。 は、環境建築に関する国際認証プログラムである LEED の認定建築家であり、南アフリカ共和国等で自助建設住宅の供給プロジェクトの実績を有する。</p> <p>2013年には、国際文化交流財団招聘事業の助成を得て、 教授を日本に招聘、奄美大島名瀬市住用地区をフィールドとして「奄美諸島における自助建設可能な仮設住宅プロトタイプの開発ワークショップ」と題し、約1週間に亘る共同設計ワークショップを行った。ここでは奄美の伝統的な建築技法を現在に活かした家屋の応急復旧や仮設住宅のデザイン開発を行ったのち、地元の自治体・住民に対する成果報告会を行った。2014年には、 がタスキージ大を訪問し、前年度の日本でのワークショップの成果報告を同大建築学部にて行った他、同大学長、国際交流担当理事、タスキージ町長に面会した。その他、将来の共同活動の準備として地域が抱える課題について視察を行った。</p>	
学生交流の実績	
<p>2015年には、国際交流基金（Center for Global Partnership, Japan Foundation, USA）の助成を経て、再び 教授および5名の学生が来日し、鹿児島大学大学院生とともに肝付町高山にて <i>Cultural Understanding Through Design: A Joint Project for Kagoshima & Tuskegee</i> と題した設計ワークショップを開催した。約1週間の活動のち、高山町文化センターにて、町長はじめ自治体職員や多くの市民の参加による成果発表会を行った。その様子はテレビ、新聞等にも報道された。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>タスキージ大学建築学部と鹿児島大学建築学専攻の間には上記のような交流実績があり、相互に学部/専攻、教員の活動内容を良く理解している。また担当教員が相互に訪問した際、国際交流関係部局や担当役員にもこれまでの交流実績を説明しており、今回の申請に当たっても良好な協力体制を構築している。</p> <p>タスキージ大学建築学部、鹿児島大学建築学専攻ともに、1) 地方大学であること、2) 比較的小規模な学部/学科であること、3) 5年ないしは4+2年の建築設計プログラムと4年制の建設工学プログラムを併設し、NAAB/JABEE 認証を得ていること、以上のような共通点を持っており、教育交流がお互いのプログラムの質的向上に資する点で認識の一致を見ている。</p> <p>2013年、2015年の2度の鹿児島県内でのワークショップを経て、日本への招聘による具体的活動内容およびノウハウはすでに熟知している。また鹿児島でのワークショップのみならず、東京・京都見学など、日本の中心的文化に触れるプログラムも実施しており、アメリカの学生の関心を広く集めることができる。2015年の国際交流基金の助成プログラムを実施した際に、日本への招聘のち米国に訪問する企画についても両大学で合意済みである。その企画では、タスキージ大周辺地区の歴史と現在の課題を把握したうえで文化交流による地域創生プログラムに関する建築的提案を行う予定であるが、残念ながら担当教員の業務の都合により、まだ実現していない。しかし、経済的基盤と状況が整えば、実施可能な準備は整っている。</p> <p>本学とタスキージ大学は、<u>インネシアのディポネゴロ大学を加えて、本事業で開発する「三極連携プログラム」の内容について、建築学専攻の教員間でメールの打ち合わせを行っている。熱帯・亜熱帯地域における風土建築の相互理解と応用をテーマに、COIL を利用した連携授業と合同ワークショップからなる、建築学や環境デザインを専攻する大学院生向けのコースを実施することが合意されている。</u></p>	

交流プログラムを実施する相手大学について 【相手大学ごとに①、②合わせて1ページ以内】	
相手大学名 (国名)	環境建築デザインコース連携校： ディポネゴロ大学 (インドネシア)
① 交流実績 (交流の背景)	
学生交流の実績	
<p>ディポネゴロ大学と鹿児島大学の間には大学間学術交流協定があり、学生交流に関する覚書も取り交わしている。多くの学部・学科の間で交流があり、<u>2010年から2017年までの間に4名の学生を派遣し、17名の学生を受け入れた実績がある</u>。本事業の「三極連携リサーチ・プログラム」において「環境建築デザインコース」を運営する鹿児島大学建築学専攻は、<u>2014年後期から2015年前期にかけて、ディポネゴロ大学から2名の交換留学生を受け入れ、2年次の設計演習課題を受講させ専門教育を施した</u>。その間、三極連携のもう一つの大学、米国タスキギー大学との設計ワークショップを実施し、ディポネゴロ大学からの留学生も、本学の学生とともに参加した。すなわち2015年が事実上の三極交流の始まりである。</p>	
学術交流・ワークショップの実績	
<p>2015年、2名の交換留学生の帰国に際し、ディポネゴロ大学の■■■■教授が鹿児島大学に来学、■■■■や研究科長と面会し、さらなる交流の発展について意見交換した。2016年より、鹿児島大学建築学専攻は、ディポネゴロ大学が主催する国際建築ワークショップ (IFeS) への参加要請を受け、2016年には参加を検討したが、教員の不慮の病欠により実現出来なかった。</p> <p>翌2017年、再びディポネゴロ大学より国際建築ワークショップ (IFeS) への参加要請を受けたので、鹿児島大学工学部国際交流基金の助成を受け、<u>教員2名、博士前期課程学生4名が、5泊6日の日程でこれに参加、ディポネゴロ大学を訪問し、スマラン市にて活動した</u>。ワークショップでは、スマラン市中心市街地内の中国系居住区とアラブ系居住区の現地調査と、環境改善に向けた建築的提案を行ったほか、旧オランダ統治時代の建築遺産を重点的に視察した。伝統的居住文化の多様性と、異なる建築文化の環境への順応について体験的に学習し、今後の研究教育交流に向けた豊かな可能性を確認した。</p>	
② 交流に向けた準備状況	
<p>ディポネゴロ大学と鹿児島大学の間にはこれまでも豊富な交流経験があり、教員間交流のみならず種々の事務手続窓口間の連絡状況も良好である。鹿児島大学の担当教員 (■■■■) は、<u>昨年の渡航も含めて3回のインドネシア渡航の経験があり、ディポネゴロ大学が立地するスマラン市にも二度滞在経験があり、現地の状況を良く理解している</u>。また■■■■は2014年後期から2015年前期にかけてディポネゴロ大学から受け入れた交換留学生の指導教員を担当し、同大学の学生の継続的指導に当たった経験がある。</p> <p>ディポネゴロ大学の担当教員■■■■は、日本 (神戸大学) で学位を取得しており、日本および日本の国立大学の事情に精通している。また■■■■は、<u>2016年2017年の二度の国際ワークショップの企画運営を主導し、本プログラムが計画する活動内容に対する、豊富な経験を持っている</u>。■■■■の専門分野は居住環境計画であり、本プログラムの活動内容と目的に合致している。</p> <p>本学とディポネゴロ大学は、米国タスキギー大学を加えて、本事業「三極連携プログラム」の内容について、<u>建築学専攻の教員間でメールの打ち合わせを行っており、熱帯・亜熱帯地域における風土建築の相互理解と応用をテーマに、COILを利用した連携授業と合同ワークショップからなる、建築学や環境デザインを専攻する大学院生向けのコースを実施することが合意されている</u>。<u>三大学連携のCOIL型科目においては、熱帯や亜熱帯気候における環境デザインに焦点をあて、それぞれの地域の特徴的な在来建築を紹介し、現代的課題について協働で学習する授業を行う</u>。また、各大学の学生が相手大学を訪問し、COILを通じた学習を現場でデザイン活動に統合するワークショップを各大学の持ち回りで開催する。三大学共通の目標として、三地域の伝統技術を比較し、相互に理解することを通じて、グローバルかつローカルな視点もつ人材を育成する。将来的には、COIL型科目やワークショップへの参加者をお互いの研究室への長期留学につなげる。</p>	

本事業の実施計画、評価体制 【①は1ページ以内、②、③、④は合わせて2ページ以内】

① 年度別実施計画
【平成30年度（申請時の準備状況も記載）】

1. 平成30年度学生海外研修（主に派遣）の実施
2. JASSO「海外留学支援制度」本学「学生海外研修支援事業」などの申請を行う（以後毎年申請）
3. 本事業における科目担当および派遣プログラムの運営を担当する特任教員2名を雇用
4. 本事業の派遣に関する事務を担当する専門職員1名雇用
5. COIL型授業遂行用の設備・システムの導入
6. COIL型授業のための教材作成の準備（シラバスの英語化を含む）
7. 本事業プログラム担当教員を北米に派遣し、COIL型教育の研修受講
8. 連携大学から担当教員を招聘し、本事業のキックオフシンポジウムの開催、プログラム協定の締結
9. プログラム運営委員会の設置、開催
10. プログラム参加大学間における各コース別の合同シンポジウムを通じた教育・研究交流

【平成31年度】

1. 本事業の米国拠点となる北米教育研究センターのプログラムをコーディネートする特任教員1名雇用
2. 外国人留学生の受入プログラムや日本人との協働学習を企画運営する特任教員1名採用
3. 本事業における受入に関わる事務を担当する特任職員1名を雇用
4. 本事業における専用ウェブサイト・SNSページの開設・パンフレットの印刷
5. 外国人学生のインターンシップ受入先の開拓（企業・自治体との調整）
6. 平成31年度プログラム参加学生の海外派遣・受入の実施（P-SEG Interactive 第1期生）
7. 北米教育研究センターにおけるインターンシップ受入、教職員研修の実施
8. プログラム参加大学間における各コース別の国際シンポジウムの開催、教育研究交流
9. COIL（Online共同授業）のためのオンライン教材を作成
10. プログラム参加学生（日・米・アジア）を中心としたオンライン国際学生会議の開催

【平成32年度】

1. 平成32年度プログラム参加学生の海外派遣・受入の実施（P-SEG Interactive 第2期生）
2. 北米教育研究センターにおける日本人学生のインターンシップ実施、職員研修の実施
3. 鹿児島地域における外国人学生のインターンシップ実施、新規受入先の開拓
4. プログラム参加学生（日・米・アジア）を中心としたオンライン国際学生会議の開催
5. プログラム参加大学間における各コース別の国際シンポジウムの開催、教育研究交流
6. COIL（Online共同授業）による授業実施。
7. 外部評価委員会の設置、開催

【平成33年度】

1. 平成33年度プログラム参加学生の海外派遣・受入の実施（P-SEG Interactive 第3期生）
2. 項目2～6については、32年度と同様
3. 本事業の補助機関終了後に関する計画を立案

【平成34年度】

1. 平成34年度プログラム参加学生の海外派遣・受入の実施（P-SEG Interactive 第4期生）
2. 項目2～6については、は32年度と同様
3. 本事業5ヶ年を総括し、今後の発展について検討するための国際シンポジウムの開催

② 交流プログラムの質の向上のための評価体制

本学では、平成 26 年度に採択された「地（知）の拠点大学整備事業（COC）」（大学改革推進等補助金）において、学内運営委員会を組織してマネジメントにあたりるとともに、評価については学内評価委員会、学外評価委員会を設けて適性な評価を実施している。

本事業の運営にあたっては、この事業等を参考にしてグローバルセンターが運営を統括し、「米国から鹿児島、そしてアジアへ—多極化時代の三極連携プログラム」学内運営委員会を設け、さらに拡大委員会として、本学ならびに海外参加校を加えた鹿大・海外参加大学プログラム運営委員会を設ける。これらの委員会は、密接に連携し、年度ごとの事業計画について情報を共有するとともに、事業運営・実施に必要な事項について協議し、事業評価結果を PDCA サイクルに乗せて、事業を改善していく。

事業評価は、評価委員会を設けて実施する。評価委員会のメンバーは、必要に応じて学外の有識者を含め、本事業の諮問機関として事業の機能評価と検証、監査報告等を行う体制とする。評価にあたっては、評価資料として海外参加校、海外インターンシップ先企業・機関からの十分なフィードバックも適切に含めるほか、鹿児島に受入れた留学生には、地域理解と地域人脈形成の視点から積極的に地域社会と繋がる企画を行うことから、シンポジウム等に参加した地域住民、企業等の地域社会の声も含める。

また、評価項目の中で、特に「教育の質の向上のための評価」については、プログラムで実施する COIL 全授業について、統一様式の授業評価表を作成して受講学生に実施し、定量的な分析を行う。また、国内外の参加校教員についても、統一様式の授業実施自己評価表を作成して授業方法や授業効果等について定量的な調査と分析を行い、質問項目に「授業改善のためのアイデア」を設けて有益な意見を収集する。これらの結果をプログラム全体で情報共有するとともに、PDCA サイクルに則ってプログラム全体の教育の質向上に活かす体制とする。この授業評価表等の作成にあたっては、The Consortium for North American Higher Education Collaboration (CONAHEC)、ならびに COIL で実績のある The State University of New York's COIL center の教育研究成果を十分に反映し、国際通用性を担保したものとする。

さらに、これらの結果は、随時鹿大・海外参加大学プログラム運営委員会で共有するほか、報告書ならびに事業 HP 等で日・英両語で適切に公表して可視化する体制を整える。COIL 授業の成果や問題点、その解決方法を公表することは、新たな教育ツール COIL の貴重な実践例紹介となり、その普及に貢献する。特に、HP で日・英両語による取組の紹介、実施状況、評価結果等を積極的に情報発信することは、日本のみならず世界各国の初等・中等教育、高等教育、産業界、自治体に向けて啓発を促す有益な情報源となる。

③ 補助期間終了後の事業展開

補助期間終了後も、本学は「米国、鹿児島、アジア三極連携」の要として機能し、事業展開の方向性と期待される成果を以下のように設定し、事業を展開していく。

① 参加 16 校（本学含む）の交流の深化・参加全大学との全学間学術交流協定締結：

参加校では、特定部局と特定の授業を通しての教育研究交流から始まるが、これを本学学内も含め、各校の状況に応じてより幅広い分野や教育段階に拡大していく。全学間学術交流協定締結に至っていない大学とは、協定締結を目指す。

② 参加校の拡大：

COIL を通じた教育研究の成果を積極的に発信し、参加校ネットワークを拡大する。本学が展開するネットワークの要として機能すると同時に、他のネットワークとの連携も視野に入れて柔軟に対応する。ネットワークの連携と拡大によって生じる参加者の一層の活性化、協働を促進するファシリテーターとして、COIL ネットワークの世界展開の流れに協調し、貢献する。

③ 大学院におけるダブルディグリーの設置：

本学と海外参加校大学院において、ダブルディグリーの設置を目指す。

④ 米国を主軸とした三極連携の人脈構築：

本学と海外参加校大学において、縦横に繋がる共時的・通時的な人脈を構築する。教育機関に留まらず、インターンシップ先企業・機関、地域社会も含めた重層的な人脈形成の価値を参加者全体で認知して共有する。互いの立場や考えの違いを認め、排除せず理解・尊重する態度を持ち、現実的に共存する方策を探ることのできる、グローバル社会に求められるコミュニティを形成する。同時に、個

人のキャリア形成や企業のビジネス展開、教育研究分野での進展、地域社会活性化等における実利的な点にも積極的に利用できる繋がりとする。

⑤ 人的交流による本学全体の国際化：

〔制度〕本事業によって学生および教員の人的交流が活発化することにより、シラバスの英語化および米国スタンダードに適合するシラバス内容の充実、大学教育課程等制度説明等の英語化、ナンバリング方法の国際化、授業あたり参考文献等提示の充実化と課外学習の実質化等、本学全体の各種制度を漸次国際化する。

〔学生の能力〕自文化を相対的に捉える視点、場面に応じた適切な文化コードで行動する能力、英語ならびに他の言語によって問題解決ができる総合的なコミュニケーション能力を備えた学生を増やす。COIL 授業の参加学生、海外派遣学生はもちろんのこと、学内でも、受入留学生と日本人学生との積極的な交流のしかけ（グローバルランゲージスペースでの言語・文化シェア等）も企図して国際的活動に関心を持つ層を拡げる。

⑥ 人的交流による鹿児島地域の国際化：

本事業で受入れる留学生が、商工会議所による、あるいは本学が COC+事業で開拓した地元企業のインターンシップや地域住民との交流を通して、鹿児島ならではの外部者にオープンな暖かい県民性に直接触れ、知日派はもちろんのこと、鹿児島の課題も理解した知・鹿児島派となることを目指す。同時に、留学生を多く迎え入れることにより、地域の多文化共生社会への挑戦にも貢献する。

⑦ 新たな教育ツール COIL 啓発への貢献：

報告書や学会発表、書籍の刊行、事業 HP 等で COIL 授業の実践例として取組の紹介、実施状況、成果と評価結果、問題点とその解決方法等を状況に応じて日・英両語で適切に公表する努力を継続し、新たな教育ツール COIL の普及に貢献する。積極的な情報発信は、日本のみならず世界各国の初等・中等教育、高等教育、産業界、自治体に向けて啓発を促す有益な情報源となる。

⑧ 本事業に参加する各授業科目における教育研究の発展：

本事業に参加する「上級 課題解決型三極連携リサーチ・プログラム」は大学院共通教育科目、大学院専門科目であり、各科目における専門性が高い。COIL 授業と実地学習を実施することで、教育研究の交流が深化し、特に研究面での発展が期待できる。三極連携のネットワークの強みも活かして、新たな萌芽を見つけ、伸ばしていく。

④ 補助期間終了後の事業展開に向けた資金計画

本事業では、補助期間内に COIL 用設備、単位互換等の基盤整備を行い、補助期間終了後も持続的発展が可能となる計画を策定している。具体的には、大学負担として計上した人件費は、特任教職員として現在任期付き雇用となっているポストを想定しており、補助期間終了後に本プログラム担当として学内予算措置が見込める。旅費については、補助期間終了後はシンポジウム等を予算規模に応じた開催頻度と規模にすることで調整可能である。学生支援のための経費は、引き続き JASSO 海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）を活用し（平成 30 年度タイプ A 本学採択率 40%（全国平均採択率 19.6%））、寄付金を原資とする既存の鹿大「進取の精神」支援基金事業の活用のほか、予定されている新寄付金事業による支援の可能性も探る。事業全体としては、概算要求への応募など、競争的資金を含む外部資金獲得の取組みを種々行うとともに、高い事業評価を挙げることによって学内資金の配分を得て、補助期間終了後も本事業を展開していく。

学内資金配分については、本学は、大学憲章に「国際社会で活躍しうる人材を育成する」、第 3 期中期目標・中期計画に「グローバルな視点を有する地域人材育成の強化」を掲げ、グローバル人材育成を重視しており、平成 30 年 3 月には国際化の取組みを進める統一方針として「鹿児島大学国際化の基本方針」を策定した。その基本方針の 1 つとして「弾力的でメリハリのある国際事業予算の策定と効果的な事業への投入」が掲げられ、本事業についても、学長ガバナンス機能強化の下で、事業内容と成果の定期的かつ公正な評価結果に基づいて大学負担予算に反映され保証される仕組みとなっている。本学の国際化戦略に合致する本事業は、補助期間内に外部委員評価を実施し、高評価を得ることによって適正な学内配分を受け、補助期間終了後の事業を展開する。

補助期間における各経費の明細【年度ごとに1ページ】					
補助金申請ができる経費は、当該事業の遂行に必要な経費であり、本プログラムの目的である大学の世界展開力強化のための用途に限定されます。(平成30年度大学の世界展開力強化事業公募要領参照。)					
(単位:千円)					
<平成30年度>	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	4,930	610	5,540	
	①設備品費	3,000		3,000	
	・COIL授業用システム 1式	3,000		3,000	
	・				
	②消耗品費	1,930	610	2,540	
	・米国及び連携大学所在国関連書籍, DVD 1式		100	100	
	・教育用消耗品	1,500		1,500	
	・事務用消耗品	430	510	940	
	・				
	[人件費・謝金]	1,750	5,700	7,450	
	①人件費	1,500	5,700	7,200	
	・特任教員(派遣科目担当) 350千円×6月×2人		4,200	4,200	
	・特任専門員(科目担当補助)250千円×6月×2人	1,500	1,500	3,000	
	・				
	②謝金	250		250	
	・キックオフシンポジウム招聘講演者謝金 50千円×5人	250		250	
	・				
	・				
	[旅費]	10,200		10,200	
	・COIL米国研修会参加者旅費 300千円×8人	2,400		2,400	
	・キックオフシンポジウム招聘講演者旅費 300千円×3人	900		900	
	・キックオフシンポジウム海外教員招聘旅費 300千円×20人	6,000		6,000	
	・研修(派遣)引率旅費 300千円×3人	900		900	
	[その他]	8,120	640	8,760	
	①外注費	3,550		3,550	
	・事業用HP制作費 1式	3,000		3,000	
	・HPメンテナンス委託費 1式	150		150	
	・事業用パンフレット等翻訳,校正 1式	400		400	
	②印刷製本費	200		200	
	・事業紹介用パンフレット印刷費 1式	200		200	
	・				
	③会議費	300		300	
	・キックオフシンポジウム会議費 1式	300		300	
	・				
	④通信運搬費	400		400	
	・郵便,電話,データ通信等経費 1式	400		400	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	⑥その他(諸経費)	3,670	640	4,310	
	・学生支援経費	3,520	640	4,160	
	短期派遣学生渡航費 80千円×8人		640	640	
	短期受入学生渡航費 80千円×35人	2,800		2,800	
	長期受入学生渡航費 80千円×9人	720		720	
	・COILソフト使用料 25千円×6月	150		150	
平成30年度	合計	25,000	6,950	31,950	

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

(前ページの続き)

(単位:千円)

＜平成31年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	1,000	1,100	2,100	
	①設備備品費				
	・				
	②消耗品費	1,000	1,100	2,100	
	・米国及び連携大学所在国関連書籍, DVD 1式		100	100	
	・教育用消耗品	1,000		1,000	
	・事務用消耗品		1,000	1,000	
	・				
	[人件費・謝金]	10,450	16,040	26,490	
	①人件費	9,000	15,360	24,360	
	・特任教員(派遣科目担当) 350千円×12月×2人		8,400	8,400	
	・特任教員(受入科目担当) 500千円×12月×1人	6,000		6,000	
	・特任専門員(科目担当補助)250千円×12月×2人	3,000	3,000	6,000	
	・特任教員(北米等, P-SEG) 330千円×12月×1人		3,960	3,960	
	・				
	②謝金	1,450	680	2,130	
	・学生T A 90千円×5人	450		450	
	・英語力強化クラス講師謝金 240千円×7コマ	1,000	680	1,680	
	・				
	[旅費]	4,200		4,200	
	・研修(派遣、受入)引率旅費 300千円×14人	4,200		4,200	
	・				
	・				
	[その他]	6,850	11,090	17,940	
	①外注費	390	1,500	1,890	
	・HPメンテナンス委託費 1式	150		150	
	・事業用パンフレット等翻訳, 校正 1式	240		240	
	・COIL教材製作費(撮影、編集、翻訳)		1,500	1,500	
	②印刷製本費	50		50	
	・事業紹介用パンフレット印刷費 1式	50		50	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	350	150	500	
	・郵便, 電話, データ通信等経費 1式	350	150	500	
	・				
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,060	9,440	15,500	
	・学生支援経費	5,760	9,440	15,200	
	短期派遣学生渡航費 80千円×111人		8,880	8,880	
	短期受入学生渡航費 80千円×63人	5,040		5,040	
	長期派遣学生渡航費 80千円×7人		560	560	
	長期受入学生渡航費 80千円×9人	720		720	
	・COILソフト使用料 25千円×12月	300		300	
平成31年度	合計	22,500	28,230	50,730	

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

(前ページの続き)

(単位:千円)

＜平成32年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	400	2,100	2,500	
	①設備備品費				
	・				
	②消耗品費	400	2,100	2,500	
	・米国及び連携大学所在国関連書籍, DVD 1式		500	500	
	・教育用消耗品	250	750	1,000	
	・事務用消耗品	150	850	1,000	
	・				
	[人件費・謝金]	10,500	16,280	26,780	
	①人件費	9,000	15,360	24,360	
	・特任教員(派遣科目担当) 350千円×12月×2人		8,400	8,400	
	・特任教員(受入科目担当) 500千円×12月×1人	6,000		6,000	
	・特任専門員(科目担当補助)250千円×12月×2人	3,000	3,000	6,000	
	・特任教員(北米㊦, P-SEG) 330千円×12月×1人		3,960	3,960	
	②謝金	1,500	920	2,420	
	・学生TA 90千円×5人	450		450	
	・外部評価委員謝金 10千円×5人	50		50	
	・英語力強化㊦講師謝金 240千円×8㊦	1,000	920	1,920	
	[旅費]	2,200	2,000	4,200	
	・研修(派遣、受入)引率旅費 300千円×14人	2,200	2,000	4,200	
	・				
	・				
	[その他]	7,150	10,990	18,140	
	①外注費	50	1,650	1,700	
	・HPメンテナンス委託費 1式		150	150	
	・事業用㊦ンフレット等翻訳, 校正 1式	50		50	
	・COIL教材製作費(撮影、編集、翻訳)		1,500	1,500	
	②印刷製本費	50	150	200	
	・事業紹介用㊦ンフレット印刷費 1式	50	150	200	
	・				
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	350	150	500	
	・郵便, 電話, データ通信等経費 1式	350	150	500	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,700	9,040	15,740	
	・学生支援経費	6,400	9,040	15,440	
	短期派遣学生渡航費 80千円×106人		8,480	8,480	
	短期受入学生渡航費 80千円×71人	5,680		5,680	
	長期派遣学生渡航費 80千円×7人		560	560	
	長期受入学生渡航費 80千円×9人	720		720	
	・COIL㊦フト使用料 25千円×12月	300		300	
平成32年度	合計	20,250	31,370	51,620	

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

(前ページの続き)

(単位:千円)

＜平成33年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	25	2,325	2,350	
	①設備備品費				
	・				
	・				
	②消耗品費	25	2,325	2,350	
	・ 米国及び連携大学所在国関連書籍, DVD 1式		500	500	
	・ 教育用消耗品	25	975	1,000	
	・ 事務用消耗品		850	850	
	・				
	[人件費・謝金]	10,450	16,180	26,630	
	①人件費	9,000	15,360	24,360	
	・ 特任教員(派遣科目担当) 350千円×12月×2人		8,400	8,400	
	・ 特任教員(受入科目担当) 500千円×12月×1人	6,000		6,000	
	・ 特任専門員(科目担当補助)250千円×12月×2人	3,000	3,000	6,000	
	・ 特任教員(北米㊦, P-SEG) 330千円×12月×1人		3,960	3,960	
	②謝金	1,450	820	2,270	
	・ 学生 T A 90千円×5人	450		450	
	・ 英語力強化㊦講師謝金 240千円×8㊦	1,000	820	1,820	
	[旅費]	600	4,200	4,800	
	・ 研修(派遣、受入)引率旅費 300千円×16人	600	4,200	4,800	
	・				
	・				
	[その他]	7,150	12,550	19,700	
	①外注費	50	2,650	2,700	
	・ HP㊦メンテナンス委託費 1式		150	150	
	・ 事業用㊦パンフレット等翻訳, 校正 1式	50		50	
	・ COIL教材製作費(撮影、編集、翻訳)		2,500	2,500	
	②印刷製本費	50	150	200	
	・ 事業紹介用㊦パンフレット印刷費 1式	50	150	200	
	・				
	③会議費				
	・				
	・				
	④通信運搬費	350	150	500	
	・ 郵便, 電話, ㊦通信等経費 1式	350	150	500	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	・				
	⑥その他(諸経費)	6,700	9,600	16,300	
	・ 学生支援経費	6,400	9,600	16,000	
	短期派遣学生渡航費 80千円×111人		8,880	8,880	
	短期受入学生渡航費 80千円×69人	5,520		5,520	
	長期派遣学生渡航費 80千円×9人		720	720	
	長期受入学生渡航費 80千円×11人	880		880	
	・ COIL㊦ソフト使用料 25千円×12月	300		300	
平成33年度	合計	18,225	35,255	53,480	

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

(前ページの続き)

(単位:千円)

＜平成34年度＞	経費区分	補助金申請額 (①)	大学負担額 (②)	事業規模 (総事業費) (①+②)	備考
	[物品費]	42	1,458	1,500	
	①設備備品費				
	・				
	②消耗品費	42	1,458	1,500	
	・教育用消耗品	42	958	1,000	
	・事務用消耗品		500	500	
	・				
	[人件費・謝金]	3,000	23,490	26,490	
	①人件費	3,000	21,360	24,360	
	・特任教員(派遣科目担当) 350千円×12月×2人		8,400	8,400	
	・特任教員(受入科目担当) 500千円×12月×1人		6,000	6,000	
	・特任専門員(科目担当補助) 250千円×12月×2人	3,000	3,000	6,000	
	・特任教員(北米 [㊦] , P-SEG) 330千円×12月×1人		3,960	3,960	
	②謝金		2,130	2,130	
	・学生T A 90千円×5人		450	450	
	・英語力強化クラス講師謝金 240千円×7コマ		1,680	1,680	
	[旅費]	6,340	560	6,900	
	・研修(派遣、受入)引率旅費 300千円×14人	3,640	560	4,200	
	・シンポジウム海外教員招聘旅費 300千円×9人	2,700		2,700	
	[その他]	7,020	11,830	18,850	
	①外注費		2,150	2,150	
	・HPメンテナンス委託費 1式		150	150	
	・COIL教材製作費(撮影、編集、翻訳)		2,000	2,000	
	②印刷製本費		200	200	
	・事業紹介用パンフレット印刷費 1式		200	200	
	・				
	③会議費		500	500	
	・シンポジウム会議費 1式		500	500	
	・				
	④通信運搬費		500	500	
	・郵便, 電話, データ通信等経費 1式		500	500	
	・				
	⑤光熱水料				
	・				
	⑥その他(諸経費)	7,020	8,480	15,500	
	・学生支援経費	6,720	8,480	15,200	
	短期派遣学生渡航費 80千円×97人		7,760	7,760	
	短期受入学生渡航費 80千円×73人	5,840		5,840	
	長期派遣学生渡航費 80千円×9人		720	720	
	長期受入学生渡航費 80千円×11人	880		880	
	・COILソフト使用料 25千円×12月	300		300	
平成34年度	合計	16,402	37,338	53,740	


(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) サンノゼ州立大学	国名	米国	
	(英) San Jose State University			
設 置 形 態	州立	設 置 年	1857年	
設 置 者 (学 長 等)	Mary Arshagouni Papazian			
学 部 等 の 構 成	College of applied Sciences and Arts Lucas College and Graduate School of Buisness Connie L. Lurie College of Education Charles W. Davidson College of Engineering College of Humanities and the Arts College of International and Extended Studies College of Science College of Social Sciences			
学 生 数	総数	33,409人	学 部 生 数	28,140人
			大学院生数	5,169人
受け入れている留学生数	3,196人	日本からの留学生数	58人	
海外への派遣学生数	425人	日本への派遣学生数	20人	
Webサイト(URL)	http://www.sjsu.edu/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。				
				

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】			
①交流プログラムを実施する相手大学の概要			
大 学 名 称	(日) ブーラパー大学	国 名	タイ
	(英) Burapha University		
設 置 形 態	国立	設 置 年	1955年 (1990年)
設 置 者 (学 長 等)	Dr. Somnuk Theerakulpisut		
学 部 等 の 構 成	<ul style="list-style-type: none"> ・ マネジメント、観光学 ・ タイ伝統医療 ・ 音楽、演劇 ・ 看護学 ・ 地球情報学 ・ 人文社会科学 ・ 政治法学 ・ 情報科学 ・ 理学 ・ スポーツ科学 ・ 芸術科学 ・ 社会学 ・ 工学 ・ 芸術学 ・ 教育学 ・ 保健医療学 ・ 公衆衛生学 ・ 宝石学 ・ 農業技術 ・ 海洋技術 ・ 薬学 ・ 医学 ・ 物流 ・ インターナショナルスクール 		
学 生 数	総数	37,413人	学部生数 32,608人 大学院生数 4,534人
受け入れている留学生数	372人	日本からの留学生数	9人
海外への派遣学生数	31人	日本への派遣学生数	7人
Webサイト(URL)	http://www.buu.ac.th/		
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。			
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。			
			

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日) ベレアカレッジ			国 名	米国	
	(英) Berea College					
設 置 形 態	私立	設 置 年	1855年			
設 置 者 (学 長 等)	Lyle D. Roelofs					
学 部 等 の 構 成	<ul style="list-style-type: none"> ・文学士 ・理学士 (全33専攻) 					
学 生 数	総数	照会中	学 部 生 数	照会中	大学院生数	照会中
受け入れている留学生数	照会中	日本からの留学生数	照会中			
海外への派遣学生数	照会中	日本への派遣学生数	1人			
W e b サ イ ト (U R L)	https://www.berea.edu/					
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。						
						

(大学名: 鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

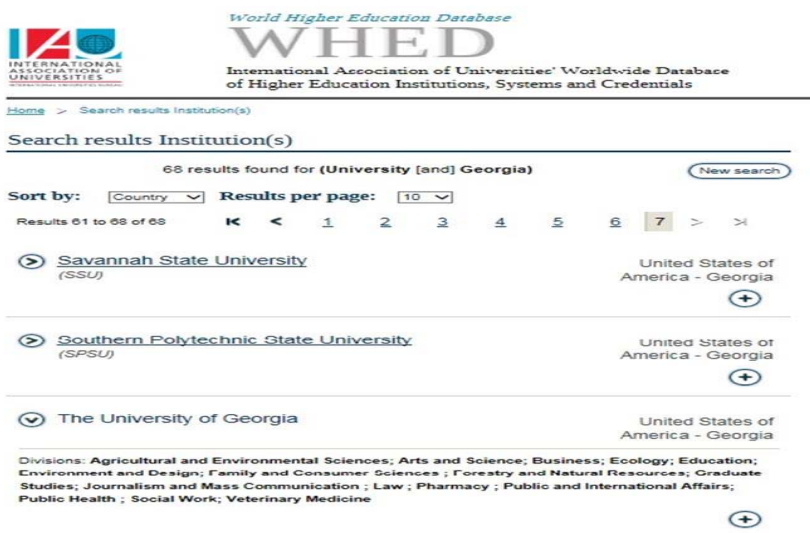
(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) 中央大学校	国 名	韓国	
	(英) Chung-Ang University			
設 置 形 態	私立	設 置 年	1953年	
設 置 者 (学 長 等)	Dr. Kim Chang Soo			
学 部 等 の 構 成	College of Humanities College of Social Sciences College of Education College of Natural Sciences College of Biotechnology & Natural Resource College of Engineering College of ICT Engineering College of Business & Economics College of Medicine College of Pharmacy College of Nursing College of Arts College of Sport Sciences College of General Education Academic Resources			
学 生 数	総数	29,700人	学部生数	24,000人
			大学院生数	5,700人
受け入れている留学生数	1,080人	日本からの留学生数	35人	
海外への派遣学生数	500人	日本への派遣学生数	25人	
Webサイト(URL)	https://www.cau.ac.kr/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。				
 <p>World Higher Education Database WHED International Association of Universities' Worldwide Database of Higher Education Institutions, Systems and Credentials</p> <p>Home > Search results Institution(s)</p> <p>Search results Institution(s)</p> <p>1 results found for (Institutions=Chung [and] Ang [and] University) New search</p> <p>Sort by: <input type="text" value="Institution"/> Results per page: <input type="text" value="10"/></p> <p>Results 1 to 1 of 1</p> <p><input checked="" type="radio"/> Chung-Ang University (CAU) Korea (Republic of)</p> <p>Divisions: Academy-Industry-Research Consortium; Advanced Imaging Science, Multimedia and Film; Advertising and Public Relations; Art; Arts; Basic Sciences; Biomedical and Pharmaceutical Sciences; Biotechnology and Natural Resources; Business and Economics; Business Incubator; Chung-Ang Business School; Construction and Environmental Engineering; Construction Engineering; Digital Contents Resources; Economic; Education; Engineering; Food and Drug Administration; Foreign Studies; General Education; Global Human Resource Development; Graduate Studies; Humanities; Industrial and Entrepreneurial Management; Industrial Design; Industry-Academic Cooperation; Information; Information and Communications; International Studies; Japanese Studies; Korean and Japanese Culture; Korean Cultural Heritage; Korean Education; Korean Music; Law; Legal Research; Mass Communication; Medicine; Molecules-based New Drug Development; Natural Sciences; Nursing; Nursing and Health; Nursing Science; Pharmacy; Public Administration; Public Policy and Administration; Social Development; Social Sciences; Sport Sciences; Sports Information Technology; Technology Transfer</p>				

(大学名: 鹿児島大学) (タイプA 主たる交流先の相手国: 米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】			
①交流プログラムを実施する相手大学の概要			
大 学 名 称	(日) ジョージア大学	国 名	米国
	(英) University of Georgia		
設 置 形 態	州立	設 置 年	1785年
設 置 者 (学 長 等)	Jere W. Morehead		
学 部 等 の 構 成	College of Agricultural and Environmental Sciences Franklin College of Arts and Sciences Terry College of Business Odum School of Ecology College of Education College of Engineering College of Environment and Design College of Family and Consumer Sciences Warnell School of Forestry and Natural Resources Graduate School Grady College of Journalism and Mass Communication School of Law College of Pharmacy College of Public Health School of Public and International Affairs School of Social Work College of Veterinary Medicine Medical Partnership Institute of Higher Education		
学 生 数	総数	37,606人	学部生数 28,848人 大学院生数 8,758人
受け入れている留学生数	2,265人	日本からの留学生数	21人
海外への派遣学生数	50人	日本への派遣学生数	4人
Webサイト(URL)	http://www.uga.edu/		
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。			
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。			
			

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日) 国立中興大学			国 名	台湾	
	(英) National Chung Hsing University					
設 置 形 態	国立	設 置 年	1971年			
設 置 者 (学 長 等)	Dr. Fuh-Sheng Shieu					
学 部 等 の 構 成	College of Lederal Arts College of Agriculture and Natural Resources College of Science College of Engineering College of Life Sciences College of Veterinary Medicin College of Management College of Politics					
学 生 数	総数	14,252人	学 部 生 数	8,694人	大学院生数	5,558人
受け入れている留学生数	710人	日本からの留学生数	20人			
海外への派遣学生数	183人	日本への派遣学生数	27人			
Web サイト (URL)	https://www.nchu.edu.tw/index					
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。						
 <p>World Higher Education Database WHED International Association of Universities' Worldwide Database of Higher Education Institutions, Systems and Credentials</p> <p>Home > Search results Institution(s)</p> <p>Search results Institution(s)</p> <p>1 results found for (Institutions=National [and] Chung [and] Hsing [and] University) New search</p> <p>Sort by: <input type="text" value="Institution"/> Results per page: <input type="text" value="10"/></p> <p>Results 1 to 1 of 1</p> <p><input checked="" type="radio"/> National Chung Hsing University (NCHU) China - Taiwan</p> <p>Divisions: Agriculture and Natural Resources; Biotechnology; Engineering; General Education; Humanities and Social Sciences; Law and Politics; Liberal Arts ; Life Sciences; Management; Nano Centre; Science; Veterinary Medicine</p> <p style="text-align: right;">+</p>						

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】							
①交流プログラムを実施する相手大学の概要							
大 学 名 称	(日) テキサスA&M大学			国 名	米 国		
	(英) Texas A&M University						
設 置 形 態	公 立		設 置 年	1876年			
設 置 者 (学 長 等)	Michael K. Young						
学 部 等 の 構 成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 農業、生活科学 ・ 建築 ・ 行政、公的サービス ・ 歯学 ・ 教育、人間開発 ・ 工学 ・ 地球科学 ・ 法学 ・ リベラルアーツ ・ 医学 ・ 看護学 ・ 薬学 ・ 公衆衛生 ・ 理学 ・ 獣医学、生体医学 						
学 生 数	総 数	照 会 中	学 部 生 数	照 会 中	大 学 院 生 数	照 会 中	
受け入れている留学生数	照 会 中		日本からの留学生数	照 会 中			
海外への派遣学生数	照 会 中		日本への派遣学生数	照 会 中			
Webサイト(URL)	https://www.tamu.edu/						
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。							
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。							
							

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

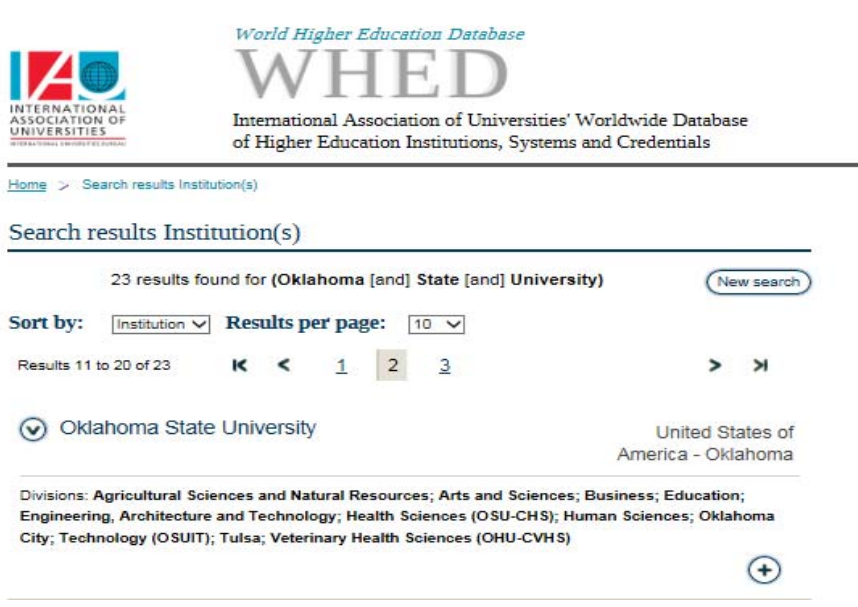
(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) チェンマイ大学	国 名	タイ	
	(英) Chiang Mai University			
設 置 形 態	国立	設 置 年	1964年	
設 置 者 (学 長 等)	Niwes Nantachit			
学 部 等 の 構 成	<ul style="list-style-type: none"> ・教育 ・法学 ・人文科学 ・経営管理 ・政治学、行政 ・社会科学 ・マスコミュニケーション ・芸術学 ・経済学 ・理学 ・工学 ・建築 ・農業 ・農産業 ・芸術、メディア、テクノロジー ・海洋教育、管理 ・関連医学 ・歯学 ・看護学 ・医学 ・薬学 ・獣医学 			
学 生 数	総数	34,440人	学 部 生 数	28,348人
			大学院生数	6,092人
受け入れている留学生数	1,194人	日本からの留学生数	24人	
海外への派遣学生数	252人	日本への派遣学生数	21人	
Webサイト(URL)	https://www.cmu.ac.th/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。				
				

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】							
①交流プログラムを実施する相手大学の概要							
大 学 名 称	(日) オクラホマ州立大学			国名	米国		
	(英) Oklahoma State University						
設 置 形 態	州立		設 置 年	1890年			
設 置 者 (学 長 等)	Burns Hargis						
学 部 等 の 構 成	College of Agricultural Sciences and Natural Resources College of Arts and Sciences Spears School of Business College of Education, Health and Aviation College of Engineering, Architecture and Technology College of Human Sciences Center for Veterinary Health Sciences Graduate College The Honors College School of Global Studies and Partnerships OSU College of Osteopathic Medicine						
学 生 数	総数	照会中	学 部 生 数	照会中	大学院生数	照会中	
受け入れている留学生数	照会中	日本からの留学生数	照会中			照会中	
海外への派遣学生数	照会中	日本への派遣学生数	照会中			照会中	
Webサイト(URL)	https://go.okstate.edu/						
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。							
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。							
 <p>World Higher Education Database WHED International Association of Universities' Worldwide Database of Higher Education Institutions, Systems and Credentials</p> <p>Home > Search results Institution(s)</p> <p>Search results Institution(s)</p> <p>23 results found for (Oklahoma [and] State [and] University) New search</p> <p>Sort by: Institution Results per page: 10</p> <p>Results 11 to 20 of 23 1 2 3</p> <p>Oklahoma State University United States of America - Oklahoma</p> <p>Divisions: Agricultural Sciences and Natural Resources; Arts and Sciences; Business; Education; Engineering, Architecture and Technology; Health Sciences (OSU-CHS); Human Sciences; Oklahoma City; Technology (OSUIT); Tulsa; Veterinary Health Sciences (OHU-CVHS)</p>							

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日)	メーファールアン大学		国 名	タイ	
	(英)	Mae Fah Luang University				
設 置 形 態	国立		設 置 年	1998		
設 置 者 (学 長 等)	Dr. Vanchai Sirichana					
学 部 等 の 構 成	School of Agro-Industry School of Anti-Aging and Regenerative Medicine School of Cosmetic Science School of Dentistry School of Health Science School of Information Technology School of Law School of Liberal Arts School of Management School of Medicine School of Nursing School of Science School of Sinology School of Social Innovation					
学 生 数	総 数	14,826人	学 部 生 数	14,126人	大学院生数	700人
受け入れている留学生数	597人	日本からの留学生数	9人			
海外への派遣学生数	102人	日本への派遣学生数	照会中			
Webサイト(URL)	http://www.mfu.ac.th/home.html					
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。						
 <p>The screenshot shows the search results for Mae Fah Luang University on the World Higher Education Database (WHED) website. The search criteria are 'Institutions=Mae [and] Fah [and] Luang [and] University'. The results show one entry for Mae Fah Luang University, located in Thailand, with a list of divisions including Agro-Industry, Anti-Aging and Regenerative Medicine, Cosmetic Science, Engineering and Science, Health Sciences, Information Technology, Law, Liberal Arts, and Management.</p>						

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

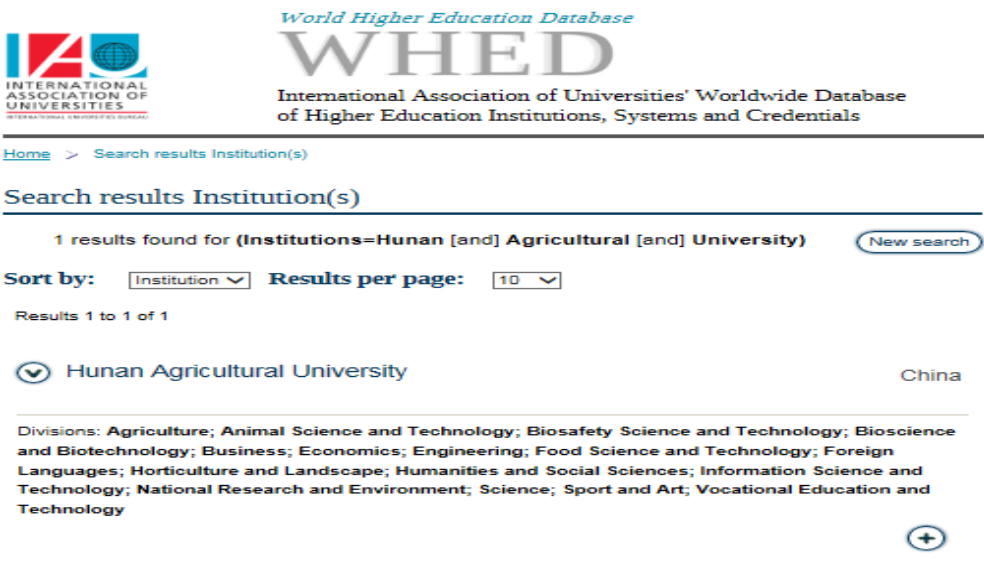
(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】				
①交流プログラムを実施する相手大学の概要				
大 学 名 称	(日) ノースダコタ州立大学	国 名	米 国	
	(英) North Dakota State University			
設 置 形 態	州 立	設 置 年	1891年	
設 置 者 (学 長 等)	Dean L. Bresciani			
学 部 等 の 構 成	College of Agriculture, Food Systems, and Natural Resources College of Arts, Humanities and Social Sciences College of Business College of Engineering College of Health Professions College of Human Development and Education College of Science and Mathematics			
学 生 数	総 数	14,358人	学 部 生 数	12,321人
			大 学 院 生 数	2,037人
受け入れている留学生数	792人	日 本 からの 留 学 生 数	8人	
海外への派遣学生数	400人	日 本 への 派 遣 学 生 数	12人	
Webサイト(URL)	https://www.ndsu.edu/			
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。				
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。				
 <p>World Higher Education Database WHED International Association of Universities' Worldwide Database of Higher Education Institutions, Systems and Credentials</p> <p>Home > Search results Institution(s)</p> <p>Search results Institution(s)</p> <p>1 results found for (Institutions=North [and] Dakota [and] State [and] University) New search</p> <p>Sort by: <input type="text" value="Institution"/> Results per page: <input type="text" value="10"/></p> <p>Results 1 to 1 of 1</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> North Dakota State University United States of America - North Dakota (NDSU)</p> <p>Divisions: Agriculture, Food Systems and Natural Resources; Arts, Humanities and Social Sciences; Business; Engineering; Human Development and Education; Pharmacy, Nursing and Allied Sciences; Science and Mathematics</p>				

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。


(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】			
①交流プログラムを実施する相手大学の概要			
大 学 名 称	(日) 湖南農業大学	国 名	中国
	(英) Hunan Agricultural University		
設 置 形 態	公立	設 置 年	1951年
設 置 者 (学 長 等)	符少輝		
学 部 等 の 構 成	農学院 園芸・林学院 東方科技学院 植物保護学院 動物医学院 食品科学技術学院 商学院 動物科学技術学院 資源環境学院 公共管理・法学学院	マルクス主義学院 外国語学院 生物科学技術学院 教育学院 信息科学技術学院 体育芸術学院 国際学院 工学院 経済学院 理学院 繼續教育学院	
学 生 数	総数	31,878人	学部生数 27,000人 大学院生数 4,445人
受け入れている留学生数	84人	日本からの留学生数	なし
海外への派遣学生数	44人	日本への派遣学生数	17人
Webサイト(URL)	http://www.hunau.edu.cn/		
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。			
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。			
 <p>World Higher Education Database WHED International Association of Universities' Worldwide Database of Higher Education Institutions, Systems and Credentials</p> <p>Home > Search results Institution(s)</p> <p>Search results Institution(s)</p> <p>1 results found for (Institutions=Hunan [and] Agricultural [and] University) New search</p> <p>Sort by: <input type="text" value="Institution"/> Results per page: <input type="text" value="10"/></p> <p>Results 1 to 1 of 1</p> <p><input checked="" type="radio"/> Hunan Agricultural University China</p> <p>Divisions: Agriculture; Animal Science and Technology; Biosafety Science and Technology; Bioscience and Biotechnology; Business; Economics; Engineering; Food Science and Technology; Foreign Languages; Horticulture and Landscape; Humanities and Social Sciences; Information Science and Technology; National Research and Environment; Science; Sport and Art; Vocational Education and Technology</p>			

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

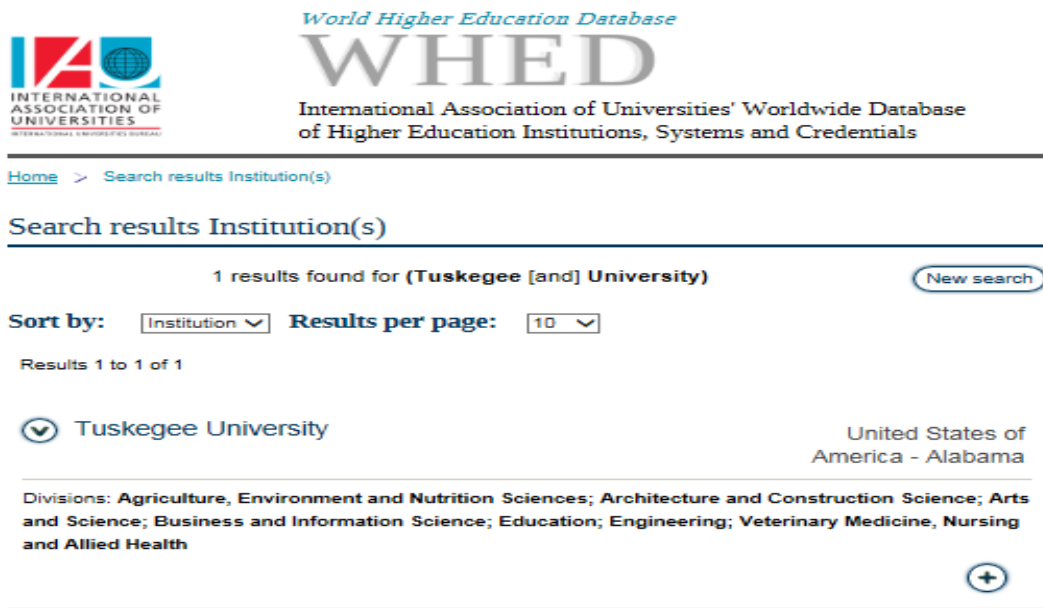
(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】							
①交流プログラムを実施する相手大学の概要							
大 学 名 称	(日) 国立成功大学			国 名	台湾		
	(英) National Cheng Kung University						
設 置 形 態	国立		設 置 年	1956			
設 置 者 (学 長 等)	Dr. Huey-Jen Jenny Su						
学 部 等 の 構 成	College of Leberal Arts College of Sciences College of Management College of Engineering College of Electrical Engineering & Computer Science College of Social Science College of Planpping & Design College of Bioscience & Biotechnology College of Medicine						
学 生 数	総数		照会中	学 部 生 数	照会中	大学院生数	照会中
受け入れている留学生数		照会中	日本からの留学生数		照会中		
海外への派遣学生数		照会中	日本への派遣学生数		照会中		
Webサイト(URL)	http://web.ncku.edu.tw/bin/home.php						
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。							
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。							
							

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

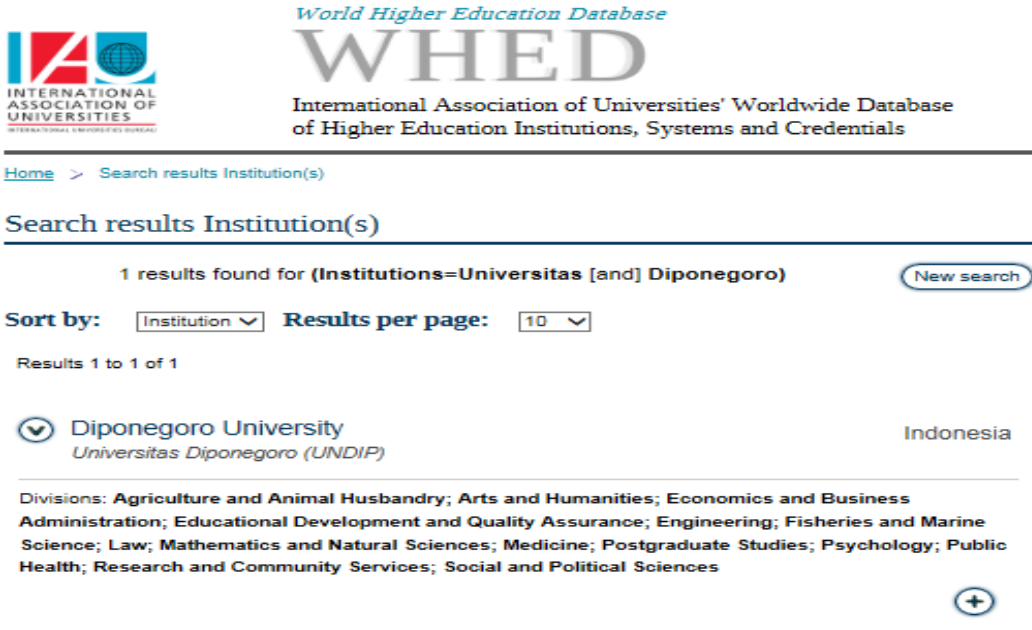
(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】						
①交流プログラムを実施する相手大学の概要						
大 学 名 称	(日) タスキーギ大学		国 名	米 国		
	(英) Tuskegee University					
設 置 形 態	私立	設 置 年	1881年			
設 置 者 (学 長 等)	Charlotte P. Morris					
学 部 等 の 構 成	Andrew F. Brimmer College of Business and Information Science (CBIS) College of Agriculture, Environment & Nutrition Sciences (CAENS) College of Arts & Sciences (CAS) College of Engineering (COE) College of Veterinary Medicine (CVM) Robert R. Taylor School of Architecture & Construction Science (TSACS) School of Education (SOE) School of Nursing & Allied Health (SONAH)					
学 生 数	総 数	2,851人	学 部 生 数	2,393人	大学院生数	458人
受け入れている留学生数	153人	日本からの留学生数	なし			
海外への派遣学生数	照会中	日本への派遣学生数	照会中			
Webサイト(URL)	https://www.tuskegee.edu/					
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。						
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。						
						

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

相手大学の概要【相手大学ごとに①～③合わせて2ページ以内】							
①交流プログラムを実施する相手大学の概要							
大 学 名 称	(日) ディポネゴロ大学			国 名	インドネシア		
	(英) Universitas Diponegoro						
設 置 形 態	国立		設 置 年	1957年			
設 置 者 (学 長 等)	Prof. Dr. Yos Johan Utama, S.H., M.Hum.						
学 部 等 の 構 成	Medicine Engineering Fisheries And Marine Sciences Sciences and Mathematic Economics and Business Animal and Agricultural Sciences Law Humanities Social Science and Political Science Public Health Psychology Postgraduate School Vocational School						
学 生 数	総数		照会中	学 部 生 数	照会中	大学院生数	照会中
受け入れている留学生数		照会中	日本からの留学生数		照会中		照会中
海外への派遣学生数		照会中	日本への派遣学生数		照会中		照会中
Webサイト(URL)	https://www.undip.ac.id/language/id/						
②「様式2」で記入した相手大学が認可等を受けていることについて記載してください。また、その根拠となるデータや資料等を貼付してください。							
International Association of UniversitiesによるWorld Higher Education Database掲載。							
							

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

③申請に当たって、相手大学の合意を得ている根拠となる資料の写しを貼付してください。

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

参考データ【国内の大学等1校につき、①～③は枠内に記入、④～⑥はそれぞれ指定ページ以内】
 ※人数等の算定に当たっては、原則として「学校基本調査」による定義に基づき記入。

大学等名	鹿児島大学
------	-------

①大学等全体における出身国別の留学生の受入総数(平成29年5月1日現在)及び各出身国(地域)別の平成29年度の留学生受入人数

※「留学生」とは、「出入国管理及び難民認定法」別表1に定める「留学」の在留資格を有する者に限る。

※「平成29年度受入人数」は、平成29年4月1日～平成30年3月31日の出身国(地域)別受入人数を記入。

※「全学生数」には、日本人学生及び外国人留学生を含めた大学等全体の平成29年5月1日現在の在籍者数を記入。

順位	出身国(地域)	受入総数	平成29年度受入人数
1	中国	135	100
2	韓国	34	20
3	ベトナム	26	16
4	インドネシア	20	11
5	バングラデシュ	19	8
6	マレーシア	8	0
7	スリランカ	5	1
8	タイ	3	5
9	ネパール	3	2
10	ブラジル	3	3
その他 (上記10カ国以外)	(主な国名) ドイツ、タンザニア、エジプト等	44	37
留学生の受入人数の合計		300	203
全学生数		10658	
留学生比率		2.8%	

②平成29年度中に留学した日本人学生数及び派遣先大学合計校数

※教育又は研究等を目的として、平成29年度中(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)に海外の大学等(海外に所在する日本の大学等の分校は除く。)に留学した日本人学生について記入。

なお、平成29年3月31日以前から継続して留学している者は含まない。

順位	派遣先大学の所在国(地域)	派遣先大学名	平成29年度派遣人数
1	フィリピン	フィリピン大学	36
2	米国	ソマ州立大学, カルビ州立大学	21
3	韓国	全北大学校	18
4	ドイツ	ロッテンブルク林業大学	15
5	タイ	ラジャマンガラ工科大学	14
6	シンガポール	シンガポール国立大学	13
7	米国	ハワイ大学	13
8	イラン	イスファハーン医科大学 他	12
9	米国	ノースダコタ州立大学	10
10	ドイツ	ボン大学, ビーレフェルト大学	10
その他 (上記10校以外)	(主な国名) 米国、タイ	(主な大学名) 雲南農業大学 他	77
	計 11 カ国	計 19 校	
派遣先大学合計校数		29	
派遣人数の合計			239

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学						
③大学等全体における外国人教員数(兼務者を含む)(平成29年5月1日現在)							
※「全教員数」には大学等に在籍する日本人教員も含めた全教員数を記入。							
※「うち専任教員(本務者)数」には教授、准教授、講師、助教、助手の専任の外国人教員の数をそれぞれ記入。 (いずれにも当てはまらない場合には、「助手」に含めること。)							
全教員数	外国人教員数						外国人教員の比率
	教授	准教授	講師	助教	助手	合計	
1140	6	10	6	9	0	31	3%
うち専任教員 (本務者)数	6	10	4	4	0	24	

大学等名	鹿児島大学
④取組の実績 【4ページ以内】	
<p>○ 国際的な教育環境の構築</p> <p>1. 全学部生を対象とした学部横断型教育で、地域活性化に貢献する人材の育成を目指す「地域人材育成プラットフォーム」（平成29年度開始。文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業」を後継し拡大したもの）の第3番目のプログラムとして、平成30年度に「<u>かごしまグローバル教育プログラム</u>」を開設した。このプログラムの修了要件単位18単位は英語による授業で、共通教育科目、卒業要件単位にも組み入れる高度共通教育科目、専門科目からなり、3年前期には海外実地体験が組み込まれている。地域課題をグローバルな視点で捉え、グローバルな人的ネットワークで他者と協働して課題解決に向けて行動できる能力の育成を目指す。</p> <p>2. 国際化の一層の推進と全学連携機能強化に向けて、平成28年度に留学生センターと国際連携推進センターを統合して<u>グローバルセンターを新設</u>し、さらに、平成30年3月には国際化の取組みを進める統一方針として「<u>鹿児島大学国際化の基本方針</u>」を策定し、国際的教育環境構築の基盤を整えた。</p> <p>3. グローバルセンターは、部局を超えた全学的視点で全学のグローバル教育機会を繋ぐ「<u>進取の精神グローバル人材育成プログラム（P-SEG）</u>」を平成26年度に開始し、海外研修授業を核に、英語課外授業Intensive English Course(Debate class, TOEFL class)、グローバルに活躍している人による講演会、留学生との協働学習企画（グローバルランゲージスペース外国語等）、留学体験談を先輩に語る「伝えよう！私の海外体験」、個別留学相談等を実施している。協定校派遣留学、トビタテ！留学JAPAN（1-8期43名採択、国立大学中17位）等留学者数も増加し、海外派遣数は平成28年度331名（平成26年度264名）に増加した。</p> <p>4. 水産学研究科は、平成27年度にASEAN諸国5大学院（サムラトランギ大学（インドネシア）、トレンガヌ大学（マレーシア）、フィリピン大学ビサヤス校（フィリピン）、カセサート大学（タイ）、ニャチャン大学（ベトナム））と連携して単一教育システム下で教育制度を共有する「<u>大学院熱帯水産学国際連携プログラム</u>」を設置した。各大学の特色を生かしたネットワーク型国際展開プログラムで、本学で開講する科目は英語・日本語の両言語で行われ、連携大学で受講する講義はすべて英語である。</p> <p>5. 農学部と水産学部は、英語による授業や海外研修を必修科目とした、留学生比率の高い「<u>農水連携国際食料資源学特別コース</u>」を平成27年度に設置し、国際的通用性の高い人材を育成している。この事業は、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム（学部）に平成26年度に採択されている。</p> <p>6. 理工学研究科は、クォータ制に移行して留学を容易にし、平成27年度に米国サンディエゴ、サンノゼにおける語学研修と現地インターンシップを取り入れた12週間程度の中期派遣授業Graduate Overseas Engineering and Science Studyを開発し実施している。</p> <p>7. 共同獣医学部は、平成32年度の欧州獣医学教育認証取得計画に向けた取り組みとして、欧州獣医学教育機関協会(EAEVE)関係者による非公式訪問調査を受審し、公式視察評価に備えた。また、国際実験動物ケア評価認証協会(AAALAC International)による公式訪問評価を受審し、同施設の国際認証取得に向けて前進した。さらに、ジョージア大、中興大（台湾）、リヨン獣医大学（仏）にて獣医学インターンシップを実施した。</p> <p>8. 人文社会科学研究科は、長江師範学院や湘潭大学、東北大学等を指定校とし、外国人留学生特別選抜指定校推薦入試を上海で行う秋入学大学院プログラムを設けている。</p> <p>9. 医学部医学科は、米国、カナダ、独、インドネシアにおける海外臨床実習を単位化している。</p> <p>10. この他、本学全体で、教員が企画した共通教育科目・専門科目海外研修授業を世界各国で数多く開講している（平成29年度29海外研修223名受講）。</p> <p>11. 学生の海外活動の経済的支援を目的に、寄附金による「<u>鹿大『進取の精神』支援基金事業</u>」、ならびに「<u>鹿児島大学学生海外学会発表支援事業</u>」、学長裁量経費による「<u>鹿児島大学学生海外研修支援事業</u>」「<u>鹿児島大学海外留学支援事業</u>」といった支援金給付制度を整えている。</p> <p>12. 法文学部は米国サンノゼ州立大学とのオンライン合同授業を通じて映像制作に向けた学生同士のディスカッションを続けており、<u>今回のCOIL事業申請の核</u>となっている。</p>	

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学
④取組の実績 【4ページ以内】	
○ 外国人教員採用や国際化への対応のための教員の資質向上	
1. 若手教員の国際化対応資質向上を目的に、寄附金による「鹿大『進取の精神』支援基金事業」で地域活性化を目的とした研究、英語による授業法を学ぶ研修、学長裁量経費による専門の研究を目的とした「鹿児島大学若手教員海外研修支援事業」といった海外滞在研修制度（2ヶ月～1年）を整えている。	
2. 平成28年度「若手研究者の教育研究に対する意欲を高め、その能力及び資質向上を図るとともに、本学における教育研究の充実に資することを目的に、テニユア・トラック制を導入し、「国立大学法人鹿児島大学テニユア・トラック制に関する規則」が制定された。	
3. 外国人教員の採用については、平成29年度において外国籍をもつ外国人教員（常勤・非常勤問わず）は60名であった。教員公募にあたっては、大学HP、科学技術振興機構研究者人材データベースJREC-IN等に掲載し、教員を採用している。その際、国際的な教育研究の実績や、外国の大学における学位取得をプラスに評価している。	
4. 年俸制は平成26年度に導入した。	
○ 事務体制の国際化	
1. 本学の国際担当部局である国際事業課職員は、全員が英語による高いコミュニケーション能力を備えており、支障はない。	
2. 主として国際事業課職員は、1年未満の短期派遣研修として北米教育研究センター（サンノゼ）やノース・ダコタ州立大学等に派遣の機会がある。その前後の語学研修として「進取の精神グローバル人材育成プログラム（P-SEG）」のTOEFLクラス（「インテンシブ・イングリッシュ・コース」）も受講が可能で、これにより国際事業課職員は、英語によるコミュニケーション能力を高めている。	
○ 厳格な成績管理、上限単位数の設定、学修課程と出口管理の厳格化など、単位の実質化	
1. 工学部は、日本技術者教育認定機構（JABEE）の質保証の認定を取得している。	
2. 成績評価の厳格化・可視化については、 <u>GPA制度を全学部で導入し</u> 、平成26年度には算出方法の全学統一を行った。GPAは、工学部では進級基準要件としており、他学部ではコース決定時の基準や、個別学習指導、成績優秀者表彰に活用している。この他、医学部医学科及び歯学部では、5年次の臨床実習受講前に全国医療系大学間共用試験を受験し、合格基準に達しない場合は進級不可としている。	
3. 履修可能な上限単位数の設定については、 <u>全学部でキャップ制を導入</u> している。なお、医学部医学科及び歯学部、共同獣医学部においては、専門科目は全て必修であり、卒業までに履修すべき教育内容については、それぞれ「医学教育モデル・コア・カリキュラム」「歯学教育モデル・コア・カリキュラム」「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」によりガイドラインが示されている。	
[H30年度入学生 履修科目登録の上限単位数]	
<ul style="list-style-type: none"> ・法文学部 25 単位（1学期） ・教育学部 50 単位（1年間） ・理学部 25 単位（1学期） ・医学部保健学科 25 単位（1学期） ・工学部 20 単位（1学期） ・農学部 25 単位（1学期） ・水産学部 25 単位（1学期） ・共同獣医学部 50 単位（1年間） 	
4. 学習課程と出口管理の厳格化については、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを、大学全体及び各学部学科で策定し、webページで公表している。また、それらを踏まえてナンバリングやカリキュラム・マップも作成し、カリキュラム・マップについても既にwebページで公表している。平成26年度に、全学でシラバス必須項目を統一し、科目の到達目標、授業形態、事前・事後学修の内容、成績評価の方法・基準が示されている。また、各学部及び共通教育センターでシラバス記載状況の確認を行うチェック体制を整備し、平成26年度より継続して実施している。平成29年度からは、アクティブラーニングに関する項目を設けた。	

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学
④取組の実績 【4ページ以内】	
○ 国際的な教育環境の構築	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「地域人材育成プラットフォーム」 https://www.kagoshima-u.ac.jp/platform/ ・ グローバルセンター http://www.gic.kagoshima-u.ac.jp ・ 「鹿児島大学国際化の基本方針」 https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/kokusaikakihonhoushin.html ・ 「進取の精神グローバル人材育成プログラムP-SEG」 https://pseg.knit.kagoshima-u.ac.jp 	
	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大学院熱帯水産学国際連携プログラム」 http://www.fish.kagoshima-u.ac.jp/kokusaiilp/ ・ 「農水連携国際食料資源学特別コース」 http://acel.agri.kagoshima-u.ac.jp/ifrs/index.html ・ Graduate Overseas Engineering and Science Study http://globaljinzai.eng.kagoshima-u.ac.jp/?page_id=796 ・ 共同獣医学部「平成28事業年度に係る業務の実績に関する報告書」 平成29年6月 国立大学法人鹿児島大学 p.5, p.13-14 ・ 人文社会科学研究所外国人留学生特別選抜指定校推薦入試 「中期目標の達成状況報告書」平成28年6月 鹿児島大学 p.20 ・ 医学部医学科海外臨床実習（鹿大「進取の精神」支援基金事業の支援を受けた） http://www8360uf.sakura.ne.jp/shinshu/abroad_dispatch/medium_term/934-2/ ・ 共通教育科目・専門科目海外研修授業 https://www.kagoshima-u.ac.jp/international/kaigaikenshu.html ・ 「鹿大『進取の精神』支援基金事業」 http://www8360uf.sakura.ne.jp/shinshu/ 	
○ 外国人教員採用や国際化への対応のための教員の資質向上	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「鹿大『進取の精神』支援基金事業」若手研究者支援事業 http://www8360uf.sakura.ne.jp/shinshu/abroad_dispatch/research/ ・ テニユア・トラック制 https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/yakuinkai(176).pdf ・ 年俸制 https://www.kagoshima-u.ac.jp/about/yakuinkai(161).pdf 	
○ 厳格な成績管理、上限単位数の設定、学修課程と出口管理の厳格化など、単位の実質化	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 工学部 日本技術者教育認定機構（JABEE）https://jabee.org http://www.eng.kagoshima-u.ac.jp/education/jabee01.html ・ GPA制度を全学部で導入 https://www.kagoshima-u.ac.jp/educenter/gpa.html ・ アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー カリキュラム・マップ、ナンバリング http://www.kagoshima-u.ac.jp/education/eoplcmnm.html 	

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学		
⑤事業の評価【1事業ごとに1ページ以内】			
※事後評価結果を貼付してください。			
がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン 取組概要及び最終評価結果			
	整理番号	15	
大学名	九州大学、久留米大学、産業医科大学、福岡大学、福岡県立大学、佐賀大学、長崎大学、熊本大学、大分大学、宮崎大学、鹿児島大学、琉球大学 (計12大学)		
プログラム名	九州がんプロ養成基盤推進プラン		
事業推進責任者	九州大学 大学院医学研究院長 [REDACTED]		
取組の概要			
<p>「九州がんプロ養成基盤推進プラン」では、九州大学を含めた九州の医療系12大学により、地域医療機関や行政、医師会等と連携し、九州全域におけるがん専門医療人養成のための教育・研究基盤の構築を推進した。各大学に配置したコーディネーター教員を中心に「九州がんプロ養成基盤推進協議会」を組織して事業運営の意思統一を行い、各種事業を円滑に実施した。また、九州・長崎・鹿児島の3大学に新設した講座により、広域に及ぶ大学間のスムーズな連絡調整が可能となった。</p> <p>全事業期間を通じて、合宿形式の研修会をはじめとした対面での交流に加え、e-learnig・テレビ会議システム等のツールも効果的に利用することで、九州全域における教員・学生のネットワークの拡大・深化を進めるとともに、全域一律の教育の提供を実施し、結果、九州各地にがん専門医療人を養成した。</p>			
最終評価結果			
(総合評価) A 教育の活性化が促進され、がん専門医療人の養成が推進された。			
推進委員会からのコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等			
<p>○地域性を考慮して、離島・へき地の医療機関に大学院生を派遣し実習を行うなど、地域がん医療に必要な教育に積極的に取り組むとともに、研修会と連動させ、その成果を浸透させるなど、地域医療への貢献に向けて積極的な取り組みを推進している。</p> <p>○早期から事業の継続性を意識し、予算確保等の補助期間終了後の活動基盤の整備・構築に向けた取組を推進している。</p> <p>○早期に外部評価等の自己点検・評価体制を構築し評価結果に基づき、可及的に対応可能な活動を拡大拡散し成果を上げている。</p> <p>○九州がんプロ全体研修会を定期的に関催し地域活性化と均てん化に努めているほか、西日本のがんプロ拠点を合同して広域をまとめた市民講座を開催するなど、幅広い活動を企画・展開している。</p> <p>○地域の有利性を活かし、韓国との交流の医療機関との交流や欧州腫瘍研究治療機構等の海外機関との連携により履修者の国際的視野の拡大に向けた取組を推進している。</p> <p>●九州地区全体を意識した事業だが、連携大学間で活動の幅や程度に地域差が見られたことから、大学間の有機的な連携を行い、すべての大学がそれぞれの役割分担を果たすような実効性のある運営体制を構築する必要がある。</p> <p>●専門資格取得に直接・間接的につながる活動の企画が不十分であり、今後、対応策の検討が望まれる。</p> <p>●離島・へき地対策が一部地域に限られ、九州地区という全体から見た対策が不十分である。また、特に離島・へき地への対応として期待されるホームページやSNSによる情報発信が不十分であり改善の必要がある。</p>			

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学
⑥他の公的資金との重複状況【2ページ以内】	
<p>※当該申請大学等において、今回申請している内容以外に、文部科学省が行っている大学改革推進等補助金、研究拠点形成費等補助金等、国際化拠点整備事業費補助金又は独立行政法人日本学術振興会が行っている国際交流事業の補助金等による経費措置を受けている取組がある場合、また、現在申請を予定している取組(大学教育再生加速プログラム等)がある場合は、それらの事業名称及び取組内容について、1事業につき3～4行程度を目安に記入すること。その中で、今回の申請内容と類似しているものがある場合には、その相違点についても言及すること。</p> <p>また、独立行政法人日本学生支援機構平成30年度海外留学支援制度(協定派遣・協定受入)に選定されたプログラムがある場合には、本事業の申請内容との関連について必ず明記すること。</p>	
【現在経費措置を受けている取組】	
<p>1. 「地(知)の拠点大学整備事業(COC)」(大学改革推進等補助金)(支援期間:平成26年度-30年度)</p> <p>鹿児島県内の官学が協働し、地域活性化に向けた雇用創出や地元活性化を目指す取組みを行う事業である。本申請事業との関連性はない。</p>	
<p>2. 「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」(大学改革推進等補助金)(支援期間:平成27年度-31年度)</p> <p>鹿児島県内の産官学が協働し、地域活性化に向けた雇用創出や学生の地元定着率向上を目指す取組みを行うとともに、地域活性化を担う人材を養成するための教育カリキュラムを構築する事業である。COC+事業を引継ぎ拡大する事業として、本学概算要求予算で「地域人材育成プラットフォーム」を構築し、このうちの「かごしまグローバル教育プログラム」修了要件単位として本申請事業の一部の授業を含める予定であるが、「かごしまグローバル教育プログラム」とCOC+事業との経費の重複はない。</p>	
<p>3. 二国間交流事業共同研究(日本学術振興会)</p> <p>「STEM教師教育と社会連携ー「すべての人にSTEMを」を促進するための日独研究ー」(採択年度:平成30年度)</p> <p>本研究は、初等中等教育学校のSTEM教師の職能開発と社会連携の方法の解明を目指し、日本・アメリカとの比較に基づき、ドイツのシュエララボアやMINTシュエレに着目して、ドイツのMINT教育の推進方策の基本的な枠組みを探ろうとするものであり、本申請事業との関連性はない。</p>	
【現在申請を予定している取組】	
なし	
【独立行政法人日本学生支援機構平成30年度海外留学支援制度(協定派遣・協定受入)】	
<p>同制度で本学が採択された12プログラム中、下記5プログラムが本事業と関連する。いずれも派遣プログラムであり、派遣先大学と派遣前・後に本事業で新たに導入するCOIL授業を実施する。本事業が申請する学生支援経費は、航空賃と海外旅行保険費用に充当するため、JASSO海外留学支援制度による学生支援経費との経費の重複はない。</p>	
<p>1. 「地域社会のグローバル化に資する人材育成プログラム」</p> <p>シンガポール、中国、タイ、台湾において、国境を越えた人的ネットワークに立脚しつつ多様な文化を尊重し、他者と協調しながら様々な課題にチャレンジして地域社会に新たな価値を発見し、イノベーションを起こせる人材育成を実現する。</p>	
<p>2. 「国際水準を満たす臨床獣医学教育のための研修派遣プログラム」</p>	
<p>3. 「ボーダレス獣医学教育を目指したアジア獣医学教育体験研修プログラム」</p> <p>上記2と3のプログラムは、獣医師ライセンスの国際認証を視野に入れ、次世代の獣医学部の学生を対象とし、ジョージア大学(米国)、中興大学(台湾)の獣医学部における臨床教育プログラムに参加するものである。</p>	
<p>4. 「全学的カリキュラムとして実施する国際プロフェッショナル人材育成プログラム」</p> <p>米国カリフォルニア州にて大学研究室や企業訪問、NPOでのインターンシップやボランティア、国際コミュニケーション能力や国際社会で活躍するプロフェッショナルになるためのスキルを身につけさせ、国際社会で活躍しうる人材の育成を目的とする。</p>	

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)

大学等名	鹿児島大学
<p>⑥他の公的資金との重複状況【2ページ以内】</p> <p>※当該申請大学等において、今回申請している内容以外に、文部科学省が行っている大学改革推進等補助金、研究拠点形成費等補助金等、国際化拠点整備事業費補助金又は独立行政法人日本学術振興会が行っている国際交流事業の補助金等による経費措置を受けている取組がある場合、また、現在申請を予定している取組(大学教育再生加速プログラム等)がある場合は、それらの事業名称及び取組内容について、1事業につき3～4行程度を目安に記入すること。その中で、今回の申請内容と類似しているものがある場合には、その相違点についても言及すること。</p> <p>また、独立行政法人日本学生支援機構平成30年度海外留学支援制度(協定派遣・協定受入)に選定されたプログラムがある場合には、本事業の申請内容との関連について必ず明記すること。</p>	
<p>5. 「ひっ飛び！進取の気風派遣留学プログラム」</p> <p>1学期以上1年以内、学術交流協定校に派遣留学する全学対象プログラム。留学準備活動や留学中の記録と報告、留学後の総括等を行う事前・事後授業を設け、派遣候補生と外国人留学生の協働学習・タンデムラーニング、協働学習と自己分析による留学目的の明確化と改善、留学ポートフォリオ作成、留学体験を留学前学生に伝える循環型啓発活動を単位化している。</p>	

(大学名:鹿児島大学)(タイプA 主たる交流先の相手国:米国)